

平成 17 年度 徳島大学 総合科学部 榎田ゼミナール ゼミ論集

生活の中の相互行為

目次

まえがき	檜田 美雄 1
施設内コミュニケーションの相互行為分析 — 身体の意味に注目して—	林 佑香 3
「自己コントロール」の成功としての嗜癖* — 理論的考察および若干の経験的例証	佐々木 実花 23
就職支援室における相互行為分析	田中 文恵 49
あるセルフ・ヘルプ・グループを運営すること — ある心身障害者家族の会を例にして—	正島 祐子 63
貧困問題の現代的位相	中恵 真理子 83
付録	
50 音社会学	89

執筆者一覧

総合科学部人間社会学科 4年（地域システムコース）

佐々木 実花（ささき みか）

正島 祐子（しょうじま ゆうこ）

林 佑香（はやし ゆか）

総合科学部人間社会学科 4年（現代国際社会分野）

田中 文恵（たなか ふみえ）

総合科学部 科目等履修生

中恵 真理子（なかえ まりこ）

指導教官

榎田 美雄（かしだ よしお）

[kashida.yoshio@nifty.ne.jp]

まえがき

徳島大学総合科学部人間社会学科・社会学研究室
助教授 榎田美雄 (kashida.yoshio@nifty.ne.jp)

1

平成 17 年度の榎田ゼミ（4 年次生 4 名、科目等履修生 1 名）では、エスノメソドロジー（養護老人ホーム内相互行為分析、就職相談室内相互行為分析）と、広い意味での福祉社会学（嗜癪研究、セルフヘルプ・グループ研究、生活保護研究）をテーマとした研究活動をおこなった。3 年生がいなかったため、後期は研究発表を中心としてゼミ運営をおこなった。徳島大学総合科学部人間社会学科の特徴は「4 年次にもゼミが成立する」ところにあると思っているが、その本学のなかでも目立って作業量・思考量の多い研究成果が得られていると言えるのではないだろうか。また、この論文集に掲載された諸研究が「青春の思い出」的センチメンタリズムをほとんど持っていない点も我々が自負しているところである。「こんなに努力しました。結果はともあれ努力をほめて下さい」という甘えのない、あくまで「学問的成果が得られているか否かで勝負します」という態度・志向性のもとで、4 年間の学生生活の締めくくりがなされているように思うのだが、読者の皆様の読みではどうだろうか。忌憚のないご批判を頂ければ幸いである（上記電子メールアドレスへどうぞ）。

なお、最近、学部生に対する研究指導のあり方に関して多少思うところがある。その点について少しふれておこう。大学が大衆化する中で、そして、大学の知の威信が低下する中で、学生に研究へのモチベーションを持ち続けてもらうための新しい方策が必要とされている。これは確かなことだ。そして、その有力な戦術のひとつとして「青春の思い出としてがんばれ」と促す路線が存在することは否定し得ないことだろう。学生は教師からの影響よりも友人たちからの影響を大きく受ける存在になってきており、その時「青春の思い出戦術」は有効に働くからだ。けれどもそれでよいのだろうか？、と私は思うのである。徳島大学社会学研究室では、学生に調査をすることを強く勧めている。学生が理論より対象に関心を持ちやすい傾向にあること、徳島という土地が調査に有利であること（住民の方に大学の研究に協力しようという雰囲気はまだ残っていること）がこの我々の方針の背景にある。しかし、この「調査誘導路線」を「青春の思い出路線」と組み合わせると、「探検家的研究」、「ジャーナリスト的研究」に流れやすくなる傾向が出てしまうのではないだろうか。そうなることを私は危惧する。「こんな珍しいことを発見しました」という「探検家的研究」、「こんな世の中に役に立つ主張ができました」という「ジャーナリスト的研究」に流れてしまうのでは、せっかく大学にきて、学問と結びつけて調査をする意義がないと思う。そういう方向の研究では、大学でしか身に付かない知的能力の錬成に役に立つことが少ないからだ。普通には「発見」といえないことを「発見」として主張する「知的な構想力」を鍛えること、普通には「有用」と思えない主張の「有用性」をデータの中に模索する「知的な忍耐力」を育むこと、これらこそが大学でなされるべきものはずだ。本冊所収論文でいえば、例えば 2 番目の佐々木の研究は、普通には「発見」といえないもの（中途半端なダイエットとスポーツジム通いを継続している中年女性による、いいわけ混じりの曖昧な理由付け）を、バランス感覚に富んだ、やり過ぎにも、あきらめにも陥らないための「人生の知恵」、「新しい秩序 = 嗜癪*」として「発見」している。この「力わざ」をうらづける知的構想力こそ、大学で身につけるべきものではないだろうか。また、1 番目の林の研究は、普通には「有用」と思えないもの（養護老人ホームにおける高齢者の奇妙な自己呈示、すなわち、爪を切ってくれる施設職員に対して、血が出るまで深爪をすることを許諾するという無茶な寛容さの表示）を、施設収容者の誇りの表示として、何も持たないものの「身体」を賭けた「矜持」の開陳として見いだしている。このようなそれこそ「無茶」な主張をなんとか説得力あらしめようと手を変え品を変えデータをいじり回す、そういう知的忍耐力こそは、大学が養成すべきものではないだろうか。他のゼミ員にもここで書いたような質の知的訓練（知的構想力をもったテーマ設定、知的忍耐力をもったデータ処理）は多かれ少なかれなし得たと思う。掲載論文のすべてが論文としての完成度が高いわけではない。それは認めよう。しかし上記のような質をもってはいるのではないが、それゆえ、少なくとも大学教育の方向性に疑問をもって迷っていらっしゃる方々には、熟読吟味に値する、参考となる諸論文にはなっているのではないかと、そのように愚考して推薦する次第である。

慣例に従い、扱ったテキストを列挙する。輪読した論文と副読本は以下の通り。

- 1) フロイト 1940『精神分析入門（正・続）』人文書院（第一部錯誤行為中の第 1 講序論と第 2 講錯誤行為の部分のみ）。(知的構想力の例として)
- 2) 天野武 2004「リストカットにみる自己確認と自己表出の身体への転位」 in 『現代社会理論研究』14号:318-330。
- 3) マイケル・リンチ 1997=2000「コンテクストのなかの沈黙」 in 『文化と社会』第 2 号:6-36。
- 4) 福重清 2004「セルフヘルプ・グループの物語論的效果再考：「回復」することの曖昧さをめぐって」 in 『現代社会理論研究』14号:304-317。
- 5) 秋葉昌樹 1995「保健室における『相談』のエスノメソドロジー的研究」 in 『教育社会学研究』57:163-181。
- 6) 岡田光弘 2005「身体の動きの表象を『自然に』読むということ：エスノメソドロジー研究によるテキスト分析」 in 『メディアとことば』2号:136-157。
- 7) 石川洋明 1988「自意識の悪循環過程をめぐって」 in 『ソシオロゴス』(12):100-115。

なお、授業期間中を通じた副読本として、山崎敬一編 2004『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣、山崎敬一・西阪仰編 1997『語る身体・見る身体』ハーベスト社、好井・山田・西阪編 1999『会話分析への招待』世界思想社、上野直樹『仕事の中での学習 - 状況論的アプローチ -』東京大学出版会、および、サーサスほか 1989『日常性の解剖学 - 知と会話 -』マルジュ社などをつねに参照・利用した。

本ゼミ論集は、そのタイトルを『生活の中の相互行為』としている。ひとびとはみずからの生活自身をとても緻密かつ詳細に組み立てて、秩序化している。その様相を捉えるべく 5 人のゼミ員は 1 年間努力した。調査が計画通りに進んでいないことを叱責したこともあるが、結果としてはいずれも「調査に基づいた」、「学問的成果」をあげ得ていると言えるのではないだろうか。なお、編集に関しては、まず

第1部と第2部を分け、第1部を論文篇、第2部を「50音社会学」篇とした。第1部の内部では、その前半にエスノメソドロジ的研究、後半に福祉社会学的研究を置くようにした。冒頭の林論文から読んでいくとエスノメソドロジーに関しての基礎知識がない方にも読めるように林論文の2節は若干丁寧に書かれている。次項ではこの編集順に簡単な紹介をすることとしよう。

2

以下全掲載作品について、编者としてのコメントを付し、読書案内としたい。

(1) 林論文(「施設内コミュニケーションの相互行為分析 - 身体の意義に注目して - 」)について。

上述したように、この論文は「一見意味がなさそうな発言にも意味がある」という主張をデータ処理を工夫しながら論じた論文である。精神病院に、職員の添い寝等の「タッチシステム」があることは広く知られているが、ここでは、老人保健施設に「身い切ってええでシステム」と呼べるようなシステムがあるのではないかと、という仮説が呈示され検討されている。爪を切る/切らせるという関係では、爪を切る側が一方的なサービス提供者となっているように見られがちだが、身体侵襲を許容する程度を上げる、という方略によって、「被サービス提供者」である「収容者」もまた一種の「サービス提供者」(すくなくとも配慮する者)になりうる。このような逆転がどのように受け入れられているか(あるいは受け入れられていないか)という研究はまだわが国ではほとんどなされていないのではないだろうか。施設内人間関係を、施設職員をあらかじめ権力者と決めつけて分析する類の研究では見えてこない、より実態に近い施設内秩序の様相を発見した研究として評価できるものになっていると思う。

(2) 佐々木論文(「『自己コントロール』の成功としての嗜癖* - 理論的考察および若干の経験的例証 - 」)について。

佐々木の主張は、ガーフィンケルの主張とパラレルである。エスノメソドロジーの創始者H.ガーフィンケルは、平和だけでなく、闘争状態もまた「秩序」であると主張した(ガーフィンケルの博士論文である『他者の知覚』を参照せよ)。そして、「安定している」とか「落ち着いている」という質がない状態であっても、そこに参加者の場面理解の共有がある状態を、「秩序*」(*は、アストリスク)と名付けた(と記憶している = 今手元に資料がなく詳しく述べることはできない)。佐々木の「嗜癖*」も同じような論理操作の結果得られた概念である。すなわち、「嗜癖」の要件から「本人も困っているやめようと思っている」という質を除いてもなおまだ「嗜癖」と言えるのではないかと考えているのである。そのように考えたとき、当該の「耽溺」は「嗜癖*」と呼ばれることになる。この「耽溺」が単なる「習慣」とどこが違うのか、に関しては本文を読んでもらうしかないが、あり得る主張ではあると思われた。少なくとも、なされてよい「テーマ設定」であり、このテーマがインタビューに基づいて「例証」されようとしていることは、やはり高く評価してよいのではないだろうか。

(3) 正島論文(「セルフヘルプ・グループを運営すること - ある心身障害児家族の会を例にして - 」)について。

本論文は、とりあえずは、リーダーシップ論として読まれるものである。ある心身障害児家族の会の有能なリーダーAさんのリーダーシップによって、この組織はその潜在力を十全に発揮し、地域での有力かつ有名な団体に組織を育てている。そこでは、メンバーとなっている子供たちの障害の種類が雑多であることもまた活動の力とされ、業務が役員にこなされなければならない程多いことは「全員役員制」という活動民主化の根拠とされた。しかし、そのようなリーダーシップがどのようにして発揮可能となっていたのか、という組織文化論に展開していく内容(その種子)もまた本論文の中に含まれており、そこもまた評価されてよいだろう。同類の他組織との関係や保健所との関係などさらに探っていくべき今後の研究の方向に関する指針も読み取り可能であり、将来の発展可能性のある論文になっていると思う。

(4) 田中論文(「就職支援室における相互行為分析 - 」)について。

これも多面的に読める論文である。純粹にエスノメソドロジー研究として、場面をいかに終わらせるかの研究としても読むことはできる。けれども、もうすこし一般的社会学の課題に惹き付けて「複数課題がある場面を人はどのようにして生きているか」という研究としても読むほうがおもしろいだろう。就職支援室の2つの課題、すなわち「訓練をして、学生の対人コミュニケーション能力を高める」という課題と「慰めて、今の自分の能力・状況を受け入れてとにかく打って出るように、前向きになるように学生をし向ける」という課題とは、同時に達成するには困難な2課題である。この2つをどう組み合わせることで現場が秩序だっているのか、それなりの発見がある論文になっていると思う。

(5) 中恵論文(「貧困問題の現代的位相」)について

もし、世帯単位での管理から、個人単位での管理に、行政の住民管理の仕方が変わってきているとするならば、生活保護の受給者になる、という経験の質もその管理手法の変化にあわせて変わってきているはずである。「格差社会化」が進行しているといわれる2006年の今、この課題に取り組もうとしただけでも評価されてよいのではないだろうか。研究途上で執筆者本人の骨折というような思わぬアクシデントがあり、インタビューの補充等が十分になされていない悔みはあるが、問題提起と構図呈示の意義は十分にあるといえるのではないだろうか。

(6) 50音社会学

12年前に筑波大学で技官という職についていた頃から、「いつかゼミで50音社会学をやりたい」と考えていた。酒席のお遊びに岡田光弘氏(国際基督教大学ほか)とはじめた「50音社会学」であるが、やっていく内に、“このように「いろはがるた」(犬棒かるた)の社会学版を作る作業は、学生の社会学的センスを向上させるのに絶対に有用であるはずだ、”と思われたのである。今年ついに、念願かなって、夏休みを中心としての期間にこの作業を学生とおこなうことができ端的にうれしい。残念なのは、文章作りの中で出た多様な議論が最終掲載文にあまり反映されていないことである。できあがった文章よりもそういう途中の、自らの経験や理解を開陳しあうような話し合いが意味があるし楽しい、というのが私の主張である。来年以降も続けて、数年後には「決定版 50音社会学」を再度世に問いたいと思っている。

= 謝辞 =

今年もまた多くのかたの助力をえてゼミ運営を行うことができた。とりわけ、立教大学大学院の酒井信一郎氏には、ご来徳の折りにゼミでの長時間討論にも参加してもらい、たくさんの助言を賜った。ここに記して感謝する。

施設内コミュニケーションの相互行為分析 身体の意義に注目して

林 佑香

0. はじめに

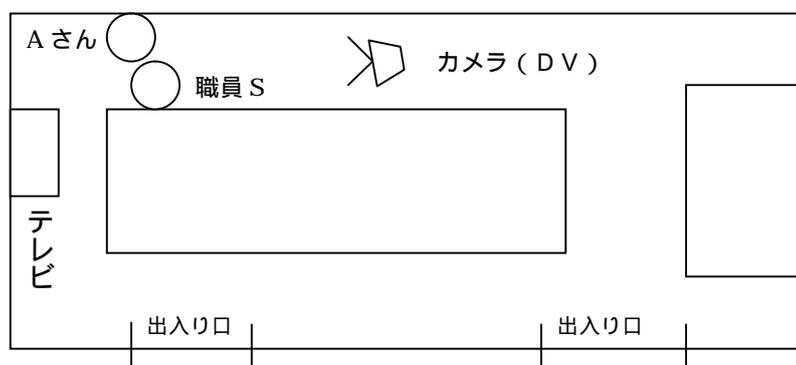
養護老人ホームで暮らす人々（高齢者）は、「施設で生活する」ということをどのように実践・達成しているのだろうか。この論文では、養護老人ホームという施設内における入居者や職員を含む人々の相互行為を観察・分析することによって、そこで何が起きているのか、どのようにしてその場面が達成されているのかを詳細に記述していく。そこから、管理された、世話をしてもらおう等、何かをしてもらっただけではない、これまでの老人ホームにおける高齢者のイメージだけでない入居者の姿、「施設で生活する」ことの実際を、養護老人ホームにおける相互行為の一側面から提示できればと考えている。

1. 調査概要

A県（仮名）内にある養護老人ホームZ園（仮名）にご協力いただき、調査をさせていただいた。

2005年9月8日（木）9:00~16:00に、Z園にてビデオ撮影を行った。養護老人ホームZ園は、おおむね65歳以上の方で、自分のことは自分でできる老人を受け入れ、生活の場を提供している施設である。約90名の入居者が生活しており、居室は一人部屋である。

分析する場面は、入居者たちが一部屋に集まり、入浴の順番を待っている場面である。Z園では、月曜と木曜が入浴の日と決まっていて、朝9:00くらいから順番に入浴する。入居者たちは、自分の番が来るまで風呂場近くの部屋で時間を過ごす。その部屋での入居者たちは、入居者同士、または職員と会話をしたり、テレビをみたり、職員に爪を切ってもらったり等、様々な過ごし方である。カメラはDVカメラを使用した。（図1参照）



【図1：入浴を待つ部屋の配置図 2005.9.8】

2. 先行研究

2-1. エスノメソドロジーについて

本稿では、老人ホームにおける相互行為をエスノメソドロジー的視点から分析する。そこで、エスノメソドロジーについて説明しておきたい。「エスノメソドロジー」という言葉はガ・フィンケル (Garfinkel, H) による造語であり、「人々が日常的な実践を行う際に用いる方法論を意味すると同時に、そうした人々の方法論 (エスノ = 人々の、方法論 = メソドロジー) を研究する研究アプローチを意味している」(浜, 2004: 1)。つまり、研究対象もエスノメソドロジーであり、その研究自体もエスノメソドロジーなのである。そして、具体的現象を達成している人々の実践を、相互反映性 (reflexivity) と文脈依存性 (indexicality) を備えたものとしてとらえ¹、その相互反映性と文脈依存性に即して記述することが、エスノメソドロジーである。すなわち、エスノメソドロジーは、人々の実践を一般化するのではなく、ある特定の場面にある人々 (参加者) が、どのようにその場면을達成しているのかを詳細に記述し、明らかにすることなのである。よって、分析者は、研究対象について、その活動が正しいのか正しくないのか、真正のものなのか、そうでないのか、などについて判断することには、関心を持たない「エスノメソドロジー的無関心」(水川・池谷, 2004: 48) の態度を基本とする。

本稿では、以上のようなエスノメソドロジー的視点に基づき、分析を行う。老人ホームという施設内において、参加者たちはどのようにして場면을達成しているのか、会話だけではなく、視線や動作など非言語的な相互行為も含めて分析する。また、分析場面を通じて見えてくる社会や人々の実践を明らかにしていく。

2-2. 医療場面における身体の扱われ方

私たちの社会では、通常、他人の身体についてじっと見たり、触れたりするという行為は、むやみやたらに誰にでも行ってよい行為ではないとされている。例えば、初対面の相手の身体いきなり触れることは、いささか非常識であると思われる。また、私たちは小さい頃から、他人にむやみに暴力を振るうことはいけないことだと教えられてきたし、他人の身体を傷つける行為は犯罪にもなり得る。よって他人の身体への侵襲行為は、トラブルの可能性を含むものなのである。そしてこれらのことからいえることは、身体というものは、個人がもつ大きな資源であるため、私たちの社会では、身体は慎重に、大切に扱われるべきものであるという認識・前提のもと、互いに尊重しあっているのである。

しかし、医療の場面においては、その場面の課題 (患者の身体を診察し、治療する) に

¹ 「ある社会秩序について記述している記録が、それ自体、それが記述しているところの社会秩序の一部であるという、記録と社会秩序の間のこの循環的な関係を、ガーフィンケルは『相互反映性 (reflexivity)』呼ぶ。また、それゆえに同じ記録であっても、記録が行われる状況やそれが利用される状況に応じて、その意味が変化することを、『文脈依存性 (indexicality)』と呼んだ」(浜, 2004: 11)。

関連して、身体は焦点化されやすい(高山 1995)。

他人の身体を見たりさわったりすることは、通常、親しい間柄にもなかなか認められない。しかし、医者は職業上、こうしたことが認められており、診察の相互行為において、患者に対し、しばしば行われている。しかし、それにしても、身体の診察は常に、当惑を引き起こす可能性を持っている。このため、医者は、患者が服を脱ぎ着するところを見ないように努力し、患者は服を脱ぎ着するときに医者を見ないように努力する。当惑は、他人が自分の身体を単に見るだけでなく、他人が見ているのを見てしまうことによって生じるからである。また患者は、身体を診察されるとき、自らの身体を物体のように提示する。何かに視線を向けるということは、向けられた対象や活動への関与が焦点化することでもあるので、極力、明らかな視線を向けないように努力されるのである。患者が自分の身体をもののように提示するために用いる手段の一つが、視線を宙に向けるといった動作である。これは、自分の身体になされていることに無関心であるという表示であり、この動作によって、身体に診察が行われているということが焦点化されずにすむのである。しかしまた患者は、診察に無関心であることを表示する一方で、なされていることに注意を向けているのは明らかである。そのことは、医者の診察行為に対して、それに応じるタイミングが微妙に調整されていることからわかる。そして、これによって、診察のスムーズな流れが達成されているのである。(高山、1995：109-110)

身体を慎重に扱わなければならない、という我々の社会の前提に対して、身体への侵襲が避けられない医療場面において、身体が焦点化されることから起こりうるトラブルを避け、診察という場면을スムーズに達成するためのテクニックが、患者側に用いられているのである。医者は患者が服を脱ぎ着するところを見ないようにしているという医療側の配慮もみられるが、診察中は患者が視線を宙に向け、医療の対象部分について自分は無関心であることを表示することで、自分の身体をもののように提示し、身体の焦点化を避ける行為がなされていることから、診察場면을スムーズに達成するための工夫は主に患者側によって行われていると考えられる。

<p>社会的前提 : 身体は慎重に扱われるべき、相互不可侵の権利</p> <p>医療場面の特徴: 身体への侵襲がある</p> <p style="text-align: center;">トラブルの可能性</p> <p>トラブルを避ける (診察場面をスムーズに達成する) テクニック</p> <p>医療側: 患者が服を脱ぎ着するところを見ないことで身体の焦点化を避ける</p> <p>患者側: 視線を宙に向ける行為 (中空視線) により、自分の身体をもののように表示し (身体のモノ化)、身体の焦点化を避ける</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 診察という侵襲の場面においては、身体の焦点化を避けるテクニックは主に患者側によって用いられている ・ 侵襲の権利は非対称的である。・・・医者が患者に侵襲する権利があり、それは患者の協力によって可能となっている。しかし患者から医者に侵襲する権利は認められていない。

【図 2 : 医療場面における身体の扱われ方。(高山 1995 : 109 に基づいて林が作成)】

2 - 3 . 施設 (精神病院) 内にみる身体の扱われ方

精神病院を 1 つの施設として捉え、施設内における身体の扱われ方に焦点を当てて見ていくことによって、施設内の秩序、施設らしさというものが分かるのではないだろうか考える。

山田 (1991) によれば、山田が調査を行った精神病院 UN 病院では、入院患者と看護婦との距離のことを「治療的距離」と表現し、「治療的距離」というカテゴリーは、スタッフと患者との距離をできるだけ「家族的」で「親密な」ものにする努力が病院内でなされていることを指すように見えると述べている。すなわち、UN 病院では、スタッフと入院患者との距離をできるだけ近いものとし、家族的親密感を作り出すことが理想的な精神科看護であるとし、実践されているのである。その実践の一つとして、「タッチ・システム」(Goffman、1967=2004 : 74) があると述べられている。それは、「いくつかの同じカテゴリーの人びとが相手に対する自分の愛情と親密さを表現するために、相手と身体接触をする儀式」(Goffman、1967=2004 : 74) である。ここで、Goffman による「タッチ・システム」についてももう少し詳しく記述しておく。

この儀礼では、看護婦が患者に対して身体接触をするケースがいちばん多かった。とはいえ、看護師、患者、看護婦が、タッチする権利ではひとつのグループをつくって、そこではその権利は対称的であった。それらの人びとはだれでも、自分と同じ

種類の他人、あるいは自分と異なる種類の他人に触れる権利をもっていた。(事実、遊びのとっくみあい、腕相撲などのタッチ行為は基本的に対称的である。)もちろん、病棟にはこのシステムを嫌う人もいた。いたけれど、だからといって、このシステムに入っていたいという人たちの権利が妨げられることはなかった。(Goffman、1967=2004 : 74)

ここでは「タッチ・システム」は、看護師と患者間において対称的であると述べられていることが、ひとつのポイントであるといえるだろう。しかしこの精神病院においては、病院内のすべての人にとって身体接触の権利が対称的というわけではなかった。非対称の例として挙げられているのは次のようなことである。

A病棟では、対称的な身体接触関係に加えて、非対称的な関係もいくつかあった。医者は友好的な気持ちを伝える手だてとして、別のランクの人たちに触れていたけれど、当の別のランクの人たちのほうは、自分のほうから医者タッチするなどは論外、医者のタッチにタッチで応じるのだって失礼だと感じているようだった。(Goffman、1967=2004 : 75)

つまり、病院内では看護師と患者がタッチする権利についてはひとつのまとまりとして対称的であるが、医者と患者の関係においては医者から患者への一方的な侵襲であり、非対称的な権利なのである。そして「タッチ・システム」からいえることは次のようなことである。

アメリカの多くの病院で見られるようなタッチ・システムが今後も維持されるものなら、そして、あの病棟の人たちが、その儀礼システムによってつくられる容認と支持を今後も受けるものならば、今後その病棟に入院したり病棟で仕事する人たちは、ただし医者以外の人たちは、すでに病棟にいる人たちとうまくやってゆくためにそのシステムに順応しなければならない、ということである。わたしたちの社会にある他の多くの組織で要求され維持されている距離と相互不可侵の権利は、その病棟では望むべくもない。というのも、タッチ・システムは、他人との身体的な距離を保っておく権利を個々人が放棄する条件においてのみ成立するからである。(Goffman、1967=2004 : 75)

以上のことから、「タッチ・システム」は、相手に自分の愛情と親密さを表現するという性質があるといえる。しかし「タッチ・システム」を捉えるうえで注目すべきだと私が考える点は、「タッチ・システムは、他人との身体的な距離を保っておく権利を個々人が放棄する条件においてのみ成立する」(Goffman、1967=2004 : 75)という点である。言い換え

れば、相互不可侵の権利が成立している場面においてのみ、「タッチ・システム」は可能になるのである。そのことはつまり、「タッチ・システム」はその場面や状況における秩序と密接に関わりあっているといえるのではないだろうか。例えば、山田（1991）によれば、UN病院ではナースが「不安な患者さんが眠りにつくまで添い寝するといったような、スキンシップも見られた」（山田、1991：201）とある。世間では一般的に、他人に添い寝はしない。それは、世間一般の規範として相互不可侵の権利が成立しているからである。にも関わらず、ナースが患者に添い寝することで、「タッチ・システム」が成立するのである。つまり、「タッチ・システム」はそれぞれの場面の秩序のひとつであり、社会における人々の秩序の認識を表しているシステムであるともいえるのである。「タッチ・システム」は愛情と親密さを示すものではあるが、決して誰に対しても自由に行為できるものでもないのである。Goffman（1967=2004）が「タッチ・システムが今後も維持されるものなら、そして、あの病棟の人たちが、その儀礼システムによってつくられる容認と支持を今後も受けるものならば、今後その病棟に入院したり病棟で仕事する人たちは、ただし医者以外の人たちは、すでに病棟にいる人たちとうまくやってゆくためにそのシステムに順応しなければならない、ということである。」（Goffman、1967=2004：75）と述べているように、参加者が認識しているか無意識のうちなのかに関わりなく、「タッチ・システム」は、そこにいる参加者たちをひとつの秩序に縛るシステムでもあるともいえるのではないだろうか。

山田（1991）はUN病院において、タッチシステムがもたらす影響について次のように述べている。

たしかにスタッフは総力をあげて、その場その場で患者さんたちの雰囲気を読み取りながら、「治療的距離」を作り上げようとしているのだが、まさに「スタッフと患者との近さ」（タッチシステム）が、とくに患者との心理的近さが（実際の家庭と同じように）暴力を誘発していることも否めないと思われる。（山田、1991：207）

これは、スタッフが暴力的な措置によって、患者の規則違反を叱るなどの場面が比較的多く観察されたことによるものである（山田 1991）。すなわち、「『タッチシステム』は、親密さのひきかえに、個人の相互不可侵のルールを放棄させる」（山田、1991：208）システムであり、そこからいえることは次のようなことである。

家族的親密さの中では、ユニークな個性を表示すること、たとえば、自分の身だしなみに気を使ったり、他人の目を意識したふるまいをすることが重視されない。たとえば実際の家庭を想像してみればすぐわかるが、親と距離をとって、よそよそしく話をしたり、親にさわられるのを拒否したりすると、「どうして、そんな慇懃無礼なことをするんだ」と非難されるのがおちだろう。ということは、確かに家族的親密感は孤独な患者さんの不安を取りのぞき、スタッフが自分に味方しているというメッセージを

伝える可能性をもってはいるが、それは同時に被収容者の自己アイデンティティや主体性を奪っていくことになる。このことはとくに長期入院者には破壊的な作用を及ぼすのではないだろうか。つまり自己の無力化が徹底されるのである。(山田、1991: 208 - 209)

UN病院においては、スタッフが患者を抑圧し、支配するという側面をなくし、家族的親密感を作り出す努力がなされている。その努力が患者にとって良い方向に作用しているという側面もある。しかしながら、その努力が結果的に、患者の自己アイデンティティや主体性を奪っていくことになっているという側面も持っているのである。このことは、収容施設がもつ解決困難な問題点であり、施設のスタッフの苦悩と葛藤でもあるのではないだろうか。

2-4. まとめ

2-1 では、本稿がエスノメソドロジエ的視点に基づき分析・考察を行うにあたり、エスノメソドロジエについての説明を記述した。

2-2 では、医療場面における身体の扱われ方について述べた。医療場面では、相手の身体に触れる行為(侵襲)またはその権利は、医者から患者に対しての一方的なものであり、非対称的であるといえる。そして医者から患者への侵襲は、患者の、中空視線による身体モノ化などのテクニック・協力によって可能となっているといえる。

2-3 では、精神病院という施設内における身体の扱われ方について記述した。精神病院でみられた「タッチ・システム」では、看護婦 患者間における相手に触れる権利は対称的であった。「タッチ・システム」はタッチすることで相手に愛情や親密さを示すシステムであり、その権利は対称的である。しかし「タッチ・システム」は、私たちの社会において一般的な秩序である、距離と不可侵の権利を放棄する条件においてのみ成立するのである。つまり、相互不可侵の権利が成立している場面においてのみ、「タッチ・システム」は可能になるのである。

3. 分析

Z園では、月曜と木曜が入浴の日と決まっていて、朝 9:00 くらいから順番に入浴する。入居者たちは、自分の番が来るまで風呂場近くの部屋で時間を過ごす。その部屋での入居者たちは、入居者同士、または職員と会話をしたり、テレビをみたり、職員に爪を切ってもらったり等、様々な過ごし方である。以下分析していく場面は、入居者Aが職員Sに爪を切ってもらっている場面である。

3-1. 入居者Aによる“過激な”²発言

² 過激という言葉は、爪切りの場面で「自分の身を切ってよい」という発言を聞いたときの

入居者 A が職員 S に爪を切ってもらおう場面は、職員 S が「A さん爪は？」と尋ねる発話から始まる。

入居者 A は、自分の爪を切ろうとする職員 S に向かって「みい切ってよっちゅうのにみい切らんの」(資料、1 頁：22 行目)と発言している。ここでは、みい = 身、であると考えられ、入居者 A は職員 S に、「爪だけでなく肉部分も切ってもいい」という内容の発言を行っていると考えられる。通常相手に「自分の肉部分を切ってもいい」というような発言をすることはなく、一見過激な発言と感じられるとともに、この爪を切ってもらおうという場面において違和感を感じる発言でもある。そして、“過激な” 発言であると感じられた発言は他にもみられた。22 行目の発話の直後、24 行目では「血が出るほど」と発言している。同様に、40 行目の「深爪するんでもええよ」、42 行目の「血が出てもかんまんちゅうの³」、56 行目・58 行目の「血が出てもええっちゅうん」が“過激な” 発言として挙げられる。

ここで、老人ホームの施設内で、職員が入居者の爪を切るというという場面において、職員が入居者の爪だけではなく、身(肉)の部分も切ってしまう、おまけに血が出るという事柄は最も起きてはならない事柄の一つ(タブー)であり、職員は身まで切ってしまうよう、細心の注意を払っているはずだと考えられる。その場面において、「身を切ってもいい、血が出てもいい」と発言することは、施設内でのタブーを職員に分かるように表示し、強調することとなる。例えば病院では、「医療スタッフと、短い期間内で死が予測されている若い患者との対面的なやりとりにおいて際立つことは、遠い将来の話を注意深く避けようとする努力である」(Sudnow、1967=1992:120)。この場合、将来の話をすることは、近く訪れるであろう死を表示し、強調することとなるのである。すなわち、入居者 A の「身を切ってもいい、血が出てもいい」という発言は、職員 S が入居者 A の肉部分まで切ってしまうことを表示し、強調するものであり、職員 S にプレッシャーを与え得る発言なのである。職員 S からすれば、爪切りを達成することが課題であるこの場面において適切ではないと判断される発言である。職員 S の、23 行目「みい切ってどないすんの、痛いだけや」や 43 行目「怪我したら痛いんは痛いんよ」と入居者 A の発言を非難している発話や、59 行目の沈黙といった行為から、入居者 A の過激な発言を容認していないことがみてとれる。よって、A の過激な発言は、爪切りの場面において不適切で奇妙なもの、またはトラブルのもとであると感じられるのである。また、我々は、自分の行為のある部分がそこに居合わせた人々に知覚されていると半ば意識すると、それが公共的な意義をもつことを自覚して、適切と思われる形に修正しようとする(Goffman 1963=1980)。しかし入居者 A に関してはそういった行為が見られることがなかったため、入居者 A の発話はその場面において場違いなものとして、違和感のあるものとして私たちの前に浮かび上がったとも考

私個人の発話への印象であるため、“ ” で閉じた。また、この場面をみた大抵の人は同じような感想を持った。しかし発話自体が過激か過激でないかを本論文では焦点としない。

³ 「かんまん」とは方言で「構わない」という意味を持つ。よって「血が出てもかんまんちゅうの」は「血が出ても構わないと言っているの」という意味であると考えられる。

えられる。

しかし、この“過激な”Aの発言によって一見トラブルのように見える二人の会話場面であるが、二人の会話は「会話の順番取りシステム⁴」にのっとって最後まで行われていることから、最終的にはトラブルが乗り越えられたということになる。結果、Aの爪も無事切られていることから、トラブルがどうにかして乗り越えられ、この爪を切るという場面が協同的に達成されているといえるのである。よって、トラブルのもとであると感じられたAの発言も、この場面において「レリヴァントである⁵（適切である）」と考えられる。では、この爪きり場面はいかにレリヴァントなものとなっているのか、そこで何が起きているのかを以下詳細に分析し、記述していく。

3-2. 「身を切る」という侵襲

ここで、入居者Aが「身を切ってもよい、血が出てもよい」というような内容の発話を行っている会話場面をみていく。

【会話場面 2005.9.8 AM9:56:23~】

- 22 A : みい切ってよっちゅうのにみい切らんの
23 S : そんなみい切ってどないすんの、痛いだけや
24 A : いや、血が出るほど
25 S : 血が出るほど切ったってしゃあないでえ：：=

【会話場面 2005.9.8 AM9:57:03~】

- 40 A : [深爪するんでもええよ]
41 S : 深爪したら [い
42 A : [い、いや血が出てもかんまんっちゅうの] (1.0) 血が出たところから
また伸びてくる
43 S : hahaha 怪我したら痛いんは痛いんよ =

【会話場面 2005.9.8 AM9:58:26~】

- 56 A : 血が出てもええっちゅうん =
((Sの後をCさんが通る))
57 S : ((後を振り返りながら)) いけるで? Cさん通れる?
58 A : 血が出てもええっちゅうん

⁴ われわれの社会における日常会話には2つの大きな特徴があり、1つは「一度にしゃべる人は1人」という特徴、もう1つは「話し手は常に交代する」という特徴である(山崎2004:28)。

⁵ ここでのレリヴァントとは、正しい・真実であるということではなく、その場面で有意味であり、当事者たちも承認しあっているという意味で使っている。

59 S :((Sは無言で作業を続ける))

「身を切ること」が入居者 A の身体への侵襲であると考えれば、これらの「身を切ってもよい」「血が出てもよい」「深爪してもよい」といった入居者 A の発話は、入居者 A が自分の身体への侵襲を許すことを表示しているといえる。つまり、入居者 A から職員 S に対しての、“「身を切る」という侵襲を許す宣言”なのである。しかし、職員 S は、入居者 A の発話に対して、否定的な返事をしている（会話場面 〃、〃を参照）。また、会話場面 〃においては、入居者 A の発話に対して返事はせず、無言である。ここからいえることは、職員 S は、入居者 A の発話の内容「身を切ってもよい」「血が出てもよい」「深爪してもよい」を認めていないということである。

3-3. 「爪を切る」という侵襲

職員 S と入居者 A の会話の始まりは、職員 S による「Aさん爪は？」（資料、1頁：1行目）という発話である。よってこの場面における職員 S の主要な課題は、入居者 A の爪を切ることで考えられる。また、結果的に入居者 A の爪が切られていることから、入居者 A にとっても爪を切るということは、この場面における課題であったといえる。ではこの爪切り場面はどのようにして達成されているのか。「爪を切る」という行為を職員 S による入居者 A の身体への侵襲という視点で、入居者 A と職員 S の発話と、それぞれの行為、視線とを照らし合わせながらみていく。

以下、会話場面（写真1-1~1-7）では、入居者 A による「深爪してもいい」「血が出てもいい」という発話と、それぞれの視線を照らし合わせてみていく。

【会話場面 2005.9.8 9:57:03~】

- | | | | | |
|----|---|---|---|-------------------|
| 40 | A | : | [深爪するんでもええよ | 写真 1 - 1、写真 1 - 2 |
| 41 | S | : | 深爪したら [い | 写真 1 - 3 |
| 42 | A | : | [い、いや血が出てもかんまんっちゅうの (1.0) 血が出たところから
また伸びてくる | 写真 1 - 4 |
| 43 | S | : | hahaha 怪我したら痛いんは痛いんよ = | 写真 1 - 5、写真 1 - 6 |
| 44 | A | : | = 痛ない | 写真 1 - 7 |



【写真 1 - 1 2005.9.8 9:57:03AM】

40A 「深爪するん」

入居者 A の視線は職員 S の顔

職員 S の視線は入居者 A の手の爪



【写真 1 - 2 2005.9.8 9:57:05AM】

40A 「でもええよ」

入居者 A の視線は左斜め上 (中空視線)

職員 S の視線は入居者 A の手の爪



【写真 1 - 3 2005.9.8 9:57:06AM】

41S 「深爪したらいい」

入居者 A の視線は左斜め上 (中空視線)

職員 S の視線は入居者 A の手の爪



【写真 1 - 4 2005.9.8 9:57:07AM】

42A 「い、いや血が出てもかんまんちゅうの(1.0)血が出たところからまた伸びてくる」

入居者 A の視線は職員 S の顔

職員 S の視線は入居者 A の手の爪



【写真 1 - 5 2005.9.8 9:57:13AM】

43S 「hahaha」

入居者 A の視線は職員 S の顔

職員 S の視線は入居者 A の手の爪



【写真 1 - 6 2005.9.8 9:57:15AM】

43S 「怪我したら痛いんは痛いんよ」

入居者 A の視線は右方向 (中空視線)

職員 S の視線は入居者 A の手の爪



【写真 1 - 7 2005.9.8 9:57:16AM】

44A 「痛ない」

入居者 A の視線は右方向（中空視線）

職員 S の視線は入居者 A の手の爪

職員 S の視線は、入居者 A の爪を切っていることから、ほとんど入居者 A の手の爪である。入居者 A は、自分が発話するときは職員 S の顔に視線を向けるが、中空視線も行われている。よって、爪を切るという課題は入居者 A の協力のもと、スムーズに達成されている。すなわち、入居者 A による「身を切ってもよい」「血が出てもよい」「深爪してもよい」という発話は、爪を切る行為を単に妨害するものではないのである。

3 - 4 . 「みい切ってええでシステム」

では、爪切り場面において、入居者 A による発話「みい切ってよっちゅうのにみい切らんの」(資料、1 頁：22 行目)、「血が出るほど」(資料、1 頁：24 行目)、「深爪するんでもええよ」(資料、2 頁：40 行目)、「血が出てもかんまんちゅうの」(資料、2 頁：42 行目)、「血が出てもええちゅうん」(資料、2 頁：56 行目)によって何が達成されているのか。入居者 A によるこれらの発話で、入居者 A が達成していると考えられる事柄は次の二つである。(1) 職員 S に配慮を示す。(2) 入居者 A の主体を表明する。この二つである。よって、「身を切ってもよい」という身体への侵襲を許す内容の発話をすることで、(1)(2) が達成されるこのシステムを、「みい切ってええでシステム」と呼ぶことにする。このシステムの特徴について、医療場面における身体の扱われ方と、施設（精神病院）における「タッチ・システム」の双方の特徴に触れながら説明したい。まず、相手に触れる権利（侵襲の権利）は 2 章でも述べた通り、医療場面では、医者から患者に対しての一方的なものであり、非対称であった。精神病院での「タッチ・システム」では、その権利は看護婦と患者間において相互的・対称的であった。Z 園でみられた「みい切ってええでシステム」では、実際身を切ることが達成されるならば、その行為は職員から入居者に対して行われるので、侵襲の権利は非対称的である。非対称という点では医療場面と同じであるが、医療場面での侵襲の権利と区別される点は次のような点である。それは、侵襲される側に個別の承認権があるか、ないかという点である。医療場面では、医者が患者に触れる行為は、患者の

協力のもとスムーズに行われ、医者の侵襲に対して患者個人に承認権があるとはいえない⁶。一方、「みい切ってええでシステム」は、入居者から職員に対して「身を切る権利」すなわち侵襲の権利を与えられる、といった形をとる。よって侵襲について入居者が承認権を持っているといえるのではないだろうか。

このシステムで達成される事柄について、まず、(1) 職員 S に配慮を示す。について考える。Z 園という施設内では、職員が忙しく業務をこなしている⁷。そういった場面の中で「身を切ってもよい」「血が出てもよい」「深爪してもよい」という発話は、「普通より私を粗雑に扱ってくれても構わない、手早くやってくれて構わない」という意味を持つのである。何十人も入居者がいて、忙しくふるまっている職員に対して「手早くやってくれて構わない」と発話する入居者 A の行為は、職員 S を気遣う行為として成り立つ。つまり、職員が忙しくふるまっている場面で、「身を切ってもよい」と発話することは、職員 S に対して配慮を示すこととなるのである。

また、「みい切ってええでシステム」とは区別されるものであるが、他にも入居者 A が職員 S に配慮を示している発話がいくつかある。職員 S の「切っとくで?⁸」(3 行目)に対して、「かんまんのん?⁹」(4 行目)と気遣う発話である。また、「身を切ってもよい」の理由説明として、入居者 A が「そしたら伸びへんで」(26 行目)と発話していることで、職員にできるだけ手間をかけさせないという気遣いが表示されている。30 行目では入居者 A は「手はなあ、まあまあ、自分でするけんよ、あんた忙しいからかんまん、ちょっと一服し¹⁰」と言っている。ここで「自分でするけんよ」という部分だけ小声であり、職員 S に顔を近づけて言っている。この行為は「あなたにだけ言うんだけど」という雰囲気であり、職員 S に対して「本当はあなたの仕事だけれども、自分でするからいいのよ」という意味にもとれる。そうであるならば、「あなただけに言う」という特別扱いで職員 S に好意を示すとともに、その場の状況を自分で管理しているともいえるのではないだろうか。職員に爪を切ってもらっただけの入居者ではなく、「忙しいのなら切らなくても私はいいですよ」と表示することで、入居者 A 自身の主体が表明されているのである。

次に、(2) 入居者 A の主体を表明する。について考える。上述したように、職員が忙し

⁶ 例えば、腹痛を訴えて診察に来た患者が、医者に対して「腹を触るな」と発言することは診療場面において不適切であるとみなされる。

⁷ 職員が忙しいという根拠は次のとおりである。まず、職員 S はこの日、入居者 A 以外にも入浴を待っている入居者数人の爪を切っている。また、入居者 A による発話「あんた忙しいからかんまん、ちょっと一服し。」からも職員が入居者の目からみても忙しそうにしていることがわかる。入浴のために数十人が 1 つの部屋に集められ、長い人では一時間待つというような Z 園のシステムからも、入浴の順番をスムーズに流すことが優先されているといえるだろう。よって、入居者が、「職員は忙しい」と感じる場面は多くあると考えられる。

⁸ 「で」をつけるのは方言であり、「切っとく？」という意味である。

⁹ 「かんまん」は方言であり、「構わないの？」という意味である。

¹⁰ 「手は自分でするからね、あなたは忙しいから構わない、ちょっと一服しなさい」という意味である。

くふるまっている場面で、「身を切ってもよい」と発話することは、職員 S に対して配慮を示すこととなる。しかし、「身を切ってもよい」という入居者 A の発話内容を、職員 S は認めていない。3 - 3 でも触れたが、「身を切ってもよい」等の発話に対し、「そんなことはしない」という内容の返事で、入居者 A の発話内容に対して否定的なものであった。職員 S にとっては、入居者の身を切るという行為は、職員がすべき行為ではないという認識があったのかもしれない。しかし、これらの職員 S の発話・行為からみえてくるものは、Z 園という施設内の規範である。Z 園において、ベースとなっている規範が、入居者の爪は丁寧に切る、しいては入居者を人として、丁寧に扱う、という規範なのである¹¹。よって、職員 S は、ベースとなる規範に反するような入居者 A の発話を、認めることができなかったのである。このように、入居者を人として、丁寧に扱うという規範がベースとなっている Z 園において、「身を切ってもよい」と発話することは、施設の規範に従わないことであり、施設に管理されない自由な自己¹²を表明することとなっていたのである。つまり、「身を切ってもよい」と発話することによって、入居者 A の主体を表明することが達成されたのである。2 - 3 では、患者の主体性を奪わないための努力が、結果的に主体性を奪うことになるという、施設側の悩みや問題点が焦点であったが、この、入居者 A の事例は、管理される側に焦点を当てたものである。入居者 A は、管理された施設内で、持てる資源、つまり自分の身体を用いて、主体の表明を達成していたのである。

ここで、もうひとつ言及しておきたいことがある。それは、会話における入居者 A の声の大きさである。上述した小声部分以外は、比較的大きな声で、周りにいる私たち観察者にも会話が聞こえるほどの大きさであった。また、20 行目「何けえ、下手や」(資料、1 頁：20 行目)と言う発話は更に大きい声で、視線が私たち周囲に向けられていた。つまり、入居者 A は単に職員 S にだけ向かって発話していたのではなく、周囲(他の入居者たちと私ともう一人の観察者)が自分の会話を聞いていることを意識していたのではないだろうか。そうであるならば、この場面において、入居者 A は、もうひとつ達成していることがあると考えられる。それは、何十人も入居者たちが集まっている中で、一時的ではあるが自分一人が職員 S のサポートを受けていることについて、周囲の人たちに対する言い訳をすることの達成である。「普通より私を粗雑に扱ってくれても構わない、手早くやってくれて構わない」「あなたは忙しいから構わない」といった内容の発話を周囲にも聞こえるように行うことで、「私は職員に気を遣いながら切ってもらっている」「決して私のわがままで切ってもらっているわけではない」ということを表示しているといえるのではないだろうか。

3 - 5 . まとめ

¹¹ これは Z 園に限った規範ではなく、世間の様々な施設においてもいえることではないだろうか。

¹² 正確にいえば、施設内で生活するということは、すでにある程度管理されたものである。例えば、食事、入浴などの時間が決められているなど、数々の規則がある。よって、管理の中の管理されない自己、管理の中の自由な自己、ということができる。

以上、爪を切るという場面における入居者 A と職員 S による相互行為を分析した。そこからいえることをまとめてみる。

入居者 A は、爪切り場面で「身を切ってもよい」「血が出てもよい」「深爪してもよい」という内容の発話、つまり「身を切る」という侵襲を許す発話を行うことで、職員 S に配慮を示しながら自らの主体を表明する、という事柄を達成していた。この、自らの身体への侵襲を許す発話をするので、相手に配慮を示すとともに、自身の主体を表明する、というシステムが「みい切ってええでシステム」である。このシステムの特徴のひとつは、侵襲される側＝入居者によって、侵襲の権利（この場合は身を切る権利）が侵襲する側＝職員に与えられる、という形をとる点である。もうひとつの特徴は、「みい切ってええでシステム」は、施設内でベースとなっている規範、職員は忙しくても入居者を人として丁寧に扱う、という規範が成立している場面のみ、可能となるという点である。つまり、職員は忙しくふるまいながら、入居者を人として丁寧に扱う方法のひとつとして、世間一般の秩序である相互不可侵の権利を施設内の規範として用いている場面においてのみ可能となるのである。

4. 考察

本稿では、施設内のコミュニケーションについて、養護老人ホームを対象として考えてきた。老人ホーム内の爪切りの場面における、職員と入居者の相互行為を、「身体」をキーワードとして詳細に分析を行った。そうすることで、施設とはどういうところなのか、その中で生活している人のやり方はどのようなものなのかについて、一側面ではあるが明らかにできたのではないだろうか。

2 - 3 で紹介した山田（1991）の論文では、精神病院という施設内において、スタッフ側の家族的親密感を出す努力が、翻って患者の主体性を奪うことになっている、という施設側の悩みについての事例が述べられていた（山田、1991）。それに対して、本稿では、施設で生活する人々（入居者）、すなわち管理される側の人々は、いかに工夫して施設で生活するという実践を達成しているのか、に焦点を当て分析を行った。

入居者 A は、老人ホームで生活するという実践をどのようにして達成しているのか。そのひとつが「みい切ってええでシステム」である。それは、施設の性質を利用し、周囲への配慮や気配りを示しながら、自分の主体を表明するというやり方で用いられている。入居者 A によるコミュニケーションは、決して職員に介護をしてもらうだけの受身の関係を示すものではない。個人が持てる大きな資源である「身体」を用いて、職員と対等なコミュニケーションを試みている、積極的なコミュニケーションであるといえるだろう。そしてそれが、入居者 A が施設内で生活するやり方なのである。施設という管理された場所で、自分が介護をしてもらう状況においても、人は持てる資源を最大限に使い、それぞれのやり方で自分を表現することを行っているのである。その実践は、いつでもどこでもという訳ではなく、実践される場面の状況と深く結びついて達成されるものなのである。

参考文献

- 秋葉昌樹、1995、「保健室における『相談』のエスノメソドロジー的研究」『教育社会学研究』57：163-181。
- Apter,E, David and Sawa, Nagayo ,1984,*AGAINST THE STATE*. (= 1986、澤良世訳『三里塚 もうひとつの日本』岩波書店。
- 「文化と社会」編集委員会、2000、『文化と社会』マルジュ社。
- 大日義晴、2003、『コミュニティ・ビジネスに参加する高齢者 インタビューを手がかりとして』徳島大学総合科学部人間社会学科国際社会文化研究コース現代国際社会分野卒業論文（徳島大学社会学図書資料室在）。
- Goffman,Erving,1963,*BEHAVIOR IN PUBLIC PLACES*, (= 1980、丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造 新しい日常行動論を求めて』誠信書房。)
- ,1967,*INTERACTION RITUAL*. (= 1986、広瀬英彦・安江孝司訳『儀礼としての相互行為』法政大学出版局。)
- ,1967,*INTERACTION RITUAL*. (= 2004、浅野敏夫訳『儀礼としての相互行為 新訳版』法政大学出版局。)
- 浜日出夫、2004、「第1章 エスノメソドロジーの発見」山崎敬一編『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣：2-14。
- 藤崎宏子、1998、『高齢者・家族・社会的ネットワーク』培風館。
- 井上俊・上野千鶴子・大澤真幸編、1997、『成熟と老いの社会学』岩波書店。
- 樫田美雄、1995、「老人と菊づくり」、『社会学ジャーナル』筑波大学社会学研究室、第二号：153-174頁。
- 幸田裕紀、2001、『特別養護老人ホームにおける高齢者とスタッフの相互行為分析』徳島大学総合科学部人間社会学科国際社会文化研究コース現代国際社会分野卒業論文（徳島大学社会学図書資料室在）。
- 串田秀也、1999、「助け舟とお節介 会話における参与とカテゴリー化に関する一考察」好井裕明・山田富秋・西坂仰編『会話分析への招待』世界思想社、124-147。
- 牧園清子、1993、「老人ホーム」森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』有斐閣：1513-1514。
- 水川善文・池谷のぞみ、2004、「第3章 エスノメソドロジーの方法(2)」山崎敬一編『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣：36-49。
- 師橋奈見、2004、『結婚式の着付けにおけるエスノメソドロジー 控え室空間の社会的達成』徳島大学総合科学部人間社会学科国際社会文化研究コース現代国際社会分野卒業論文（徳島大学社会学図書資料室在）。
- 西坂仰、1996、「相互行為のなかの非対称性」『岩波講座 現代社会学 第16巻 権力と支配の社会学』岩波書店：47-66。

- 副田義也編、1981、『老年社会学 老年世代論』垣内出版株式会社。
- 副田義也、2003、『あしなが運動と玉井義臣 歴史社会学的考察』岩波書店。
- Sudnow, David, 1967, *The Social Organization of Dying*, (= 1992、岩田啓靖・志村哲郎・山田富秋訳『病院でつくられる死 「死」と「死につつあること」の社会学』せりか書房。)
- 高山啓子、1995、「C S C Wと相互行為分析 テクノロジーのエスノメソドロジー - 」『現代社会理論研究』第5号：108-110。
- 山田富秋、1991、「精神病院のエスノグラフィー」山田富秋・好井裕明編『排除と差別のエスノメソドロジー いま - ここ の権力作用を解読する』新曜社：179-212。
- 山崎敬一、「序章 エスノメソドロジーと性別カテゴリーの問題」『美貌の陥穽 セクシュアリティのエスノメソドロジー』ハーベスト社：5-30。
- 、2004、「第2章 エスノメソドロジーの手法」山崎敬一編『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣：15-35。
- 、佐竹保宏・保坂幸正、1997、「相互行為におけるコミュニケーションと権力 車いす使用者 のエスノメソドロジー的研究 」山崎敬一・西坂仰編『語る身体・見る身体 附論 ビデオデータの分析法』ハーベスト社：59-79。
- 矢澤修次郎編、2003、『講座社会学 15 社会運動』東京大学出版会。
- 好井裕明・山田富秋・西坂仰編、1999、『会話分析への招待』世界思想社。

資料(トランスクリプト)

【入居者Aが職員Sに爪を切ってもらおう場面(9:55:44~10:00:27)】

- 01 S : Aさん、爪は？ちょっと伸びてきとんなあ
- 02 A : ちょっと切ってくれるか=
- 03 S : =切っとくで？
((Sが爪を切るときに敷く紙を取りに動く))
- 04 A : かんまんのん？
- 05 S : かまんよ：：、これだけ、抱えてくれるで？
((Sが紙を持ってAの所へ戻ってくる))
- 06 A : (は)いよ
- 07 S : あ、あこっち置こか
- 08 A : うん
- 09 S : hhhh ()
- 10 A : 手はな、自分でもつめる
- 11 S : ほうする？=
- 12 A : =うん

13 S : ほな、足、[足
14 A : [それよりあんたかわいそう
15 S : 何よ
16 A : 足はつんでもろた
17 S : 足もつんでもうたん =
18 A : = うん
19 S : 見せてみ？
20 A : 何けえ、下手や
21 S : 下手やって、hhhhh、いけるわ、つめよんな
22 A : みい切ってよっちゅうのにみい切らんの
23 S : そんなみい切ってどないすんの、痛いだけや
24 A : いや、血が出るほど
25 S : 血が出るほど切ったってしゃあないでえ：： =
26 A : = そしたら伸びへんで
27 S : 伸びるよ、() 伸びてくるの遅いだけや：： hhhh
28 A : そうかなあ
29 S : 回数が減るだけで
30 A : 手はなあ、まあまあ、 >> 自分でするけんよ << あんた忙しいからかんまん、
ちょっと一服し
31 S : 一服してけ？ hhhh
32 A : ほなつんで、hhhhhh
33 S : まあ今日は暇やからやらして
34 A : かんまんて？
35 S : うん、みんなが出てきたらちょっとストップするな
36 A : よっしゃ
37 S : Aさんがお風呂行かんかったらな
38 A : あ：ん、はいはい
39 S : 次三丁目が [行くからな
((Z園ではそれぞれの部屋が「～丁目～番地」というふうに分けられている))
40 A : [深爪するんでもええよ
41 S : 深爪したら [い
42 A : [い、いや血が出てもかんまんっちゅうの (1.0) 血が出たところから
また伸びてくる
43 S : hahaha 怪我したら痛いんは痛いんよ =
44 A : = 痛ない
45 S : (3.0)(ちよっともうちよっここに乘っけてちよっここに置いといてな)

このままするけん

((S が A の腕の位置を変える))

46 A : いけるで?

47 S : うん、いける

(13.0)

48 A : 足はつまぬくいじゃろ?

49 S : 足はなあ、やっぱりなあ

50 A : 生え方によったらなあ

51 S : うん、靴とかでも変わってくるけんなあ

52 A : (そう) だろ =

53 S : = わるうなってきたりとかなあ、押さえつけとったら () みんなの年ぐらいの人は、足、あのヒールの靴とか先のほっそい靴みんな履いとうけんやっぱりなあ、足先の、(ぶん) になかなかのってくれへん、こう、三角になっとうで、足の先指先がな

(10.0)

54 A : よう切れるんやろこれ =

55 S : = うんよう切れる ()

56 A : 血が出てもええっちゅうん =

((S の後を C さんが通る))

57 S : ((後を振り返りながら)) いけるで? C さん通れる?

58 A : 血が出てもええっちゅうん

59 S : ((S は無言で作業を続ける))

【トランスクリプト記号】

? 疑問符 : 語尾の音が上がっていることを示す。

: : コロンの列 : 直前の音が延ばされていることを示す。

[角括弧 : 参加者たちの発話が重なっていることを示す。

= 途切れなく言葉もしくは発話がつながっていることを示す。

() 丸括弧 : 何か言葉が話されているが、はっきり聞き取れないことを示す。

(数字) 数字の秒数だけ沈黙があることを示す。

(()) そのつど必要な注記であることを示す。

hhh,haha など 笑いなど呼気音を示す。

「自己コントロール」の成功としての嗜癪* 理論的考察および若干の経験的例証

佐々木 実花

1. はじめに

会話を織り交ぜられるダイエットの話題、雑誌のダイエット記事、テレビのダイエット特集など、ダイエットに関する話題と接する機会は非常に多い。それまではダイエットへの取り組みに対して特に違和感があった訳ではなかったが、ダイエットに励む友人との会話をきっかけに、「なぜこれほどまでに痩せることに拘るのだろう。何だか変じゃないか」という印象を持つようになった。更に、程度の差こそあれ、多くの人々がダイエットを嗜癪の対象にしているのではないかという問題関心を抱くようになった。その頃持っていた私の嗜癪に対する印象は暗いものだった。

しかし、インタビュー調査をし、研究を進めていく中で、以前私が抱いていた嗜癪に対する暗いイメージは次第に変化していった。更に、研究開始当初は普通の人に嗜癪的要素を見出すことを目指していたのだが、新たな問題関心として、普通の人はずどのように嗜癪*（アストリスクと読む。この語句に関しては本稿末の補論1を参照せよ）と上手く付き合っているのだろうか、という点が浮かび上がって来た。本研究では、普通の人々が持つ嗜癪*の構造を分析し、嗜癪*とともに生きていく様を明らかにすることを目的とする。

2. 嗜癪問題の理論的考察

石川洋明は彼の論文「自意識の悪循環過程をめぐって」(石川〔1988〕)¹の中で、志田基与師の李徴コンプレックスに関する分析と、ベイトソンのアルコール耽溺者に関する分析を行っている。

2 - 1 李徴 complex の悪循環の構造

石川によると志田基与師の論文「山月記 syndrome あるいは李徴の complex」(志田〔1984〕)

¹ 嗜癪や依存の問題を扱っている書籍、論文の中には心理学や医学の視点から書かれたものがある。その中でも、嗜癪や依存の問題点を挙げ、それがどのように危険であるか、また、その対処法などについて述べられているものに私は多く出会ったように思う。更には、依存状態から抜け出したいと願う人を想定して書かれているものも少なくなかった。また、ダイエットなどを取り扱っているものの中には、適正体重とその認識のされ方や、どのようなダイエットを行っているかの調査、治療的な観点から摂食障害を取り扱っているものなどもあった。

一方、社会学の視点から研究した著作にも当たることが出来たが、私が注目したいテーマに近いものはなかなか見つけることが出来なかった。

私が注目したのは、普通の人も、嗜癪*（この語句に関しては本論文末の補論1を参照せよ）を持っており、それと上手く付き合っているのではないか、という点である。嗜癪*がどのような構造をもち、普通の人々の生活に溶け込んでいるのか、また、嗜癪*サイクルに上手くはまり込むことで、心地よく生活していけるのは何故か、その構造を研究するのが課題であった。

この課題を研究していく上で、石川洋明氏の論文(「自意識の悪循環過程をめぐって」(石川〔1988〕))は大変興味深いと思われたので、使わせていただくことにした。

の中で、李徴が自意識の罠に陥った要因と言うべき心理的機制について、志田は以下のよう
に定式化しているという。

「(1) 守るべき「自分」があり、この「自分」について肯定的な評価(「才能ある者」「個性
ある者」など)をくだしている。

(2) このような「自分」にとって最も望ましいのは「才能」「個性」のある者であることが
証明されることである(その具体的な手段は何でも良い)。

(3) しかしながら「自分」にとって最も恐ろしいことは、「才能」「個性」などが無いこ
とが証明されてしまうことである。

(4) そこで「自分」を守るためには、消極的に「才能」「個性」が反証されない状態にと
どまるのがよくなる(臆病な自尊心)。

(5) よって彼は「自分」の「才能」が試されないことなら行い、「才能」がテストされる
とき行動を避ける。そして、自らの「才能」が示されないのは「押し付けられた諸事情の
ため」と合理化する。

(6) しかし、このような生活態度を有限の人生のなかで続けても「自分」の「才能」は
証明されず、それが時に大きな精神病理をひきおこす。」

そして、この李徴コンプレックスの構造を次のように分析している。

石川によると、「李徴の持っているのは『逃避』あるいは『先送り戦術』とでも言うべ
きもの」(石川〔1988:103〕)であるという。つまり、詩作の世界で自分には才能がない、
ということが証明されるのが怖いから、進んで師に就く、詩友と切磋琢磨するなどという
選択をせず、自分の才能をはっきりさせることから「逃避」あるいは「先送り」するとい
う選択をとった。それは単なる怠惰などによっても起こり、本人の「プライド」の強さ、
禁酒できない自己に対する評価の厳しさの程度に応じ、様々な状態を取りうるとしている。
李徴 complex にとらわれた人間は、単なる怠惰によって悪循環に陥る人間とは違い、「自己
の能力を証明することに固執し続ける点が特徴的」(石川〔1988:104〕)であるとしている。
(表1参照)「自己の能力についての信頼と不信のアンビバレントな同時存在がこの悪循環
を形づくる。当該の個人にとって緊要な課題設定と、その解決行動の不在を成立の要件と
する悪循環過程を『過小決定型』」(石川〔1988:104〕)と呼んでいる。

また、李徴は「課題の高度化」も行っているという。つまり、官吏として生きていくこ
とに飽き足らず、詩の世界で生きていくという、より新しく、より高い課題を設定してい
る。

・自分に才能がないことを恐れる(羞恥心) そのため、わざわざ苦勞して磨こうとしな
い(尊大)

自分に才能があることを半ば信じる(自尊心) そのため詩友と切磋琢磨したり、師に就
いたりしない(臆病)

その結果、苛立ちや、恥ずかしさとともに怒りがこみ上げ、益々自分の内なる臆病な自
尊心を飼い太らせる結果となった

図 1：李徴の行動（石川〔1988：102〕に基づいて佐々木が作成）²

2 - 2 アルコール依存症者の悪循環構造

それに対し、アルコール耽溺者の悪循環構造は、どのようなものか。ベイトソンの『自己』なるもののサイバネティクス「アルコール依存症の理論」では、アルコール依存症者にしみついた「プライド」の原理について以下のように分析している。（一部書き加えている。）

A) アルコール依存症者にしみついた「プライド」は、「本人が過去に成し遂げた何かをめぐって成立するコンテキストの中で醸造されたものではない」。「この“プライド”は、なんら誇るべき実体をもたない。強調点は『オレは出来たぞ』ではなく『オレは出来るぞ』にある。『オレにはできない』という命題を受け入れることが出来ず、取り付かれたようにチャレンジを繰り返す」ことになる。

B) 「〔アルコール〕依存症に病むようになって以後、この“プライド”は、『オレは素面でいられる』という命題に、集中的に駆り出される。しかし、これに成功〔し、酒を飲まずにいられると、〕酒を飲まずにいられることの意味が変化〔してしまう。〕最初のうちは酒を断っていられることが、自分のプライドを満足させた。しかしそれができてしまうと、「一杯のリスク」なしに彼のプライドは満足しな〔くなる。〕つまり禁酒の継続によって、飲酒と禁酒をめぐるコンテキスト構造が変化する」。

C) 「AA (Alcoholic Anonymous) の作戦は、このコンテキスト構造の変化を全力を挙げて阻止することに向けられている。『一度アル中だったものは一生アル中である』という教えが徹底しているのも、アルコールにチャレンジするなどという破壊的な思い〔込みを徹底的に根絶させる〕ことを狙ってのことだ。『お前の本性はすでに酒びたりなのだ』と諭すことで、AA はアルコール依存症を患者の自己の『内側』にしっかりとセットする。（このやりかたはユング派の分析医が、患者に自分の『心理型』を発見させ、その型に備わった強さ・弱さとともに生きることを学ばせるのとよく似ている。）これに対して『アル中のプライド³』は、酒との交わりを、自己の『外側』にセットし、『自分』が『飲酒』に『抵抗』すると

² 自分に才能があることを信じており、かつ、それが証明されることに強い拘りを持っている李徴は、才能が反証されることで、自分自身を支えてきた「プライド」が崩れ去り惨めな思いをすることに対して恐怖心を抱いている。それ故、才能が反証される可能性を出来るだけ排除しようとする。才能がはっきりと反証されるのは、積極的に才能を磨こうと行動に出た時である。積極的な行動（苦労して磨くこと）を避けるため、自分には才能があるのだから、そのような行動は不必要である、などといった尊大な理由付けを行う。羞恥心と自尊心は表裏一体である。

李徴は、いつまで経ってもこの状態から抜け出せずにいることに対し焦燥を募らせ、更に、このままでは一生才能が証明されることはないということに憤りを感じる。精神的不安を鎮めるため、自己の内側だけで通用する臆病な自尊心を益々強固なものとして築き上げなければならなくなる。

³ 「アル中のプライド」という用語は、ベイトソンが彼の論文中（Bateson〔1971 b 1972 = 1987 2000〕）で用いたものである。「アル中」という用語に代わり、現在は「アルコール

いう構図に収めてしまうのである。

D)「アル中のプライド」が、危険に挑むことができる自分を賞賛するものだとする、これは禁酒状態の継続には不向きだと言える。そういうプライドを抱えた自己は、一定期間の禁酒に成功した場合、「一杯飲んでみる」ことで、リスクの引き上げを図ろうとするからだ。つまり、「俺は成功する確立が低くて、失敗が破滅に通じるような危険なことに挑戦できる。」という「プライド」を持つようになってしまうということだ。失敗を「確率」や「運」の問題として捉えるとき、その人間は失敗を「自己」の外側に追いやっている。「アル中のプライド」は、そうやって「失敗」を、「自分の」失敗でなくしてしまうのだ。つまり、「ちょっと一杯飲んでみよう。そして自分で酒をコントロールできるかどうか試してみよう」と考え、飲むのだが、大抵失敗に終わり、結局酒に飲まれてしまう。しかし、それを「アル中のプライド」は失敗とは捉えない。「これは運が悪かったからだ。たまたま今回は上手くいかなかったけど、これは失敗ではない。今度はきっと上手くいくはずだ。」と考えるのだ。こうして、アルコール依存症者は、実体的な経験にもとづかない「アル中のプライド」だけに寄りかかって生きていくことになり、「自己」以外のものすべてと対抗関係をとることになるのだ。

E) 賭けにプライドを求め、それを生活原理とすることは、自己の破壊を求めるとと変わらない。宇宙が自分に好意的かどうか、一度の賭けで知ろうとするのは良いかも知れない。しかし、この賭けを繰り返し、しかもその度に証明の条件を厳しくしていくというのは、宇宙が自分を憎んでいることを証明するプロジェクトに乗り出すことに他ならない。(Bateson [1971 b 1972 = 1987 2000 : 435 - 436])

ベイトソンは、「アルコール依存症者のプライドは、実存または架空の『他者』の存在を常に前提とする」(Bateson [1971 b 1972 = 1987 2000 : 437])としている。この前提を理解する前段階として、「関係というものの総体を、『対称型』と『相補型』とに二分」(1971 b 1972 = 1987 2000 : 437)し、それらの説明を行っている。「対称型」の関係とはどのようなものか。ベイトソンは次のように定義している。「二者関係において、AとBの行動が(AとBによって)同じものとして見られ、しかもAの行動の強まりがBを刺激してその『同じ行動』を強め、逆にまたBの行動がAの『同じ行動』を促進するようなかたちで二つが連係しているとき、それらの行動に関して両者の関係は『対称的』である」。また、「相補型」については「AとBの行動が同じではないが相互にフィットするものであり、しかもAの行動の強まりがBの行動の強まりを呼ぶような形で両者が連係しているとき、それらの行動に関して両者の関係は『相補的』である」としている。(Bateson [1971 b 1972 = 1987 2000 : 437])

これら、「相補型」「対称型」の両関係は単独では、行動が次第に激しさを増す構造(分裂生成)を引き起こしやすいとしている。それは「対称型のシステムにも相補型のシステムにも、冷却(修正)機能を欠いた、正のフィードバック機構が組み込まれている」から

依存症者」という用語を用いるのが一般的である。ただし、ベイトソンの用語を用いる必要がある場合に、鍵括弧でくるんだ形(「アル中」など)でアル中という用語を用いることにする。

だと言う。「しかし、二つの混交したシステムでは分裂生成にブレーキがかかる」としている。(Bateson〔1971b 1972=1987 2000:438〕)

さて、アルコール依存症者の「プライド」は、「対称的關係」、「相補的關係」、どちらの支配するコンテキストに属するだろうか。

まず指摘されているのは、西洋文化内の自然な飲酒文化が、「対称型」の關係に根ざしたものであるということだ。相手と同じだけ飲むということが文化的に定着しているという。この場合、飲んでいる者同士は友好的な「対稱關係」にあると言える。(Bateson〔1971b 1972=1987 2000:440〕)

初めは耽溺性の飲酒から離れて正常に飲んでいるが、次第に「事態が悪化してくるにつれて、依存者は酒と一緒に自分の世界に閉じこもり自分に向かってくるものすべてに対して、あらゆる形の反撃を示す傾向を強めていく。」(Bateson〔1971b 1972=1987 2000:440〕) 妻や友人、上司などに対しても「対称型」のパターンで反発し、自分の強さをボトルへの抵抗をもって証明しようとする。しかし、「一時的に飲まずにいられた」という勝利は、対抗する相手を失うことと等しく、戦いの動機を失ってしまう。「対称型」のパターンでは、対抗する対象が存在する場合にしか戦いの動機が存在し得ない。こうして、戦いをクリアしていく度に新しく、より破壊的な対象を設定し、新たな戦いに挑んでいくことになる。このことを、石川は「課題の高度化」と呼んでいる。彼によると、アルコール依存症者は「アルコールに耽溺してしまう弱い自己」と「それを矯正しようとする強い自己」の2つに分裂しているという。まずは、自分が前者ではないことを証明するためにアルコールを飲まない選択をし、一応実行もするが、それは後者に比べると容易すぎる課題に思え、結局アルコールを飲んでも乱れないことを証明するという選択をしてしまうのだという。(石川〔1988:105〕) また、ここで、「アルコール依存症者が『一杯くらいのアルコールで自己管理が崩れたりもしないことを証明する』という自己正当化の論理を用意して飲酒」していることが注目に値するとしている。ここでは「飲酒が、課題解決に反する行動から、課題解決行動そのものに転化している」。このような「課題と課題解決行動の矛盾を含む悪循環過程を『過剰決定型』の悪循環過程と呼ぶ」としている。(石川〔1988:106〕)

課題がより破壊的なものへと高度化され、そしてその課題と闘争している間にも、妻や友人など周りの人間との關係はますます悪化していくが、対稱的關係の中でしか生きられない彼の「プライド」は、「相補的」な役割を受け入れることを許さないため、妻や友人が何を言おうとも対稱的に反発することしかできない。「このように、アルコール依存症者は、現実〔に存在する妻や友人のような〕他者とも、〔自分自身が設定する〕架空の“他者”とも、徹底して対稱的で、終始分裂生成的關係に走る」こととなる。(Bateson〔1971b 1972=1987 2000:441〕)

表 1: 対称型と相補型についてのベイトソンの定義(Bateson〔1971b 1972=1987 2000:437〕に基づいて佐々木が作成)

対称型	相補型
二者關係において、AとBの行動が(AとBとによって)同じものとして見られ、しかも	AとBの行動が同じではないが相互にフィットするものであり、しかもAの行動の強ま

<p>Aの行動の強まりがBを刺激してその「同じ行動」を強め、逆にまたBの行動がAの「同じ行動」を促進するような形で二つが関係しているとき、それらの行動に関して両者の関係は「対称型」である。</p>	<p>りがBの行動の強まりを呼ぶような形で両者が関係しているとき、それらの行動に関して両者の関係は『相補的』である。</p>
--	--

表 2：アルコール依存症者の悪循環構造を説明するキーワード（石川〔1988〕に基づいて佐々木が作成）

<p>「対称型」</p>	<p>）西洋文化内の飲酒文化 ）自分以外のすべてのものと対称的な関係で反発し、自分の強さをボトルへの抵抗で証明する</p>
<p>「課題の高度化」</p>	<p>初めは飲酒を避けるが、しだいにそれだけでは満足できなくなり、一杯のリスクを課すなど、より厳しい条件を与えるようになる。</p>
<p>「過剰決定型」</p>	<p>飲酒が課題解決に反する行動から課題解決行動そのものへ転化。課題と、課題解決行動の矛盾を含む悪循環過程。</p>

表 3：李徴 complex、アルコール依存症者の悪循環構造を説明するキーワード
該当するものに 印、触れられていないもの・該当しないものには×印

キーワード	李徴 complex	アルコール依存症者
対称型	×	
課題の高度化		
自己の能力についての信頼と不信のアンビバレントな同時存在		×
過小決定型		×
過剰決定型	×	

3. 本研究の視点

本研究では、アルコール依存症者の悪循環構造、李徴 complex の悪循環構造の分析に基づき、一般の人（社会的、医学的に依存症と認識されない普通の人）を対称にした分析・考察を行いたいと考えている。一般の人にも嗜癖はあるのか、それはどのようなものか。そして、その構造はアルコール依存症者の悪循環構造、李徴 complex の悪循環構造とどのような関係にあるのか。これらを分析しようと思う。

3 - 1 調査対象、調査方法

インターネットでフィットネスクラブを検索するという方法で施設を探した。そして、施設宛に調査依頼書と研究企画書、更に会員宛に調査依頼書と研究企画書を入れたものを5通同封して郵送した。会員宛の封筒は、調査への協力が期待出来そうな人に渡していただくよう施設の方に依頼した。最終的に4名の方にご協力いただくことができた。今回はその中から1名の方のデータを使わせていただくことにした⁴。調査はすべてインタビュー形式による。また、調査場所、時間などは調査対象者と相談の上決定した。場所は各自通っているフィットネスクラブで行うことになった。

3 - 2 事例検証

2005年9月9日、13:50~14:50の1時間、Aフィットネスクラブ(仮名)において調査を行った。調査対象者である島さん(仮名)はAフィットネスクラブに4年ほど前から継続的に通っており、水泳、筋力トレーニング、エアロビクスなどをして体を鍛えている。もともとバレーボールをしていたのだが膝を痛めて続けることが出来なくなり、運動から離れていた時期があったそうだ。ところが食事量はあまり変化がなかったので、運動量が減った分徐々に太ってきたという。そこで、Aフィットネスクラブで膝のリハビリも兼ねて水泳を始めることにした。

島さんは平日コースに入っており、島さんの言葉によると、平日であれば朝10時から夜10時の間に、何回でもどのメニューでも、自由に好きなものを選択して授業を受けることができるそうだ。入りたいと思うメニューがあれば全部入ることも可能である。島さんの発言{「何せその一気に痩せた時は多分朝も来て、ずっと昼もおって、一旦帰って夜も、っていうめちゃくちゃに来てたことが一時期あったんです。それでぐっと落ちたんです」}から、以前は徹底的にフィットネスクラブに通い詰めていたことが分かる。現在も、「夕方5時くらいまでここおる(略)1時くらいに来て、遅くても2時くらいには来て」という発言や、土曜日、日曜日以外は毎日フィットネスクラブに来るという発言から、フィットネスクラブに居る時間だけでも一日3~4時間、週に15~20時間を費やしていることが分かる。そして、「痩せたかった。太ってたから。まず最初のきっかけは痩せようと思って」という島さんの言葉から分かるように、島さんには痩せるという目標があり、その目標に向かって自己を無理やりにでも運動する環境に置くという方法で、「自己コントロール」をしていったと考えられる。その結果10キロ近くの減量に成功した。

更に、「この泳ぎをこんだけしましょう、でなくて、だいたい25メートルやったら55秒サイクルで何本とかいうのも結構ある。そういう授業が結構メインに入ってるから。(略)泳げるようになったらそういうのでないと、面白くないし、自分で1000メートル泳げ言ったらなかなか、よいしょがいらしますよ。根気がないから。(略)自分で1000メートルも泳いでたらたってくるんですよ。授業へ入ってたら1000メートルくらい無理やりにでも泳がされるでないですか。ちょっとはカロリー消費して痩せるかなと思って。そうでなかったら中で、プールの端で喋って喋って、ちょっと泳いだらしんどいから喋って、そればっか

⁴ 他の3方については本論文末の補論2を参照せよ。

りで終わるからね。ある程度授業入ってこれだけはせないかんという目標もってせんと、ついダラダラするタイプやから」という発言から、自分の性格特性を分析しそれに適した選択を行っている様子が伺える。つまり、強制的に長い距離や速いペースの泳ぎをさせられるメニューを選択し、「自己コントロール」に努めているということが分かる。このような発言は他にも見られる。「エアロにしたって、入ったらせないけないじゃないですか。途中で出るわけにもいかんし。あんまり踊るの好きじゃないんやけど、やってたら踊らないとしゃあないでしょ。多少でもそれだけでカロリー消費するから、週に2回でも入ってたら全然違うなあと思う。やったら、ストレッチとか結構してくれるから。自分でストレッチいうてもね、痛いからついせんかったりするけど、決まったことせないかんから、結構それがいいかなあと思って入ってます。」という発言も、前述と同様の解釈が出来るだろう。

しかし、一方で島さんは次のような発言もしている。「2時間くらい泳いで、泳いでるといふか浸かってるといふか。1時間泳いで後1時間は中で喋ってるのもあるんですけど、あと、上がってからみんなとお喋りしたりして。そんなんが楽しいから。もうそれだけが楽しみ。最近そのように流れてきた。運動するよりも何よりも楽しい方が勝っているかな。」「半分はスポーツしよう、しようというのではなくて、ストレス発散もあるから、喋ったりそういうのも楽しみの一つで来るから。(略)私らは、もうやっぱり遊びが半分以上入ってないと。人それぞれですけどね。私の場合はもう、ほんと、おばさんの遊びやから、半分は。」「長続きしようと思ったらあんまり。人それぞれですよ。(略)私や遊び半分やから。そんなに痩せよう、頑張ろうと突き詰めたら、何かプレッシャーかかってくるし。」という発言もある。水泳も、エアロビクスも、筋力トレーニングもしなければならない、と強制的に自己を運動に駆り立てている反面、ほどほどのところで良いのだと、現状に満足しようとしている様子が一方では読み取れる。エアロビクスについては、「去年の夏あたりから、暑いからエアロもしなくなっ」という発言から、以前ほど熱心には取り組まなくなった様子が伺える。筋力トレーニングについても同様で、「筋トレもしてますけど、たまに。最近ちょっとサボってるけど」という言葉から、一応しなければならないと思っではいるが、本気で取り組んでいるという様子でもないことが分かる。更に、「土日で疲れを癒しているのか体を甘やかしているのか知らんけど、土日で何とか元に戻って、体重も増えて、またずっと月曜から金曜までやって、ちょっと落として、また土日で。その繰り返し。(略)今はそんなに力入れてやってないの。」という発言から分かるように、島さんは月曜から金曜まではAフィットネスクラブで水泳や筋力トレーニングなどをして体を鍛え、体重を減らし、土日は家でゆっくり過ごし、食事もそれほど制限していないので体重が増加し、一週間かけて減らした体重がここで元に戻るというサイクルを繰り返している。更に、「ちょっとやそつとではもう痩せない。だから、甘い物絶ったり、炭水化物減らしたり、ずっと続けないかん。一回や二回でなくずっと。もうずっとそれを減らしたら少しは落ちてくるけど、やっぱり根性がないから一週間したらまた止めちゃったりする」という発言もある。「もうそこそこでええかなあ。確かに痩せることはまだまだ必要やけど、(略)やっぱり無理したら絶対リバウンドする思っ。」という発言から、このサイクルの安定感に本人は満足している様子が伺える。

しかし、現状に満足しているように取れる発言の一方で、痩せることに対する強い拘りが伺える発言もあった。「私、朝晩体重量るんですよ。そしたら、夜寝る前にご飯とか食べる

でしょ、何か美味しい物を。とたんに次の朝に出ますよ。300とか500〔グラム〕肥えてて。」〔300や500も気になりますか?〕「気になる、気になる。ちょっとこれ異常かな、考えすぎかなと思うんやけど。」更に、痩せて若くキレイに見られたいという願望や拘りが伺える発言もある。「同じ年やのにこの人は若く見えて、うちがおばさんに見えるって言われたらやっぱり嫌じゃない。それがまだ多少あるみたい。」「ズボンとかああいうのにしたって、サイズが合わないでしょ。やっぱり、キレイなかつこいいズボン穿こうとしたら、普通サイズしかないですよ。大きくなったらおばさん体型のデレーツとしたのしかない。そういう時考える。やっぱり痩せてたらいいなあって。」どうして痩せたいと思うのかという質問に対して、「ここへ来たら大体同じ年代の人がおるでしょ。キレイに痩せてキレイな格好してたら、それなりに良いじゃないですか。やっぱり意識するんやと思う。女同士の方が。(略)きちっとしてキレイにすっとしている人見たら、やっぱり年齢いっとってもそれなりにきちっとしとかなあかんねんな、いうのは時々思い知らされる。何でも良いわ言うて、ゴムのスカートやゴムのズボン穿いていたんではなんぼでもお腹に肉が付くわなあとか。」と答えている。同年代の人と自分を比較し、このままではいけないと思う反面、「私ぐらいの年齢になったら半分どうでもいいんやけどね。」という発言のように、ほどほどで良いという評価もしているようだ。現状に不満を抱いており、それを解消したいと思う反面、現状に満足しているかのように、また、満足しようと努めているかのように捉えられる発言が他にも見られる。「意外と76⁵ぐらいになってきたら太ってるんやけど、身長あるから、それなりに『変かな』いう程度で済む。そんなに『醜いな』いうのがないから、気が楽やけど。」「太ってたら、ああいいなあとと思った服が入らないじゃないですか。あれが入るようになりたいなあとと思う。でもまあ、ちょっと細くなったから少しは入るようになったから嬉しかった。」

更に、島さんは何種類ものサプリメントを服用しており、それに関して次のような発言をしている。「疲れを取るためにサプリメントも結構飲んでる(略)私は昔からサプリ飲まんと、精神的なもんやろうけど、効いてるんか効いてないんか分からないけど。」「あれが良いって言うたら飲んだり、これが良いって言うたら飲んだりしてますよ。大体運動に良いものは飲んでますよ。アミノ酸系は飲んでますよ。コエンザイムとアルファリポ酸と、カルニチンが良い言うたらその3種類は飲むように。(略)あんまり効果があるのか、こんだけ食べても太らないのはそれは効果があるのか、その辺は分からないんやけど。飲んでたら気が済むんですよ。あ、飲んでるから大丈夫とか言って。それでも疲れてるからこれではいけない思って最近またね、にんにく卵黄飲んでましたよ。」「朝はこうずで夜はにんにく卵黄飲んで、間にヒアルロン酸と、コラーゲンと」その他に、膝に良いものとして「グルコサミン」も飲んでいると言う。医者に80歳ぐらいの膝をしているという診断を受けたこともあり、「何か飲んでなかったらどんどん悪くなるような気がして」と心境を語っている。

また、ただ痩せるだけではなく、健康的に痩せたいという気持ちも語っている。「それよりも、健康の方がねえ。中性脂肪や何や言うものが気になる年齢やからいくら痩せても、結構痩せてる人でも中性脂肪が高いとか、よく聞きますよ。血糖値が高いのどのこのの

⁵ この数字はウエストのサイズを表している。

ってね。」しかし、島さん自身は健康診断を受けたことがないという。「私、健康診断は一回もしたことがないんです。だから、血液検査して、中性脂肪がどうのこうのという検査してないから、なんか分からないんです。」

更に、「今のところは痩せる成果はないですね。」「恐ろしい、怖いですよ。運動は止められない。」「ひょっとしたらエアロもあんまり膝には良くないからせん方がいいんかも。どんなんか様子見もって。特別前より悪くなってる言うんはない。4年ぐらいおるけど。放ってたら多分もっと悪くなってたと思う。などと、ダイエットや、健康管理に関する現在の状況について話している。

4. 考察

4 - 1 嗜癖定義

考察に入る前に、まず、「嗜癖定義」の確認をしておかなければならない。ここで、嗜癖について書かれた資料⁶を引用する。

嗜癖を強迫的反復行動として捉えることになると、病的に繰り返される行動や「癖」と言ってきたものが、すべて嗜癖という範疇で捉えることができるようになる。やめようと思ってもやめられない強迫的反復行動のうち、精神医学の臨床がその治療や回復援助の対象とするのは、その行動が当人や周囲の者の生活にかなりの不利益、不都合をもたらす行動になっているばあいである。生活全般にわたって有害な影響を与えていなければ、また、当事者たちがそのように感じていなければ臨床の対象とならない。(副田〔1998:3〕)

更に、強迫的反復行動について説明している箇所を引用する。

次第に当人や家族の生活に不都合が生じるようになり、やめなければと思うようになるがなかなかやめられないというセルフコントロールの喪失状態が起きてくる。意思の力でコントロールできないことは、羞恥心や良心の呵責を引き起こすから、このつぎこそは統制しようとするものの、結局、統制できずに行動を繰り返していき、それが生活全体に害を及ぼすようになっていく。こうして強迫的反復行動としての嗜癖が

⁶ インターネットのホームページには次のような掲載があった。

ここでいう「嗜癖」は単なる「習慣」や「嗜好」よりは少し強い意味があり、「ある習慣への耽溺」を意味します。耽溺(たんでき)は、対象物にふけりおぼれることです。現代日常用語で言うと「はまって」しまった状態です。嗜癖は、嗜癖者本人あるいは周りの人に都合の悪いことが起こっているのに、その習慣にとらわれてしまって、止められない状態を意味します。「嗜癖問題」、「嗜癖行動」、「嗜癖性疾患」というような熟語で用いられることもあります。

嗜癖の重症例は病気とされ、「依存症」と呼ばれますが、嗜癖はもう少し軽症例から重症例までを含めた広い概念で使われます。(竹林 道夫 「嗜癖のいろいろ」

<http://www2.wind.ne.jp/Akagi-kohgen-HP/AD-reportbyMTforKyofukai.htm> ホームページ
管理者:竹村道夫・中村美之 閲覧日 2005.11.27)

生み出されていく。(副田〔1998:5〕)

一般に「嗜癖」とは、構造が悪循環しており、そこから逃れることが出来ない状態、に加え、その悪循環過程が、社会的に問題視され、批判されるものであること、の2点を含んだものだと考えられる。「やめなければと思うようになるがなかなかやめられないというセルフコントロールの喪失状態」(副田〔1998:5〕)「意思の力でコントロールできないことは、羞恥心や良心の呵責を引き起こすから、このつぎこそは統制しようとするものの、結局、統制できずに行動を繰り返していき、それが生活全体に害を及ぼすようになっていく」(副田〔1998:5〕)などは、構造の悪循環⁷の説明となっている。

更に、「その行動が当人や周囲の者の生活にかなりの不利益、不都合をもたらす」(副田〔1998:3〕)「生活全般にわたって有害な影響を与え」(副田〔1998:3〕)「当人や家族の生活に不都合が生じる」(副田〔1998:5〕)などといったことは社会的に問題視され、批判され得ることだと考えられる。

このように、一般的な嗜癖定義を考えた場合、アルコールへの耽溺やギャンブルへの依存などは、嗜癖に当てはまると考えて問題ないだろう。

ところが今回、私が研究で扱うダイエット、健康管理という問題は、一般的な定義に従えば「嗜癖」の領域外にあると言える。確かに、ダイエットは、方向を誤れば摂食障害という病気に発展してしまう可能性がある。病気という言葉は社会的にマイナスのイメージを持つ。

しかし、それが普通のダイエットの範囲内で、ほどほどに行われているのなら、社会的に問題視されることはない。また、健康管理ということ言えば、社会的にむしろ推奨されているとさえ言える。これらは社会的な批判からは程遠いと言えるだろう。

このように、ダイエットや健康管理を「嗜癖」と呼ぶには、現行の「嗜癖定義」では無理があることが分かる。私が問題だと感じるのは、現行の「嗜癖定義」の を入れると、社会的に問題視されるほど目立った症状の伴わない「嗜癖」は、嗜癖から取りこぼしてしまうということである。他人に迷惑をかける、本人が困る、などの症状がなければ一般に「嗜癖」とは呼ばれないのだ。また、嗜癖定義の で、構造が悪循環していることを挙げているが、「悪」と呼ぶからにはそれに値する要素がなければならない。

ところで、石川は、悪循環過程の注目すべき点について次のように述べている。「循環のなかにいる当事者が離脱を欲している、ということが問題とされなければならないであろう。そして、その原因は明らかである。当事者がその循環の中では目的を達成できないからである。」(石川〔1988:111〕)

私が今回のインタビュー調査で学んだのは、他人に迷惑をかけるほどでなく、また本人も困ってはならず、むしろ居心地の良さすら感じている状態においても、悪循環の構造が見られることがある、ということである。つまり、程ほどにダイエットや健康管理をしている人でも、抜け出すことの出来ない悪循環に陥っていることがあるのである。

⁷ 長谷(長谷〔1991〕)は悪循環について次のように述べている。「悪循環とは、ある人が自身の置かれている状況を問題のあるものとみなし、これを解決しようとする行動に出るが、この解決行動自体がとうの問題を生み出してしまおうというメカニズムを持ち、しかもこれが反復的に繰り返されるものを言う。」(長谷〔1991:78-79〕)

ここでの「悪」の要素は、循環の中にいる当事者が、その循環の中では本来の目的を達成することが出来ない（可能性が十分考えられる）にも関わらず、その現実から目を背け続ける点に求められる。鳥さんの場合、現実から目を背けることに正当性を見出している場面が見受けられた。この正当性が邪魔をするため、一見何ら問題のない、ただの循環であるかのように見えるのである。つまり、本人も周りも困っていないのだから、「嗜癖」や「悪循環」と捉えることは出来ないのではないか、と考えられてしまうのである。石川が述べる悪循環の場合、本人が陥っている悪循環の中では目的を達成することが出来ず、そのためそこからの離脱を欲しているという特徴があると考えられるが、今回調査した鳥さんの事例では、悪循環のなかにいると目的が達成されなくなるかどうかは明確ではなく、明確でないがゆえに、離脱するわけにもいかず、結果が出ない状態のまま、悪循環過程の中にいつまでも居続けることになる。鳥さんの場合、むしろ、結果が明確にならないような課題を出し、それを実行することにより、望み通りこの循環の中に居続けることに成功しているとも言える。

ここでもし、本来の目的を完全に諦める、または本来の目的の一部を諦め、残りは実行に移し、現実の自己の姿を正面から受け止めるなどの行動に出たとしたなら、可能態としての自己のみに寄りかかる「悪循環」から離脱することが出来るだろう。

ところが鳥さんの場合、本来の目的を完全に諦める、または一部を諦め残りを実行に移すなどの行動には出ていない。初めから、痩せるという目的のために様々な課題を課しながら取り組んできている。「程ほどで良い」などの「言い訳」は現実から目を背ける行為の正当化に他ならない。鳥さんは巧みに「言い訳」を使いこなしているが、本来の目的は諦めておらず、ずっと拘り続けているのだ。

更に、「言い訳」を巧みに使いこなすということは、本来の目的に近づいているのか、遠ざかっているのかははっきりしない状態に自分自身を置くということに繋がる。鳥さん自身、「ちょっとやすそとではもう痩せない。だから、甘いもの絶ったり、炭水化物減らしたり、ずっと続けないかん。一回や二回でなくずっと。」と発言しているように、痩せるためには継続して課題を遂行していかなければならないのだ。「根性がないから一週間したらまた止めちゃったりする」ようでは効果が表れないということは、鳥さん自身良く分かっていると思う。だが、継続して、真正面から本来の目的に向かって努力するという行動に出るわけにはいかない。もしそのようなことをしてしまえば、たちまち結果が明らかになってしまうからだ。そうして、この循環の中にいつまでも居続けることになるのだ。このような循環を、「悪循環」と呼ぶことが出来るのではないかと考える。

更に、悪循環の居心地の良さを知ってしまい、抜け出せなくなる状態を「耽溺」と捉えることが出来るだろう。本人が抜け出したいと思っていない点が、普通の悪循環の捉え方とは異なるが、確かにこの状態においても上述のような悪循環の構造が存在する。

そこで、悪循環過程が社会的に問題視されるか否か（ ）を除いた、拡大版の嗜癖定義で以後、考察していきたいと考える。つまり、現行の嗜癖定義で言えば「 構造が悪循環しており、そこから逃れることが出来ない状態」のみを嗜癖*定義にしたいと考える⁸。

⁸ 嗜癖定義の拡大をしたのは、本研究を行うにあたって現行の嗜癖定義では無理があったからである。これは、嗜癖定義そのものに対する全面的な変更を意図したものではない。嗜

表 4：嗜癖*定義の確認

現行の嗜癖定義	構造の悪循環 + 嗜癖対象が社会的に問題あり
拡大した嗜癖定義(嗜癖*定義)	構造の悪循環

4 - 2 嗜癖サイクルその1 知恵としての「言い訳」とプライド維持の達成

このサイクルは、どのような構造を持っているのだろうか。先ほどの李徴 complex やアルコール依存症者の悪循環の構造とどのような関係を持っているのか、以下で考察していきたい。

島さんの嗜癖サイクルにはいくつかの特徴がある。1つには自分に対する「言い訳」が成立しているという点が挙げられる。アルコール依存症者も、ちょっと一杯という気持ちでアルコールを飲んでしまい、結局酩酊状態に陥ってしまった時、「今回はたまたま」「運が悪かったから」という言い訳をした。島さんの場合例えば、痩せよう、運動しよう、と頑張ったこともあったけど、今は楽しい方に流れてきている。そのほうが自分の性格に合っていて、上手くいくのだ、という趣旨の発言があったが、これは、必死になって痩せようと運動しないことの「言い訳」として解釈することができる。

さらに、特徴的なのは、島さんの「言い訳」が幾通りにも及んでいることだ。水泳だけでなく、エアロビクス、筋力トレーニング、キレイな服への拘りなど、それぞれにおいて、「言い訳」が用意されている。キレイな服への拘りという点で言うと、同年代の女性と自分を比較してしまい、キレイな服をすらっと着こなしている人を見ると、「やっぱり痩せてたらいいなあ」と思うけど、一方では「もうこの年齢になったらそんなことは半分どうでもいいのだ」という趣旨の発言をしている。このような発言からも、キレイな服を着るために本気で痩せようとしているのではなく、半分どうでもいいというほどほどのところで頑張っているのだから、すらっとしたキレイな服が着られなくても「自己コントロール」に失敗したとは言えないという「言い訳」が読み取れる。この「言い訳」について、「アル中のプライド」のあり方との比較で、もう少し考察してみたい。

ここで、「アル中のプライド」について確認しておく。ベイトソンは自己の論文(Bateson [1971b 1972=1987 2000: 436])で、「失敗を『確率』や『運』の問題として捉えるとき、その人間は失敗を『自己』の外側に追いやっている。『アル中のプライド』は、そうやって『失敗』を『自分』の失敗でなくしてしまうのだ。」と述べている。つまり、失敗しても、「たまたま」「今回は運が悪かったから」と考え、「今度はきっと上手くいく」と、今回の「失敗」を「失敗」として認識するのを避けるのだ。この「たまたま」という言葉により、酒に溺れてしまう弱い自己を隠し、「本当は俺は出来るのだ」と信じ続けることに正当性を与えることが出来るようになるのだ。

島さんの場合はどうだろうか。島さんは、キレイな服への憧れはあるが、もうこの「年齢」になったら半分どうでも良いという趣旨の発言をしていた。ここで出てくる「年齢」

癖定義を拡大することにより、社会の見方を広げるのに役立つのではないかと考えている。

というキーワードは、どのような働きをしているだろうか。島さんは、Aフィットネスクラブに来る年代の女性と自分を比較し、キレイな格好をしている人を見ると、頑張らなければという気持ちになるという。次のような発言もある。「やっぱり同じ年やのに、この人は若く見えて、うちがおばさんに見えるって言われたらやっぱり嫌じゃない。それがまだ多少あるみたい。」このような発言から、島さん自身、本当はキレイな服を着たいと強く思っていると考えることができるだろう。しかし、実際は、本当に自分が満足できるサイズへは到達できていない。

ここで、仮に、「年齢」というキーワードを持ち出し「言い訳」をする、ということをしなかったら何が起るか考えてみたい。島さんは、嗜癖サイクルの中では避けて通ることが出来た「不安」に、直面しなければならなくなる。その「不安」とは、「本当はキレイな服が着たくてたまらないのだが、そのサイズがなかなか合うようにならない。もしかしたらこの先もずっと合わないままかもしれない。キレイな服が着られるようにならないのは、自己コントロールが出来ていないからだということ認めなければならない、」などという「不安」である。

ところが、「年齢」というキーワードを持ち出すことで、キレイな服への拘りを半分諦めているのだと説明することが出来るようになる。この説明で島さんは何を達成しようとしているのだろうか。

島さんは、「何もそんなに痩せてキレイな服を着ようと頑張らなくたって、年齢相応のものを着ていれば良いではないか」と考えることで、痩せてキレイな服を着るという課題の持つ意義の切り下げ⁹を行っているのではないだろうか。つまり、痩せてキレイな服を着るという課題はそれほど重要ではないと考えるのである。従って、もし痩せてキレイな服が着られなくても、その課題は重要ではないので島さんの「プライド」は傷つかずに済む。つまり、島さんが「年齢」というキーワードを用いて達成しようとしていたのは、島さん自身の「プライド」の維持なのである。

ここで、島さんの用いた「年齢」というキーワードと、アルコール依存症者の用いる「たまたま」という言葉は、共に、現実の自己と、「プライド」に支えられた可能態としての自己の相違点を弁解し、可能態としての自己こそ本当の自己だと主張する手段として用いられていると考えることができる。まさに、「年齢」というキーワードは「たまたま」という言葉の機能代替物（機能等価物）として捉えることが可能だろう。

表 5：嗜癖サイクル構造その1と、「アル中のプライド」との関係

関連性のある事柄	島さんの嗜癖サイクル構造 その1	「アル中のプライド」
「言い訳」をする	自分に対する幾通りにも及ぶ 「言い訳」 (例) 必死になって運動しないことに対する言い訳。 (例) 水泳、エアロビクス、	「アル中のプライド」に基づく「言い訳」 (例)・今回は「たまたま」失敗した。 ・運が悪かっただけ

⁹ これに関しては本論文末の補論3を参照せよ。

	筋力トレーニング、キレイな服への拘りなど、それぞれについて言い訳が存在する。	・今度はきっと耽溺症状に陥らないはず
「プライド」を保つ為の言葉を用いる	(例)「年齢」	(例)「たまたま」

4 - 3 嗜癖サイクルその2 課題の高度化・多重化および課題と課題解決行動の関係を曖昧にする構造

アルコール依存症者の場合、「『アルコールに耽溺してしまう弱い自己』は、そうでないことを証明するために、まずはアルコールから我が身を遠ざける、という選択をする。しかしこれは、『アルコールへの耽溺を矯正する強い自己』にとってみれば容易すぎる選択に思え、結局アルコールを飲んでも乱れないことを証明する、という選択をなしてしまうの」であった。ここで起こっていることを石川は「課題の高度化」と呼んでいた。(石川〔1988：105〕)

島さんの場合はどうだろうか。島さんにとって課題と呼べるものは水泳、筋力トレーニング、エアロビクスなど、多岐に亘っている。水泳を取ってみると、フィットネスクラブに入りたての頃より泳ぎは上達しただろうし、心肺機能も発達し、徐々にレベルの高いメニューを選択するようになったと考えられる。また、筋力トレーニングにしても、筋力が高まるにつれて、行う回数を増やす、負荷を重くするなどしていったと推測できる。島さんの場合にも「課題の高度化」は可能性として考えられる。更に、課題が多岐に亘っていることから、これを「課題の多重化」と呼ぶことにしたい。したがって、島さんの事例は「課題の高度化」と「課題の多重化」の並存したケースと言うことが出来るだろう。

更に、アルコール依存症者の悪循環の特徴として、「課題の高度化」が起こり、それに伴いアルコール耽溺者の本来の課題である、「過度の飲酒を慎むことにとって破壊的な結果をもたらす」ということが挙げられている。(石川〔1988：106〕)

島さんの場合はどうであろうか。島さんの事例では、水泳や筋力トレーニングなどで課題の高度化が起こるが、それによってアルコール依存症者のように破壊的な結果をもたらすことはなく、どの課題も痩せるという目標にまっすぐ向かっているかのように思える。つまり、水泳や筋力トレーニングなどの課題の場合、痩せるという課題と課題解決行動に矛盾はないと捉えられそうである。

しかし、島さんの場合、水泳や筋力トレーニングなどの様々な課題と共に、「ほどほどにする」という課題が含まれているので慎重に考えなければならない。「ほどほどにする」という課題が機能することにより、痩せる方向に順調に進んでいくかのように思える循環の目指す先が曖昧にされてしまうのである。つまり、本来の目的である「痩せる」ということが達成出来るかどうか不明確にされてしまうのだ。これがどのような構造を持っているのか、「課題と課題解決行動の矛盾を含む悪循環」(過剰決定型)(石川〔1988：106〕)との比較で考察していく。

アルコール依存症者の場合、課題と課題解決行動が矛盾していることに周りの人間は気

づくことが出来る。ところが、依存症者自身はそれを矛盾とは捉えず、「正しい」解決行動として論理のすり替えを行っている。

それに対し島さんの事例では、「痩せる」という課題（目標）と「ほどほどにする」という課題解決行動（目標達成行動）が矛盾しているとも、がっちり噛み合っているとも言い切ることが出来ない。なぜなら、課題と課題解決行動が矛盾していると断定できるような、失敗を表す明確な結果が表れておらず、その一方で、課題解決行動が課題に対して効果的に働いていると言えるほど、着実に目標に近づいていることを示すような成果も表れてはいないからだ。¹⁰更に、島さんは課題と課題解決行動が噛み合っていないことを正当化する様々な理由を用意することにより、課題と課題解決行動の關係に「正しい」解釈の仕方を与えている。それを客観的に分析すると、論理のすり替えとして理解することが出来るが、周りの人間、更に本人でさえ、それが論理のすり替えであるということに気づくことは出来ない。なぜなら、結果が明確にならない構造が出来上がっているからだ。

まとめると、アルコール依存症者の場合は依存症者本人を取り巻く人間が課題と課題解決行動の矛盾に気づくことが出来るが、島さんの場合、それが容易でない点が両者の相違点であり、過剰決定型と異なる悪循環を生む元となっていると言える。更に、島さんの場合、アルコール依存症者の場合のように、「課題の高度化」が契機となり、課題と課題解決行動の奇妙な關係が生まれたわけではない。これも両者の異なる点として付け加えておく。

表 6：嗜癪サイクル構造その2と、アルコール依存症者の悪循環構造との關係（石川〔1988:105-106〕に基づき佐々木が作成）

関連性のある事柄	島さんの嗜癪サイクル構造 その2	アルコール依存症者の悪循環構造
「課題の高度化」	「課題の高度化」と「課題の多重化」並存型	「課題の高度化」あり
「課題」と「課題解決行動」の關係	・「課題と課題解決行動の關係を曖昧にする構造」 ・「課題の高度化」が契機ではない	・「課題と課題解決行動の矛盾を含む悪循環過程」=「過剰決定型」の悪循環過程 ・「課題の高度化」が契機

4 - 4 嗜癪サイクルその3 知恵としての曖昧化の追究がもたらす悪循環の居心地の良さ

上述のように、島さんの嗜癪サイクルには、「ほどほどにする」という課題が上手く組み込まれている。「水泳をする」、「筋力トレーニングをする」などの課題と共に、「ほどほどにする」という課題が同時に存在しているのだ。

ここで、李徴が自意識の罠に陥った過程を確認しておく。李徴は官位を投げ捨て詩作に

¹⁰ ここでは、悪循環に陥っている本人が課題と課題解決行動の關係の奇妙さに気づいているかということよりも、本人を取り巻く人々が、その奇妙さに気づく状態にあるかが重要な問題となっている。

道を求めたが、進んで師に就く詩友と切磋琢磨するなどということはしなかった。それは、李徴の「臆病な自尊心」と、「尊大な羞恥心」がそうさせるのであった。つまり、自分には詩作の才能があると信じたいのだが、師に就く、詩友と競争するなどしたら自分に才能がないことが証明されるという、彼にとって最も恐ろしいことが起こる危険性があるので、『自分』の『才能』が試されないことなら行い、試されるようなことは避けて通るのである。避けて通る限り、自分の才能がないことが証明されるという事態は逃れることが出来る。「しかし、このような生活態度を有限の人生の中で続けても『自分』の『才能』は証明されず、それが時に大きな精神病理をひきおこす。」(石川〔1988：102〕)

島さんの場合にも、同様の先送り構造が見られないだろうか。島さんの事例では、水泳や筋力トレーニング、サプリメントなど様々な課題が、「ほどほどに」実行されているので、痩せるという目標にどれが貢献しているのか分からないという状況にある。そこで仮に、どれが効いているのか確かめるとする。例えば課題を水泳だけに絞るとする。この場合「ほどほどにする」という課題も除いているので、一生懸命水泳をするしか方法はなくなる。もし、これで体重が目標まで落ちなかったら、自分は「痩せる」という目標を達成することが出来ない人である、自己コントロールが出来ない人である、ということが証明されることになる。これは自己の「プライド」を傷つけることに他ならない。例えここで、目標体重に到達することが出来たとしても、水泳だけに絞った課題というのは島さん自身の分析からも分かるように、ある程度の気楽さがなければ長続きするものではなさそうだ。長続きせずリバウンドしてしまうということも、恐ろしいことである。したがって、結局島さんは、「ほどほどにする」という課題が含まれた嗜癖サイクルに身を置くことを選択してしまうのである。つまり、島さんの事例にも、李徴 complex で見られる先送りの構造が存在するのである。

更に、李徴 complex の悪循環構造を説明する「過小決定型」という言葉の説明を改めてしておきたいと思う。李徴は、自分に詩作の才能があることを強く信じており、そのことが証明されることに強い拘りを持っている。しかし、才能の存在が反証されることを恐れるあまり、才能を試す機会から逃げ続けてしまう。逃げ続ける限り、才能が反証されることはないが、一方で才能が証明されることもない。このような循環の中に身を置き続けることに李徴は耐え切れなくなり、終に自己の破壊を導くことになった。この悪循環を石川は「過小決定型」というキーワードで説明した。その定義は、「当該の個人にとって緊要な課題設定とその解決行動の不在を成立の要件とする悪循環」である。(石川〔1988：104〕)

これを島さんの事例に当てはめるとどうなるだろうか。島さんにとって「緊要な課題」とは、「痩せる」ということだ。その課題を解決するために、水泳や筋力トレーニング、更に「程ほどにする」などの課題が多重的に課され、それを実行することが緊要な課題に対する一応の解決行動となっている。一応と言ったのは、この多重的な課題の実行が、必ずしも解決行動として機能していると断定することが出来ないからだ。しかし、島さんはそれらを解決行動として登用しており、周りの人間にも、それが解決行動として機能しているように見える。それ故、島さんの事例において、解決行動が不在であるとは言い切れないのである。したがって、「過小決定型」の要件である、課題解決行動の不在が満たされるとは言えず、島さんの悪循環は「過小決定型」ではないと言うことが出来る。島さんの「悪循環」は、課題解決行動が不在なのではなく、存在はするが解決行動としての機能を曖昧

にしか発揮していない点が重要なのである。島さんにとって課題解決行動が曖昧に機能するという事は、この「悪循環」を居心地の良いものとして維持していく上で、更に「プライド」を守っていく上で、大変重要なのである。島さんは、これらを達成するために、知恵としての曖昧さを追究していると考えることが出来る。

表 7：嗜癖サイクル構造その3と、李徴 complex の悪循環構造との関係

関連性のある事柄	島さんの嗜癖サイクル構造 その3	李徴 complex の悪循環構造
緊要な課題設定とその解決行動の有無、関係	<ul style="list-style-type: none"> ・「緊要な課題設定と、その解決行動の(解決行動としての)機能の曖昧化の追求」 緊要な課題：痩せること 解決行動：ほどほどに水泳やエアロビクスなどを行うこと ・「知恵としての曖昧化の追究」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「当該の個人にとって緊要な課題設定とその解決行動の不在を成立の条件とする悪循環」=「過小決定型」 緊要な課題：詩作の世界で才能が認められること 解決行動：不在

4 - 5 嗜癖サイクルその4 評価のアンビバレンス

注目すべき点として最後に挙げるのは、島さん自身、今の体重を太り過ぎていても、痩せているとも思っていないということだ。「意外と、76¹¹ぐらいになってきたら、太ってるんやけど、身長あるから、それなりに、『変かな』いう程度で済む。そんなに『醜いな』というのがないから、気が楽やけど」「太ってたら、ああいいなあと思った服が入らないじゃないですか。あれが入るようになりたいなあと思う。でもまあ、ちょっと細くなったから少しは入るようになったから嬉しかった」という発言からそれが読み取れる。

李徴の場合、「自己の能力についての信頼と不信のアンビヴァレントな同時存在」(石川〔1988：104〕)が悪循環を形作っているとされていた。自己の能力を信頼しているからこそ「自分の能力を証明することに固執し続ける」のだが、一方で自己の能力に対する不信が存在するため、「証明の機会が与えられても……何とか言を左右にして逃避する」(石川〔1988：104〕)のである。

同様に島さんは、自分の体型について、醜いほど太ってはいないと認識している一方で、痩せているとも考えてはいない。醜いほど太ってはいないという「ゆとり」から、ひたすら減量に励むのではなく、楽しみも取り入れながら程ほどに課題を行うのだが、痩せている訳でもないという「焦り」から、エクササイズを完全に怠けるわけにもいかず、やはり「ほどほどに」課題を行うという選択に至るのだ。これを、「自己の体型認識についてのゆとりと焦りのアンビバレントな同時存在」と呼ぶことにする。

以上のように、島さんの嗜癖サイクルには様々な要素が複雑に絡み合い、微妙なバランスを保っていると言える。

¹¹ この数字はウエストのサイズを表している。

表 8：嗜癡サイクル構造その4と、李徴 complex の悪循環構造との関係

関連性のある事柄	島さんの嗜癡サイクル構造 その4	李徴 complex の悪循環構造
評価のアンビバレンス	自己の体型認識についてのゆとりと焦りのアンビバレントな同時存在	自己の能力についての信頼と不信のアンビバレントな同時存在

5. まとめ

本研究では、島さんを事例として、普通の人を持つ嗜癡*の構造や、嗜癡*を生活に上手く取り入れている様子を、アルコール依存症者や李徴の悪循環構造と比較しながら分析してきた。島さんの事例では「言い訳」、課題を「ほどほどに」行うこと、「課題の意義の切り下げ」などのテクニックを用いて「プライド」を維持していく様子が見られたが、これは島さんのみならず、世間一般の誰にでもあり得る事例として捉えることが出来るのではないかと考えている。

更に、島さんの事例について構造が「悪循環」していると述べたことに関して、私自身の考えを明らかにしておきたいと思う。4 - 1において嗜癡定義について考察した際、特に「悪」という言葉に拘ったが、私自身はこの循環を「悪い循環」だとは捉えていない。「プライド」を維持するために「悪循環構造」の中に居続けることを選択し、「言い訳」というテクニックを上手く取り入れることによって、「悪循環構造」をより強固なものとする様子を、私はむしろ肯定的に捉えている。これは、生きていく中で自己の「プライド」が傷つくのを防ぐ為のテクニックであると私自身は捉えている。もし、このテクニックを身に付けていなければ、その人の「プライド」は常に危険に晒されたままだということになる。時には「プライド」を危険に晒すという経験も必要かも知れないが、それはつまり「プライド」が傷つく可能性が十分考えられる状態に自分自身を置くということであるので、常にその状態に居続け、「プライド」を維持していくのは容易ではないはずである。従って、多く人は出来るだけ困難を避ける選択をするのではないだろうか。つまり、自己の「プライド」を維持するために「言い訳」をし、「悪循環構造」に居続けるという選択をすることは生きていく上での知恵であり、誰もがやっていることなのではないだろうか。このように、自己の「プライド」を傷つけないよう自分自身を導いていくことこそが「自己コントロール」なのではないかと考えている。

補論1：題名で用いた嗜癡*は、一般的な「嗜癡」とは異なり、社会的に問題視されるような目だった症状が見られないものも含めて考えている。(本稿4 - 1参照)

題名『『自己コントロール』の成功としての嗜癡*』は、調査対象者である島さん(仮名)が様々な側面から巧みに「言い訳」をすることにより、自分を不安から解放していく様子

を表している。「自己コントロール」とは、自分自身を不安から解放し、精神的不安定に陥らないよう調整することであり、その手段として島さんは「言い訳」を用いた。「自己コントロール」に成功すると、精神的安定は得られるが、それは「言い訳」という条件付きの安定である。条件付きの安定を支えているのは、自分自身に課した緊要な課題への拘りである。更に、緊要な課題への拘りは精神的不安定を導く要素も持っており、その不安定さをカバーする為、更に「言い訳」を重ねていくことになる。この循環への耽溺を嗜癖*と呼ぶ。「『自己コントロール』の成功としての嗜癖*」とは、島さんのダイエット行動の嗜癖的側面を表しているのである。

補論2：今回調査のデータとして使わせていただいた島さん（仮名）以外に、3名の方；Aフィットネスクラブに通われている佐藤さん（仮名）、高田さん（仮名）、Bフィットネスクラブに通われている藤沢さん（仮名）に調査のご協力をいただいた。他の3方にも島さんの事例で説明した嗜癖サイクルの構造が含まれていたためその様子を以下に示したいと思う。

・佐藤さんの場合

佐藤さんは痩せるという課題を設定している。佐藤さんの「言い訳」は、痩せたいが食事制限までは出来ない、食事制限までしたらストレスになる、というものだ。「食事制限しなさい言われたらようせん、って言うんよ。量ぐらいいはちょっと減ったりしたけど。」「ご飯の量をちょっとぐらいい減らすのは出来るけど、油っぽいもの止めなさいとか野菜ばかりにしなさいっていうのは絶対出来んから。」という発言があった。

更に佐藤さんは、「プライド」を保つ為の言葉として「年齢」や「身長」を用いていた。「自分の年からいくとそんなに若いお母さん見ても気にしなくていいっていうのはあるんやけど、何となくね、同年代の子供連れとると思うとやっぱり羨ましいですよ。」「細い人見て羨ましいないっていうのはあるけど、そういう人って身長もあるでしょ。〔細くて小さくてかわいい人もいますけど……〕やっぱりそういう人はスタイルいいなとは思わないけど。（略）スタイルいい人っていうのは身長もあってキュッとなってるんでしょ。」などの発言があった。

更に、課題と課題解決行動の関係を曖昧にする構造も見られた。例えば、「痩せたいけど、今はもう無理なところもあるから。細い人見て羨ましいとは思うけど、体重落としたいとはここ来て先生にも言うよ。どう言うたらいいんやろう？痩せたい言うのもあるけど」「本当はね結婚前の50何キロに落としたいんやけど、何ぼやっても無理やから体重自体を56、7くらいまで落としたいって言うのはあるんやけど。思ってたんやけど、ちょっとね、落ちないですね。」「本当にどうしたら良いんだろうね、っていう感じやね今は。本当は落ちるもんなら落としたいんやけど、なかなかね、落ちなくて。」「今は前ほどの真剣さはないかな。（略）痩せたいんやけど痩せん。ここまでやって痩せんのかいう感じやけんね。」「痩せたからどこかへ出てどうにかしましょ言うんではないからね。ただ、普通サイズの服が着れたらいいと思う。」などの発言があった。

更に、島さんと同様、自己の体型認識についてのゆとりと焦りのアンビバレントな同時存在が見られた。ダイエットを始める前の服のサイズは19号だったが、ダイエットで10キロ減量したので13号が着られるようになったそうだ。「もうこれ以上のサイズはありま

せんなんて言われなかったらダイエットなんてしなかったと思うけど」という発言もあったが、現在は普通サイズの服が着られるようになったことで、ある程度ゆとりが持てるようになったのではないだろうか。そのため、自分自身をそれ程厳しく追い詰めることなく現状もある程度肯定しながらダイエットに取り組むのではないだろうか。しかし一方で、13号でもまだ満足はしていないと取れる発言や、若い母親を見て羨ましいと思う心境についても語っていた。このような焦りが存在するため、現状を完全に認めてしまうことはできず、やはり島さんと同様、ほどほどにダイエットを行うという選択をしてしまうのではないだろうか。

・高田さんの場合

高田さんは B フィットネスクラブでボディービルダーのトレーニングをしている。高田さんの現在の目標は腕周りを 45 センチにすることで、その為にウエイトトレーニングや食事制限などを行っている。高田さんにも「プライド」を維持するために用いていると捉えられる言葉があった。「〔体を鍛えて自分の中で満足度が上がるというのが大きいのでしょうか？〕それがすべてだと思いますね。〔それを何かに生かしたりするわけではなく、自分の内面での問題なんじゃないかな。〕ヤッターというくらい。」「〔次にもし新しいことが表れたとしても、それはやっぱり他人に評価されることだと思いますか？〕人に評価されるのもですけど、自己満足が大きいですね。と言うても人から何も評価されないというのはちょっと虚しいと思うので、両方ある方が良いんですけど。自己満足っていう範囲は大きいと思います。」などの発言があった。高田さんは「自己満足」という言葉を用いることにより、たとえ他人から良い評価を得られなくても「プライド」が傷つくことのないよう「自己コントロール」をしているのではないだろうか。つまり、他人から良い評価を得ることの意義を切り下げることで、自己の「プライド」を維持しているのである。

・藤沢さんの場合

藤沢さんも他の人と同様に、巧みな「言い訳」をしていた。痩せることが課題だが、ダイエットには苦労している。一時期お酒の付き合いを絶ったことによってダイエットに成功したことがあるが、しばらくして再び付き合いを始めるようになり、体重が元に戻ってしまった。「みんなに酒を止めたら良いて言われる。競技場に行っている人で晩酌止めてもの凄い体重が減っていった人があるけどね。(略)それは無理やね。飲みながら痩せたい。」「付き合いは止めれん。大事やけんね。」「付き合いは大事ですよ。やっぱり断るのは寂しいわ。」などという発言があった。

この発言は「課題の高度化」と捉えることも出来る。ダイエットに成功したのはお酒の付き合いを断っていたからなのに、今度はお酒の付き合いを続けながら痩せたいということを行っている。「付き合いを絶って痩せる」という課題と、「付き合いを続けながら痩せる」という課題では、後者がより達成が困難で、高度化した課題であると言えるだろう。更に、マラソン、トライアスロンに出場し、動物性蛋白質は鶏肉だけにし、豆腐を毎日欠かさず食べ、お酒は焼酎しか飲まないなど、痩せるために課された藤沢さん独自の課題が多重的に存在する。従って、藤沢さんの「悪循環構造」は「課題の高度化」と「課題の多重化」が並存した形態を備えていると言えるだろう。

更に、課題解決行動の（解決行動としての）機能の曖昧化が見られる発言があった。藤沢さんは体重オーバーで膝を故障し、腰にはコルセットを巻いている。本人はインタビューの初めに、太っている原因を「飲みすぎ、食べ過ぎ」と言っていたが、後半では「10時以降のアルコールがいかんのやってね。分かてるんやけどね。練習量が足りんのやね。練習時間が。」と言い、今後の目標としては飲むことは止めずに運動量を増やすことで課題を達成するという趣旨の発言をしていた。痩せるという課題に対して運動量を増やすのは解決行動だとは言えるが、運動量を増やすことよりも重要なのは飲みすぎ、食べ過ぎの制限ではないだろうか。藤沢さんの発言から、彼自身もそのことに気づいていることが分かるが敢えてそのような選択をしているように思う。飲みすぎ、食べ過ぎの制限はせず運動量を増やすだけという解決行動では、解決行動としての機能が効果的に果たされるかどうか疑わしい。しかし、解決行動として機能しないと断言出来るほど意味のないことだとも言えないだろう。これは藤沢さんの「知恵としての曖昧化の追究」ではないだろうか。

以上のように、島さん以外の3方について嗜癖構造を確認してきたが、3方にはそれぞれ欠けている部分があった。（表9参照）その欠けた部分を網羅的に含んでいるのが島さんの事例である。従って、島さんのデータを扱うことにより構造を網羅的に説明することが出来るのである。

表 9：島さんの嗜癖サイクルを基準とした調査対象者全員の嗜癖構造
触れなかった箇所には斜線

島さん	佐藤さん	高田さん	藤沢さん
「言い訳」をする	食事制限はストレスになるので出来ないという「言い訳」		付き合いは大事なのでお酒は止められないという「言い訳」
「プライド」を保つ為の言葉を用いる	「年齢」、「身長」などの言葉で課題の意義の切り下げ 「プライド」維持	「自己満足」という言葉を用いることで他人から良い評価を得ることの意義を切り下げる 「プライド」維持	
「課題の高度化」と「課題の多重化」並存型			課題の高度化：お酒の付き合いを絶つことにより課題を達成した 今度はお酒の付き合いを続けたままで課題を達成しようとしている 課題の多重化：マラ

			ソソ、トライアスロン、独自の食事制限など痩せるための課題が多重的に存在
<ul style="list-style-type: none"> ・課題と課題解決行動の関係を曖昧にする構造 ・緊要な課題設定と、その解決行動の（解決行動としての）機能の曖昧化の追求 ・「知恵としての曖昧化の追及」 	<p>課題：痩せること 課題解決行動：水泳、筋力トレーニングなど。食事制限なし。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食事制限をすれば痩せるという課題が達成される可能性は高まるはずだが、それはしない。 ・痩せるという課題への拘りを曖昧にする発言。 		<p>課題：痩せること 課題解決行動：飲酒・食事量制限ではなく運動量を増やすこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・飲酒・食事制限こそが解決行動として最も必要だと自覚はしているが、運動量を増やすことを解決行動として選択する。 ・解決行動の（解決行動としての）機能の曖昧化の追究がなされている
自己の体型認識についてのゆとりと焦りのアンビバレントな同時存在	<p>ゆとり：13号・普通サイズが着られるようになった 焦り：13号に満足はしていない。ウエスト周りがまだ気になる。若くてキレイな母親を見ると羨ましくなる。</p>		

補論3：課題の意義の切り下げを行うというテクニックは、「プライド」維持に繋がる構造を持っているが、その構造を補足すると考えられる問題について以下で述べていきたい。

島さんの発言の中には、「疲れを取るためにサプリメントも結構飲んでる（略）私は昔からサプリ飲まんと、精神的なもんやろうけど、効いてるんか効いてないんか分からないけど。」というものがある。疲れを取るためにサプリメントを飲んでいるのだが、実際には効果があるのかないのかははっきり分からないと言うのだ。インタビューから、島さんは沢山の種類のサプリメントを飲んでいるということが分かるのだが、「あれが良いって言うたら

飲んだり、これが良いって言うたら飲んだり」するということは、それだけ費用も沢山かかるということだ。さらに、「あんまり効果があるのか、こんだけ食べても太らないのはそれは効果があるのか、その辺は分からないんやけど。飲んでたら気が済むんですよ。あ、飲んでるから大丈夫とか言って。それでも疲れてるからこれではいけないと思って最近またね、にんにく卵黄飲んでましたよ。」という発言もある。

島さんにとって、サプリメントを飲み続けることに意義があるのだとしたら、他人にも分かるような効果らしい効果がなくても、それは続ける価値があるのだろうと思う。しかし、島さんは疲れを取るためにサプリメントの服用を続けているのであり、飲んでいて気が済むというだけでは満足できないのではないだろうか。満足できないからこそ、飲んでいても効果らしい効果が上がらないと思う度に次々新しいサプリメントに挑戦していくことになるのではないだろうか。

それでは、「飲んでたら気が済むんですよ。」「何か飲んでなかったらどんどん悪くなるような気がして。」など、サプリメントを飲むことで多少なりとも精神的に支えられているという趣旨の発言はどのような働きをしているのだろうか。

更に、島さんは他にも次のような発言をしている。「ひょっとしたらエアロもあんまり膝には良くないからせん方がいいんかも。どんなんか様子見もって。特別前より悪くなって言うんはない。4年ぐらいおるけど。放ってたら多分もっと悪くなってたと思う。」この発言で、島さんは、4年間ダイエットや健康管理の為にしてきたことは無駄ではなかったという主張をしていると捉えることが出来る。

サプリメントやフィットネスクラブに関する上述の発言は、島さん自身に沸き起こる「後ろめたさ」を表していると考えられる。これまで島さんは痩せること、健康になることに拘り続けて来たが、その為に様々なことを犠牲にしてきたのだろうと思う。特に経済面、時間面での負担は大きかったのではないだろうか。経済的な負担としては、フィットネスクラブに通うための費用、サプリメント代などが考えられる。また、時間面では、島さんの発言によると、月曜から金曜は大体1時か2時位にはフィットネスクラブに来て、夕方5時くらいまで居るということなので、フィットネスクラブに居るだけでも一日3~4時間、一週間に15~20時間を費やしていることになる。当然、行き帰りの時間も含まれるし、時間だけでなく同時に労力も沢山消費していると思われるので、自宅に帰ってから休む時間なども含めると、かなりの時間が費やされていると考えることが出来る。

これ以外にも「後ろめたさ」を表す発言は見られる。初めのうちはハードな課題をこなして8~9キロの減量に成功していたが、次第に楽しく、緩めに課題を行うようになり、「今のところは痩せる成果はないですね」と本人が言うように、目標に近づいているのか良く分からない状態である。「恐ろしい、怖いですよ。運動は止められない。」という発言などから、失敗した時のことを危惧すると共に、成果がはっきりしない課題に取り組んでいくことに対する「後ろめたい心境」が読み取れるように思う。

参考文献

天野 武 2004 「リストカットにみる自己確認と自己表出の身体への転位」、『現代社会理論研究』(14): 318 - 330。

浅野 千恵 1997 『女はなぜやせようとするのか』, 勁草書房。

- Barry, Glassner 1988 BODIES Elaine Markson Literary Agency . = 1992 小松直行訳, 『ボディーズ』, マガジンハウス。
- Bateson, Gregory
- 1956 “ Toward a Theory of Schizophrenia ”, *Behavioral Science* 1-4. 1972 *Steps to an Ecology of Mind*, Harper&Row = 1985 佐藤良明訳, 「精神分裂病の理論化に向けて」, 『精神の生態学』上, 思索社: 295 - 329。 2000 新思索社: 289 - 319。
- 1971a “ The Logical Categories of Learning and Communication ” 1972 *Steps to an Ecology of Mind*, Harper&Row = 1987 佐藤良明訳, 「学習とコミュニケーションの論理的カテゴリー」, 『精神の生態学』下, 思索社: 399 - 422。 2000 「学習とコミュニケーションの階型論」, 『精神の生態学 改訂第2版』, 新思索社: 382 - 419。
- 1971b. “ The Cybernetic of ‘ self ’: A Theory of Alcoholism ”, *Psychiatry* 34:1-18. 1972 *Steps to an Ecology of Mind*, Harper&Row = 1987 佐藤良明訳, 「自己のサイバネティクス アルコール依存症の理論」, 『精神の生態学』下, 思索社: 443 - 484。 2000 「『自己』なるもののサイバネティクス アルコール依存症の理論」, 『精神の生態学 改訂第2版』, 新思索社: 420 - 455。
- 1979 *Mind And Nature*, John Brockman Associates, New York. = 2001 佐藤良明訳, 『精神と自然 生きた世界の認識論』, 新思索社。
- Carnes, Patrick 2001 OUT OF THE SHADOWS Health Communications. = 2004 内田恒久訳, 『セックス依存症 その理解と回復・援助』, 中央法規出版株式会社。
- Erving, Goffman 1961 *Two Studies in the Sociology of Interaction* The Bobbs-Merrill. = 1985 佐藤毅・折橋徹彦訳, 『出会い ゴッフマンの社会学2 相互行為の社会学』, 誠信書房。
- 藤嶋 康隆 2004 「ダイエットと拒食症に関する社会学的一考察 消費する身体・コントロールする身体」, 九州大学大学院人間環境学研究院 (ed.) 『人間科学 共生社会学』4: 61 - 73, 人間科学部門 共生社会学講座。
- 伴 好彦 2002 「本学学生の客観的体型判定とダイエット行動に関する研究」, 武蔵野短期大学 (ed.) 『武蔵野短期大学研究紀要』第16輯: 1 - 8, 武蔵野短期大学。
- 橋本 勲・小幡 夏子 1999 「若い女性の適正体重とダイエットの現状」, 日本子ども家庭総合研究所研究企画・情報部 (編集責任) 『母子保健情報』(40): 24 - 30。
- 服部 幸應 2000 「食べてはいけない! 子どもたちにまで広がっている『ダイエット』の怖さ」, 『論座』: 134 - 137, 朝日新聞社。
- 宝月 誠 (ed.) 1999 『講座社会学 - 逸脱 - 』10, 東京大学出版会。
- 深谷 昌志・門脇厚司 1985 『青少年文化』, 放送大学教育振興会。
- 石川 洋明 1988 「自意識の悪循環過程をめぐって」, 『ソシオロギス』(12): 100 - 115。
- 岩崎 正人 2004 『世話をやく女と束縛する男 愛に依存する人々』(生活人新書 123), 日本放送出版教会。
- 岩谷 朝美・中谷 和男 2001 『嗜癖 愛したい、でも愛されたい』, 文芸社。
- 加藤 まどか 2004 『拒食と過食の社会学』, 岩波書店。
- 加藤 直子・山岡 昌之 1999 「若い女性と摂食障害 (拒食症、過食症) の治療 再養育療法を中心に」, 日本子ども家庭総合研究所研究企画・情報部 (編集責任) 『母子保健情報』(40): 55 - 59。
- 香山 リカ 2004 『私の愛国心』, 筑摩書房。

- 松浦 賢長 2000 「女性雑誌に見るダイエット広告・記事の変遷」,日本子ども家庭総合研究所研究企画・情報部(編集責任)『母子保健情報』:71-78,社会福祉法人 恩賜財団母子愛育会。
- 鍋山 祥子,不明,「共依存概念の混乱と問題性 フェミニズム批判を踏まえて」
(<http://web.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~nabeyama/works/nabe1.htm>, 2005.11.27)
- 中村 英代 2004 「摂食障害とダイエット ダイエットという行為を継続するプロセスへの着目」,
『現代社会理論研究』14:331-341。
- 中島 敦 1969 『李陵・山月記』,新潮社。
- 野上 芳美(ed.) 1998 『摂食障害 こころの科学セレクション』,日本評論社。
- 野口 裕二 1996 『アルコールリズムの社会学 アディクションと近代』,日本評論社。
- 及川 研 2002 「特別企画 小学生のやせ願望とおしゃれ願望 子どものダイエット 子どもは『体重』をどうとらえているか」,『児童心理』56(2):106-112,金子書房。
- 大橋 薫(ed.) 1980 『アルコール依存の社会病理』,星和書店。
- 大平 健 1996 『拒食の喜び,媚態の憂うつ』,岩波書店。
- 大村 英昭・宝月 誠 1979 『逸脱の社会学』,新躍社。
- Roth,Geneen 1984 BREAKING FREE FROM COMPULSIVE EATING The Miller Agency. = 2000
斉藤学監訳,『食べ過ぎることの意味 過食症からの解放』,誠信書房。
- 斉藤 学(ed.) 1999 『依存と虐待 こころの科学セレクション』,日本評論社。
- 佐々木 大輔 1999 「現代の若い女性の『やせ』志向とダイエット」,日本子ども家庭総合研究所研究企画・情報部(編集責任)『母子保健情報』(40):8-11。
- Schaef,Anne,Wilson 1989 ESCAPE FROM INTIMACY:The Pseudo-Relationship Addictions
Untangling the "Love"Addictions:Sex,Romance,Relationships The Lazear Agency. = 1999 高島克
子訳,『嗜癖する人間関係 親密になるのが怖い』,誠信書房。
- Sharlene,Hesse Biber 1997 Am I Thin Enough Yet? : The Cult of Thinness and the
Commercialization of Identity Oxford University Press. = 2005 宇田川拓雄訳,『誰が摂食障害を
つくるのか 女性の身体イメージとからだビジネス』,新躍社。
- 清水 賢二 徳岡秀雄 2002 『逸脱行動論』,放送大学教育振興会。
- 清水 賢二・岩永雅也(ed.) 1993 『逸脱の社会学』,放送大学教育振興会。
- 副田 あけみ 1998 「嗜癖問題と家族関係問題」,副田あけみ・遠藤優子(eds.)『嗜癖問題と家族問題
への専門的援助 私的相談機関における取り組み』:3-22,ミネルヴァ書房。
- 高橋 亜矢子ほか 2004 「女子学生の身体状況並びに体型意識とダイエットに関する調査研究」,飯淵貞
明(eds.)『和洋女子大学紀要』:41-60,和洋女子大学。
- 竹 村 道 夫 2003 「嗜癖のいろいろ」
(<http://www2.wind.ne.jp/Akagi-kohgen-HP/AD-reportbyMTforKyofukai.htm>, 2005.11.27)
- 牛込 恵子ほか 2004 「成長期の食生活と無月経に関する研究」,小此木成夫(ed.)『学苑』(770):55
63,昭和女子大学近代研究所。
- 渡辺 由美子ほか 1996 「学生の体重減量を目的とした運動とダイエットに関する研究」,四国大学紀要
委員会(ed.)『四国大学紀要』(6):117-124,四国大学。
- 山登 敬之 2003 「若者文化、ダイエットと摂食障害 美の強迫と成熟の困難さのはざままで」,『こ
ころの科学』:22-27,日本評論社。
- 山内 浩司 1997 「『やせたい教』からの脱出」,『毎日新聞 WEEKLY AERA』:6-8,毎日新聞社。

就職支援室における相互行為分析

田中 文恵

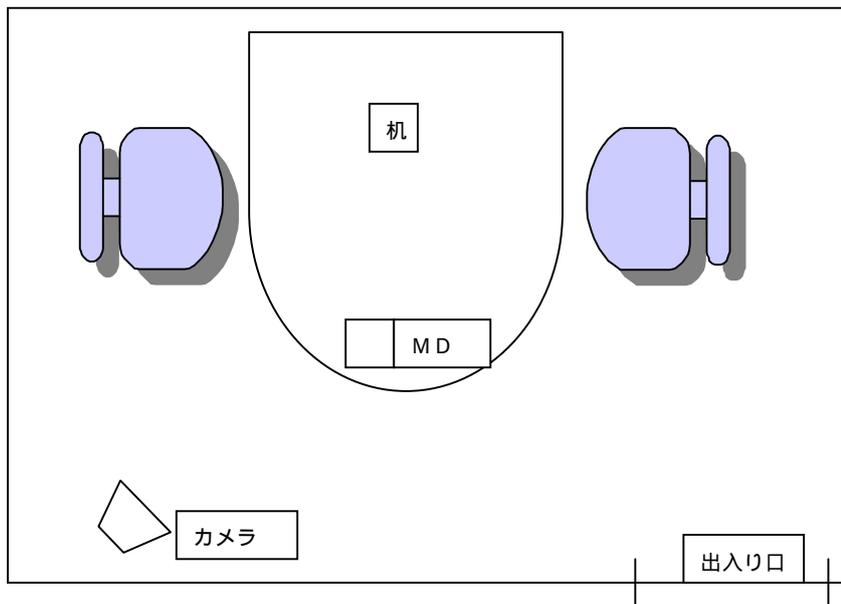
0 . はじめに

本研究では、X大学（以下、施設等の名前は仮名とする）の就職支援室で行われている模擬面接・相談の様子を撮影し、より詳細な観察・分析を行うことで、就職の模擬面接・相談という場で面接官と相談者のどのような会話のやり取りがおきているのか見ていきたい。また、就職支援室の一画で行われている模擬面接や相談の中での面接官と相談者のやり取りや動作、視線がどのようにしてその場を模擬面接・相談の場として成り立たせているのかを分析・考察していく。

1 . 調査概要

1 - 1 . 調査の概要

2004年7月22日（木曜日）と2004年7月27日（火曜日）の二日間、X大学内の就職支援室で行われている模擬面接・相談の様子を撮影を行った。面接官として外部講師が来校し、火曜日には男性面接官が、木曜日には女性面接官が担当している。模擬面接・相談は、就職支援室の一画を間仕切りで区切られた一画で行われている。基本的には前日までに相談者が就職支援室を訪れるかもしくは連絡を行い、模擬面接・相談の予約を入れるというシステムになっており、相談者の人数に合わせて時間が割り当てられる。そして、その模擬面接・相談は面接官と相談者が一対一で向かい合って座り行われる。撮影は固定カメラ一台で行い、MDによる音声の録音も行った。2004年7月22日（木曜日）の女性面接官の模擬面接・相談では、出入り口から向かって右側の席に面接官、向かって左の席に相談者が着席し、2004年7月27日（火曜日）の男性面接官の模擬面接・相談では反対に、面接官が出入り口から向かって左側の席に、相談者が右側の席に着席していた。（次ページの配置図を参照）



【図 1：模擬面接・相談部屋の配置図】

1 - 2 . データの概要

2004年7月22日（木曜日・女性面接官担当）には男性相談者が二人訪れており、各々一時間程模擬面接・相談を行っている。2004年7月27日（火曜日・男性面接官担当）には四人の女性相談者が訪れており、各々30分程の模擬面接・相談を行っている。

下の表1は、相談者各々の模擬面接・相談の内容と所用時間をまとめたものである。

【表 1：模擬面接・相談内容と所用時間】

2004年7月22日（木曜日・女性面接官担当）		
	内容	所用時間
男性相談者A （データ）	何度か企業の面接を受けているが内定をもらえない。自分のこういったところに非があるのかを相談。	1時間程度
男性相談者B （データ）	近日中に行われるの企業面接に備え、模擬面接を受けに来た。初めての面接ということもあって、面接を受ける部屋への入り方、座り方から指導。面接中に面接官の携帯電話が鳴り出す。	1時間程度

¹ 当日、四人の女性相談者が訪れているが、撮影・録音を行ったのは三人の女性相談者のみである。

2004年7月27日(火曜日・男性面接官担当)		
	内容	所用時間
女性相談者A (データ)	翌日の公務員面接に備え面接を受けに来た。	30分程度
女性相談者B (データ)	近日中に行われる企業面接に備え面接を受けに来た。「何も心配要らない。あなたなら大丈夫。」と励ます。終了する少し前に相談者が泣き出す場面が見られた。	30分程度
女性相談者C (データ)	公務員面接について相談。途中から身の上相談のようになり、相談者が泣き出す場面が見られた。	30分程度

2. 制度的場面としての就職支援室に関する考察

ここでは、会話の終了部分に焦点をあて、分析・考察を加えていく。

X大学の就職支援室でも行われている模擬面接・相談場面は、一般的に、相談者が面接官(あるいは助言者)が助言を受ける場であると考えられる。また、時間制限もあり、限られた時間の中で面接官と相談者がやり取りを行い、相談者が的確な助言を受ける場である。私たちが、日常で家族や友達と会話をする場面とは異なり、ある種制度的な場面であると言えるのではないだろうか。

データを分析するにあたって、会話の終了の部分について述べられた文献から引用したい。

もし移行適切性²は何処で解除することができるかという問題が系統立ったものであるならば、隣接対偶がこの問題を解決することになるだろうというのがそれである。というのも、移行適切性が解除されるのは、第二対偶成分が生起した後だからである。つまり次のとおりである。最終交換〔「さよなら」-「さよなら」〕の第一対偶成分が生起するならば、そのことにより、その成分の話し手がいま会話を終了したいと提案していることが明らかになる。それに対し、第二対偶成分が生起するならば、その会話の終了の意図が読み取られ同意されたことが明らかになる、というわけである。ところで、このような解決法は制度化されたものである。そこでいまや、この解決方法が用いられているとはっきり言える場合が、どの範囲にわたっているのかが明らかとなる。たとえば、相手に返答する余地を与えないような仕方で「さよなら」を言う場合と、相手が返答をする余地を残すような仕方で「さよなら」を言う場合とでは、ぜんぜん違う。最初の場合、後者の場合と対照的に、その振る舞いは際立ったもの

² 「次の話し手への移行が適切になされる」こと。(Schegloff and Sacks 1973=1989:181)

となる。つまり、怒りを表していたり、無愛想を示していたりすることになる。また、怒りを表したり、無愛想に振舞うために、あえて前者のようにすることもできよう。このようにどちらの場合を選ぶかによって異なる結果が生じるということこそ、右の解決方法が制度化されていることの証拠である。最終交換は決して個人的な選択にかかわる問題ではない。(Schegloff and Sacks 1973=1989:189-190)

ここでは、「会話の終了が自然に生じるものではなく、達成されるものであるということ、隣接対が互いの理解の表示と確認のために利用可能であることが」述べられている(岡田 1996:166)。就職支援室において、模擬面接・相談場面の終了がどのように達成されているのかを、データを取り上げ検討していきたい。

まず、データの【断片】を取り上げる。

【断片】(2004.7.22 2:01:26~2:04:24 PM)

- 1 R : まああの：具体的なまた内容も少し付け加えながら：説得力を増す
2 E : はい
3 R : ここはやっぱり気に(2)あの：：ポイントだと思いますので
4 E : はい
5 R : そこをちょっと考え：て
6 E : はい
7 R : え：：次の
8 E : はい
9 R : 面接に：(1)臨まれたらいいんじゃないかな(.)と[思います
10 E : [はい
11 R : じゃあちょっと時間が(.)多分[(.)きてると思うんですけども
12 E : [hh はい
13 R : いいですか
14 E : はいありがとうございます
15 R : あと何か質問があればよろしいですか
16 E : はい
17 R : またあの：：(.)やってみてそれで(1)どうも上手くいかないということであれば(.)また(.)時間があればね
18 E : はい
19 R : 来ていただいたら：
20 E : はい
21 R : いいと思いますので

- 2 2 E : はい
- 2 3 R : まあとにかくでも (.) この時期になってくると : いくつもの (1) まあ面接受けてだめだったっていう : 経験があったりするとちょっと (.) 気持的にモチベーションをあげていくってのがなかなか
- 2 4 E : ん ; ; はい
(52 行程省略)
- 7 7 R : 頑張ってくださいということで
- 7 8 E : はい
- 7 9 R : はい
- 8 0 E : ありがとうございます
- 8 1 R : はいじゃあいいですか
- 8 2 E : はい
- 8 3 R : じゃあはいお疲れ様です
- 8 4 E : hh はいありがとうございます
- 8 5 R : 《撮影者の方へ顔を向け》(2) よろしいですか



【画像 1 : 面接官が撮影者の方へ顔を向けている場面】

この模擬面接・相談で男性相談者に割り当てられている時間は一時間程度で、この後には次の相談者の模擬面接・相談が行われる。この場面は、面接官の 1 1 R 「じゃあちょっと時間が～」という、時間的制約があり終了しなければならない旨の発話がなされ、そのことを相談者に確認するように 1 3 R 「いいですか」と発話している。それに対して相談者は 1 4 E 「はいありがとうございます」と答えて、互いにこの場を終了させようとしていることが見てとれるが、ここでは終了していない。続けて面接官の 2 3 R 「まあとにかくでも～」という発話で別の話題が提起され、しばらく会話が続いている。そして、8 3

R - 8 4 E の挨拶の交換がなされ模擬面接・相談は終了した。またここでは、8 3 R - 8 4 E で終了する前に、8 1 R 「はいじゃあいいですか」 - 8 2 E 「はい」という終了することの確認とそれに対する返答が見られ、確実にこの場を終了させようとしていると思われる。加えて8 4 E の相談者の発話の直後に、面接官は撮影者の方に顔を向け(【画像 1】を参照。画像中の矢印は視線を表している) 8 5 R 「よろしいですか」と発話している。これまで話していた相手から顔を背け、この模擬面接・相談場面の別のもう一人の参加者の(つまり撮影者の)方に向き話しかけるといことで、この場はもう確実に終了したということが相談者にも明確に示されている振る舞いであると言えるのではないだろうか。

次に、データ の【断片】を取り上げる。

【断片】(2004.7.22 3:09:34~3:10:15 PM)

- 1 R : まあじゃあとりあえずは :
- 2 E : はい
- 3 R : あの今日は面接のことだったので
- 4 E : はい
- 5 R : え : っとポイントは : (.) 多分わかっていただいたかな : って[思いますので :
- 6 E : [はい
はい
- 7 R : で : え : 少しこの辺の (.) 具体例なんかも付け加えてみて
- 8 E : はい
- 9 R : んで月曜日
- 10 E : はい
- 11 R : うん (.) 頑張ってきてください
- 12 E : はいわかりました
- 13 R : いい結果を待ってますので[hhhh
- 14 E : [はい
- 15 R : (1) 学校推薦で[: はい
- 16 E : [はい
- 17 R : じゃああとはいいいですか
- 18 E : はいありがとうございます
- 19 R : はい
- 20 E : はい
- 21 R : じゃあこれで終わらせていただきます (.) ごめんなさいね何回も携帯電話 (.)
[かかってきて
- 22 E : [あっ いえいえ

- 23 R : 大変失礼をいたしました
 24 E : いい勉強になりました
 25 R : はい
 26 E : ありがとうございました《おじぎをする》
 27 R : はい《おじぎをする》どうも《撮影者の方にむき軽くおじぎをする》

ここでは、一行目の1R「まじゃあとりあえずは：」という面接官の、終了を予期させる発話がみてとれる。その次の2Eの「はい」という相談者の発話から、面接の終了の予期が明示されそのことを理解していると考えられる。その後、この面接をまとめるような総括の発話がなされている。そして17R・18Eでここで会話が終了してもおかしくないような話題交換終了（「いいかい？」 - 「いいよ」というような）「じゃああとはいいですか」「はいありがとうございます」という発話が見受けられるが、ここでは終了せずに、「はい」「はい」という発話が続き、念をおすように21Rで「じゃあこれで終わらせていただきます」と、終了することを明確に示した発話がなされている。しかし、面接官が続けて「ごめんなさいね～」とこれまでと異なる話題を提供したことから、まだ発話は続き、26E・27Rの「ありがとうございました」「はいどうも」という発話でようやく面接は終了した。

続いて、データ の【断片】を見ていく。

【断片】(2004.7.27 3:02:56~3:04:35PM)

(32行程省略)

- 33 R : もっとこう(.)心理的な圧迫感あるからね：
 34 E : 《nod nod》《右手側の鞆にハンカチをしまい、鞆を持ち上げる》
 35 R : はい(.)ほな頑張ってくださいね
 36 E : はい《体を左に向け立ち上がる》
 37 R : はいどうもありがとうございました
 38 E : 《面接官の方を向き》ありがとうございました hhh
 39 R : はあやいうて大きなため息がでてきよる hh
 40 E : hhh 失礼しました

【断片】については次節で詳しく述べるのだが、ここでは終了の部分だけを取り上げる。この場面では、相談者が34Eでの振る舞いが終了の契機となっていることが見てとれる。33Rの面接官の助言に対して相談者は頷き、ハンカチを鞆にしまいその鞆を持ち

上げるといったこの部屋から退室することが伺える振る舞いをしている。それを見た面接官は、「はいほな頑張ってくださいね」と発話し、続けて「ありがとうございました」 - 「ありがとうございました」と挨拶の交換がなされ模擬面接・相談の場は終了した。

最後に、データ の【断片】とデータ の【断片】を見ていく。

【断片】(2004.7.27 2:28:11~2:28:16 PM)

- 1 R : じゃあもう無いようやったらこれで終わりにしましょう
2 E : はい
3 R : はい
4 E : はい[ありがとうございました
5 R : [頑張ってくださいね
吉報をお待ちしていますよ
6 E : はい
7 R : は : い

【断片】(2004.7.27 3:44:18~3:44: PM)

- 1 R : またおいで : ほな
2 E : あ
3 R : はい
4 E : はいありがとうございました
5 R : はいどうもどうも
6 E : ありがとうございます[ました
7 R : [は : い どう : も :
8 E : 《手元の資料を右手側においてある鞆にしまい、椅子から立ち上がりながら》
頑張ってきます
9 R : は : : い
10 E : ありがとうございました
11 R : は : : い

【断片】では1 R「じゃあもう無いようやったらこれで終わりにしましょう」 - 2 E「はい」、【断片】では1 R「またおいで : ほな」 - 4 E「はいありがとうございました」という発話が見られ、いずれも、この場を終了することを示し確認する面接官の発話と、それに対する相談者の発話になっている。その後「ありがとうございました」という発話が、とくに【断片】においては何度も繰り返され、模擬面接・相談の場は終了した。

データの総てにおいて、「はい」 - 「はい」、「ありがとうございます」 - 「どうも」、「ありがとうございました」 - 「ありがとうございました」といった挨拶の交換が繰り返してなされている。そしてこの挨拶が最終発話となりその場が終了していることから、これらの挨拶の交換は就職支援室における模擬面接・相談場面での慣習的な最終交換であると考えられる。また、この繰り返し行われる交換は、会話の終了がいかに危険を含んでいるかを表しているように思われる。ここで面接を終了すれば次の機会が期待できない、本当にここで終了してしまっても大丈夫だろうかという危機・不安に対する慎重さが、繰り返され交換される挨拶により、なかなか会話が終了しないことに表れているのではないだろうか。

3. 分析・考察

ここでは、【断片】を取り上げ、分析・考察を加える。以下のデータ【断片】において特徴的な場面は、二度見られる終了と、相談女性者が泣き出す場面である。一度目の「ありがとうございました」 - 「は：：い」という挨拶を交換した後、相談者が泣き出し、しばらく会話が続いた後二度目の「ありがとうございました」 - 「ありがとうございました」という交換がなされ、模擬面接・相談は終了した。

【断片】(2004.7.27 3:02:56~3:04:35 PM)

- 1 R : 表情だ(.)君の場合は
2 E : そうですね《大きく頷きながら》
3 R : う：：ん(.)硬い
4 E : はい
5 R : (5) 笑顔の作り方教えてあげようか
6 E : (2) はい
7 R : (2) ここ《眉間を指差し》のね
8 E : 《眉間を触る》
9 R : (.) 眉のところ(1) 眉間ちゅうんやけどここを広げるように(2) 努力したらいい(3) ここ《眉間を触り》へ(.) ここへ意識
10 E : 《眉間を触る》
11 R : 集中してね(.) これ広げるようにしたら(.) にやっとう笑ってるように見える
12 E : はあ：：=
13 R : =口元少：しこうね(2) 緩めたら(1) は[hhhhh

- 14 E : [hh はい(1)あ
りがとうございました《お辞儀をしながら》
- 15 R : は : : い
- 16 E : はあ : 《大きくため息をつく》 =
- 17 R : = はあ : (2) がんばれ
- 18 E : 《手で目を押さえる》
- 19 R : 明後日 : かな
- 20 E : わ : だ : : れがですね
- 21 R : えああ
- 22 E : いや : : : はい《右手側にある鞆に荷物をしまう》
- 23 R : 泣いたらあかんで
- 24 E : はい《鞆からハンカチを取り出す》
- 25 R : ふ hh
- 26 E : 《ハンカチで目を押さえ鼻をすする》
- 27 R : (3) やっぱこんな《撮影しているカメラを指差し》 あったら緊張するか
- 28 E : 《カメラの方を向き》ん : ちょっと h
- 29 R : (2) そやけど(1) 本ちゃんの面接の時ずら : : っと並ぶからね
- 30 E : 《nod nod》
- 31 R : こんな一対一の面接やないですよ
- 32 E : 《nod nod》
- 33 R : もっとこう(.) 心理的な圧迫感あるからね :
- 34 E : 《nod nod》《右手側の鞆にハンカチをしまい、鞆を持ち上げる》
- 35 R : はい(.) ほな頑張ってくださいね
- 36 E : はい《体を左に向け立ち上がる》
- 37 R : はいどうもありがとうございました
- 38 E : 《面接官の方を向き》ありがとうございました hhh

このデータから、就職支援室における模擬面接・相談の場面では、二つの課題が存在することが考えられる。二つの課題というのは、相談者を本番の面接で合格させるための助言をしたり、そのスキルを身につけさせるといった、「教育的相談の課題」と 助言を求めに来た相談者を慰めたり満足させたりといった「心理的相談の課題」である。データを見ながら分析していく。

3 - 1 . 一度目の終了の挨拶交換

【断片】の14 E・15 Rが一度目の終了の挨拶の交換が行われたと思われる

る部分であるが、その後すぐに女性相談者の16E「はあ：」という発話が見られ、続けて面接官と相談者の会話がなされている。ここで終了がなされずに会話が続けられた場面において注目すべき点は、面接官の15R「は：：い」と相談者の16E「はあ」という発話である。15Rで面接官は「は：：い」という延長した発話をしている。この延長は、面接官が相談者をモニターしていることを表していると考えられる。今やろうとしていること、この場面で言えば模擬面接・相談を終了することを進めても良いかと言ったときに、そのことに対する相手の表情や態度等を確認すること、すなわちモニターすることが必要であり、自然なことであると考えられる。加えて、15Rの面接官の発話の際に視線が相談者の方へ向いている（【画像2】を参照）ことから、このとき面接官は相談者をモニターしており、模擬面接・相談を終了させようとしていたことが伺える。しかし、この時点では模擬面接・相談は終了されなかった。それは、相談者の16E「はあ」という発話が続けられているからだ。



【画像2：面接官が相談者をモニターしている場面】

この「はあ」という発話は、20E「わ：だ：：れがですね」という相談者の発話を受けて、ため息であると考えられる。20Eの発話は、面接官の19R「《企業面接は》明後日：かな」という発話に対する返答であるが、続いての面接官の21R「えああ」という聞き返しの発話からも考えられるように、相手に意思が伝わっておらず曖昧な返答になっている。この曖昧な返答は、19Rの面接官の問いかけによって導き出されている。このことから20Eの発話は、本番の企業面接に対する自信の無さや自分が準備不足であること、またその状況を受け入れられないことの表れであると考えられ、16E「はあ」はため息であると考えられる。また、ここで終了せずに発話を続けることで、相談者にとって課題が達成

されていないという不充足感が表れていると思われる。しかしここで重要なのは、この「はあ」がため息であるかどうかということではなく、面接官がその様に理解したかどうかであるが、上記のようにこの時点で会話が終了していないことから、少なくとも面接官にはこの終了を終わらせるのには不適當である理解されていることは明らかである。そして、続いて発話がなされている。

3 - 2 . 二つの課題

この後面接官の17R「がんばれ」という発話の後18Eで相談者が泣き出すという場面が見られる。そして、泣き止まないまま面接は終了した³。ここで、相談者が泣き出したことにより、17Rの「がんばれ」が、この場面において「心理的相談の課題」がレリバントであるという合図(Cue)になってしまっていることが考えられる。13行目あたりまで、表情の作り方等「教育的相談の課題」のサポートを面接官は行ってきたが、16E~20Eで相談者はそれまでの課題達成の不充足感を表示している。これは、14E「はいありがとうございました」という、これまでの面接官が行ってきた「教育的相談の課題」のサポートに対する理解と了解の意を含む発話から、「教育的相談の課題」ではなく、「心理的相談の課題」の不充足感を表示しそのサポートを要求していると考えられる。そしてそれに対しての面接官の17R「がんばれ」という発話で、この場面において「心理的相談の課題」がレリバントになっている。またこのことは、「教育的相談の課題」のサポートではこの場が終了がなされなかったため、「心理的相談の課題」のサポートへと移行した、ある種、面接官が模擬面接・相談を終了させようとするテクニックの一部であると言えるかもしれない。

続いて30行目以降、相談者は面接官の発話に対して、泣きながら頷く(《nod》)という場面が何度も見られる。この頷きは面接官に対する返答をパスしていると考えられるのではないだろうか。泣いていて返事ができず頷くという、この「泣く」と言う行為は、この場面において、答えないことを決定的な規範として要求されずにすむという働きをしている。「泣く」ことで返答をパスしているということは、相談者は面接官の発話に対して同意もしていないし、不同意もしていない。Pomerantz(1984)によると、一般に「意見を述べられること」に対する振る舞いとして、「不同意」よりも「同意」が優先され、同様に「助言」に対しても「拒絶」より「受諾」が好まれると述べられている。このことから相談者は面接官のサポートに対して「やわらかい抵抗⁴」をしているのではないかと思われる。

³ 泣いたまま模擬面接・相談場面が終了したことを不思議に感じる方もいるかもしれないが、撮影当日、相談に訪れた四人の女性相談者のうち二人に同様のことが見られたことから、それほどイレギュラーなことではないと感じた。

⁴ これは筆者の造語である。相談者はこの場面での面接官の立場を考慮し、表立ったかたちでは助言を拒絶しないが、受諾もしていない。且つ、面接官は相談者の泣きながらの頷き

23R・24Eの発話を見てみる。「泣いたらあかんで」という面接官の発話から、この場面では「心理的相談の課題」をレリバントにしないという宣言と同時に、この発話自信が、模擬面接・相談の場面においてレリバントな課題は「教育的相談の課題」であることを表していると考えられる。そしてその宣言に対して相談者は「はい」と答えている形になっている。ここでのレリバントな課題は「教育的相談の課題」であるけれども、相談者は、16E～20Eで示された「心理的相談の課題」の不充足感を、「拒絶」でも「受諾」でもない、しかし相談場面が終了に向かうことを邪魔しない形である、泣きながら頷くことで表示し続けており、このとは表立った形で表されないけれども「やわらかい抵抗」をしていると言えるのではないだろうか。

ここまで、「相談者はこの場面での面接官の立場を考慮し、表立ったかたちでは助言を拒絶しないが、受諾もしていない。且つ、面接官は相談者の泣きながらの頷きを抵抗しているとは理解していない」という意味で「やわらかい抵抗」と言う風に述べてきたが、その後相談が終了されるまで相談者は、「心理的相談の課題」の不充足感をかたくなに表示し続けている。そして先にも述べたように、相談者の曖昧な返答を導き出したのは面接官の問いかけであり、そのことが相談者の不充足感を表示し続けるきっかけとなっている。このことから、「やわらかい抵抗」は「何がその場面においてレリバントであるかを相手に立ち上げさせた抵抗」でもあると言える。この意味で相談者はかたくなに、そして明白に「心理的相談の課題」を表示し続けているが、「相談者はこの場面での面接官の立場を考慮し、表立ったかたちでは助言を拒絶しないが、受諾もしていない。且つ、面接官は相談者の泣きながらの頷きを抵抗しているとは理解していない」という意味での「やわらかい抵抗」の特性からそのことが表立っては面接官に対して表示されておらず、またこの場面でのレリバントな課題は「教育的相談の課題」であると面接官は表示していることから、相談者は気をつけて不充足感を表示しないようにし、また面接官はそのことに触れないようにしているといえ、結果的に模擬面接・相談場面が終了に向かったのではないだろうか。

4. まとめ

3節では、模擬面接・相談の場では「教育的相談の課題」と「心理的相談の課題」の二つの課題が存在していること、そしてその文脈から、その場面において何がレリバントになっているかを述べた。そのことで、二つの課題のうち、「心理的相談の課題」の不充足感が残されたままではあるけれども、もう一つの「教育的相談の課題」が解決されて模擬面接・相談の場は終了へと向かった。また終了に向かうために、相談者は不満を持ちそのことを明白に表示しつつも表立って表示さ

を抵抗しているとは理解していないということから、抵抗することよりも「やわらかい抵抗」と言えると考えられる。

れおらず、終了を邪魔しないように泣きながら頷き返事をパスしていた。そして面接官は「心理的相談の課題」に触れないようにすることでその場を終了に向かわせようとしていた。一般的に就職相談等の場面という、面接官が一方的に相談者に対して助言を行い相談者はそれを受け入れその場が終了するというように思いがちであるが、そうではなくお互いが終了の達成を目指し気遣い、お互いが終了を作り上げていることが以上のことから見て取れた。これらのことが、模擬面接・相談場面に見られる特徴であり、模擬面接・相談の場を模擬面接・相談の場として成り立たせているといえるのではないだろうか。

主な参考文献

- 秋葉昌樹、1995、「保健室における「相談のエスノメソドロジ的研究」」『教育社会学研究』57：163-181。
- 安藤清志、1994、「見せる自分／見せない自分 自己呈示の心理学」サイエンス社。
- 串田秀也、1999、「助け舟とお節介 会話における参与とカテゴリー化に関する考察」好井裕明、山田富秋、西坂仰編『会話分析への招待』世界思想社 124-147。
- 、2001、「私は 私は連鎖：経験の『分かちあい』と共 成員性の可視性」『社会学評論』52(2)：214-231
- 中村和生、櫻田美雄、2004、「助言者 - 相談者 という装置」『社会学評論』55(2)：80-90。
- 岡田光弘、1996、「『制度』の研究をすること インタビューと119番通話の終了部の会話分析」『現代社会理論研究』6：165-180。
- Pomerantz, Anita, 1984. "agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred Dispreferred Turn Shapes," Atkinson, John and John Heritage eds., *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge University Press, 57-101.
- Schegloff, Emanuel A. and Sacks, Harvey, 1973, "Opening up Closings" *Semiotica*. (= 1989、北澤祐・西坂仰訳『日常性の解剖学 知と会話』マルジュ社。)
- 好井裕明、山田富秋、西坂仰編、1999、『会話分析への招待』世界思想社。

トランスクリプトで用いた記号

- R：助言者である面接官（adviser の r） E：相談者である学生（advisee の e）
- [：発話が同時に開始された位置 = ：行末から行頭への切れ目のないつながり
- （数字） ：発話のない秒数 ：直前の音延ばし
- nod ：頷き 《 》：補足説明

セルフ・ヘルプ・グループを運営すること ある心身障害児者家族の会を例にして¹

正島 祐子

1、問題関心

初めて私がセルフ・ヘルプ・グループの存在を知ったのは、平成16年度前期の社会福祉研究での講義であった。講義で取り上げられたビデオを通してセルフ・ヘルプ・グループに参加している参加者の声を聞き、「知り合いや、親戚がいないほうが安心して話せる。」といった同じ傷を負った仲間だからこそ乗り切れることができると話す参加者の様子が映されていた。その会での雰囲気は参加者同士がわいわい楽しくおしゃべりをして会が進行していくという様子ではなく、その会のルールのような決まりごとの中で会が進行されていく。それがセルフ・ヘルプ・グループという組織にとっても興味を抱くようになったきっかけであった。セルフ・ヘルプ・グループは広くも狭くもとらえられる実におもしろい組織である。ここでは、セルフ・ヘルプ・グループを「病気の回復」といった福祉・保健や医療の観点から捉えるのではなく、セルフ・ヘルプ・グループをひとつの組織としてとらえセルフ・ヘルプ・グループに関わる人々がどのようにうまく組織を運営しているのかを見ていきたいと思う。

2、セルフ・ヘルプ・グループについて

2-1、セルフ・ヘルプ・グループの特徴

議論に入る前にまずセルフ・ヘルプ・グループとはいったいどのようなグループなのかを示していくことにする。セルフ・ヘルプ・グループとは岡知史によると「共通の困難な生活状況にある人々が、その共通した体験に関連する情報および感情、考え方をわかちあうために自発的かつ継続的に行う活動。『本人の会』ともいう。」(岡 1994: 640)と定義している。

ここでいう共通の困難というものは実にさまざまな種類があるが、その共通の困難を抱えた人々が組織しているセルフ・ヘルプ・グループが持っている特徴には何があるのだろうか。久保・石川らはセルフ・ヘルプ・グループの特徴を以下のように示している。

メンバーは共通の問題を持っている。 共通のゴールがある。 対面的 (face to face) な相互関係がある。 メンバー同士は対等な関係にある。 参加は自発的なものである。 専門家との関係はさまざまだが、基本的にはメンバーの主体を重んじる、な

¹今回のゼミ論文では筆者の卒業論文である「あるセルフ・ヘルプ・グループにおける組織の多面性」を一部修正して載せている。それによりタイトルも「セルフ・ヘルプ・グループを運営すること ある心身障害児者家族の会を例にして」と変更した。

どである。(久保・石川編 1998 : 8)

セルフ・ヘルプ・グループと限定せずともわれわれのまわりには例えば「学校」で考えるならば「PTA」という会がでてくるようにたくさんの組織が関わっている。それら組織、グループも共通の目的、共通のゴールを持って組織されているように思えるが、セルフ・ヘルプ・グループと呼ばれている組織が他の組織とは区別されるべきなのは、上記の特徴がより明確に示されていてかつ参加者の意識の中にもはっきりとそれが意識されているからであろう。そのため、セルフ・ヘルプ・グループをより厳密にとらえるために、岡は『『本人』たちが自分から作った会以外は『本人の会』と呼んではいけない。』(岡 1999 : 91)とセルフ・ヘルプ・グループがまず当事者(問題を抱えている本人)の集まりであることを強く主張している。ここには、セルフ・ヘルプ・グループと専門職との結びつきが関係している。次は専門職との関係について述べることにする。

2 - 2、セルフ・ヘルプ・グループと専門職者との関係

セルフ・ヘルプ・グループには多くの種類のグループが存在しているが、特に病気の人々のグループには、病院や医師や保健士との関係が深い場合がある。本来セルフ・ヘルプ・グループは当事者だけで会が成立、運営しなければならないといわれているが、実際には地域で支えてもらうために病院や医師や保健士がサポートをしているところもある。そのためセルフ・ヘルプ・グループと専門職者との関係は多く議論されており、伊藤・中田はセルフ・ヘルプ・グループと専門職者との関係で完全自立グループ、依存潜在グループ、依存顕在グループの3つにセルフ・ヘルプ・グループを分けている。完全自立グループは専門職から完全に自立して、当事者たちだけですべて運営しているグループである。セルフ・ヘルプ・グループの特徴からいえば、「本人」の会を忠実に守っているグループであるというよう。次に、依存潜在グループというのは代表者に当事者になっていて、一見すると当事者が運営しているように見えるが、実は代表者は専門職者の指示に従っているだけのグループである。最後に依存顕在グループは、代表者も専門職者で、会合を開く場所もその専門職者が属する機関であるというように専門職者が丸抱えのグループである。(伊藤・中田 2001 : 100)

どのタイプにしてもセルフ・ヘルプ・グループが自助組織として専門職者との関係をどう捉えていくのかが重要な焦点のひとつとなっている。

2 - 3、セルフ・ヘルプ・グループの機能

次にセルフ・ヘルプ・グループの機能として久保・石川は、「自己のアイデンティティの再建や、自尊心の回復」(久保・石川編 1998 : 40)を挙げている。岡によると多くのセルフ・ヘルプ・グループは同じ悩みを抱えている同士一定の場所に集まり、会を開き自らの体験を話し他の参加者の話を聞く。そこでは言いつばなし聞きつばなしが原則で、話して

いる参加者にアドバイスをする、会が行われている以外で話すといったことは禁止されている。これは抱えている困難を解決することを目的としているからではなく、その抱えている困難をどうプラスに変えていくかを目的としているからであるという。(岡 1999: 15)

しかし、実際に一つ一つのセルフ・ヘルプ・グループと呼ばれている組織を見てみると、その活動の規模、種類、内容は個々のグループで大きく異なっており、一言でセルフ・ヘルプ・グループといっても多様な会を含んでいるといえる。そのためにセルフ・ヘルプ・グループをある一定の基準において分類することが過去の研究者によっていくつかなされている。その一人であるカッツは、セルフ・ヘルプ・グループの分類をタイプ1からタイプ5までに分けている。(Katz, A.H 1997) タイプ1は、治療的グループである。具体的に、A, 精神保健に関する組織、B, 嗜癖に関連する組織、C, 疾病に関連する組織、D, 人生の役割変化に関連する組織、E, ストレス軽減グループの5つに分かれている。

例えば、ギャンブルがやめられなくなってしまいその人の生活に大きな影響を及ぼしてしまうところまでできてしまうと、ギャンブルは趣味では済まされなくなりギャンブル依存症という病気として捉えられることになる。そこでこの「依存」という病気を克服するために集まったグループはタイプ1に含まれるといえよう。

次にタイプ2は社会的アドボカシーおよびソーシャルアクションを目的としたグループを分類している。具体的に、A, 単一の問題を克服するために作られた組織、B, 高齢者に関連した組織、C, 少数民族を援助するために作られた組織の3つに分かれている。

例えば、自分たちが住んでいる町にダムを作らせないとといったような住民運動で起こった住民組織もカッツによればタイプ2に含まれる。

次に、タイプ3は少数者のライフスタイルをサポートするために組織されたグループである。具体的には、A, ゲイ解放組織、B, 都市型・田舎型施設共同体の2つである。

次に、タイプ4は24時間生活を共にするグループである。最後にタイプ5は混合タイプで、具体的には A, 刑務所出所者組織、B, 社会的・治療的なグループおよび家族志向グループ、C, 経済的援助の3つに含まれている。

表2 - 1、カッツによるセルフ・ヘルプ・グループの分類(久保・石川 1998より筆者が作成)

タイプ1	治療的グループ A. 精神保健に関する組織、B, 嗜癖に関連する組織、C, 疾病に関連する組織、 D. 人生の役割変化に関連する組織、E, ストレス軽減グループ
タイプ2	社会的アドボカシーおよびソーシャルアクション A. 単一の問題を克服するために作られた組織、B, 高齢者に関連した組織、 C. 少数民族を援助するために作られた組織

タイプ3	少数者のライフスタイルをサポートするために組織されたグループ A. ゲイ解放組織、B. 都市型・田舎型施設共同体
タイプ4	24時間生活を共にするグループ
タイプ5	混合タイプ A. 刑務所出所者組織、B. 社会的・治療的なグループおよび家族志向グループ、 C. 経済的援助

カツのセルフ・ヘルプ・グループの分類のように大きな視点で分類していく一方で、パウエルはセルフ・ヘルプ・グループの分類を以下のように分類している。(久保・石川 1998: 7)

まず、1つ目は習癖・依存の問題のグループで、例えばアルコール・アノニマス、スモーク・ストッパー(喫煙)、オーバー・イーター(過食)、賢く体重を減らす会(TOPS)、体重監視協会、ギャンブラー匿名協会などの特定の行動を変えることを目的とした組織がここに含まれる。

次に2つ目は広範な問題解決を目指すグループである。ここではさまざまな問題と対処パターンを修正する組織が含まれる。例えばペアレント匿名協会(児童虐待をする親)、回復者協会(精神障害回復者)、コンパショネイト・フレンド(子どもをなくした親)などである。

次に3つ目はマイナーなライフスタイルを持つ人たちのグループで、例えば配偶者に離婚・死別された人たちのグループがここに含まれる。

次に4つ目は当事者の家族のグループで、障害児の親のグループなどが含まれる。家族の重荷を軽減する目的で組織される。

最後に5つ目は身体に障害を持つ人たちのグループである。脳性まひ協会、てんかん協会、心臓手術者の会、オストミー協会(人工肛門増設者)など多種類の障害別にグループが組織されている。

表2 - 2、パウエルのセルフ・ヘルプ・グループの分類(久保・石川 1998より筆者が作成)

習癖・依存の問題のグループ	アルコール・アノニマス、スモーク・ストッパー(喫煙)、オーバー・イーター(過食)、賢く体重を減らす会(TOPS)、体重監視協会、ギャンブラー匿名協会などの特定の行動を変えることを目的とした組織
広範な問題解決を目指すグループ	ペアレント匿名協会(児童虐待をする親)、回復者協会(精神障害回復者)、コンパショネイト・フレンド(子どもをなくした親)

マイナーなライフスタイルを持つ人たちのグループ	配偶者に離婚・死別された人たちのグループ
当事者の家族のグループ	家族の重荷を軽減する目的で組織
身体に障害を持つ人たちのグループ	脳性まひ協会、てんかん協会、心臓手術者の会、オストミー協会（人工肛門増設者）など

このようにセルフ・ヘルプ・グループは、これら分類した以外にも、種類、組織の規模、質などの視点からも細かく見ていくことができる。

以上おおまかなセルフ・ヘルプ・グループの枠組みを述べてきたが、大きく言えば同じ悩みを抱えている人たちが集まりその困難・生きづらさを共に支えあいながら生きていく場がセルフ・ヘルプ・グループであるということである。その困難な問題が疾患や障害であれ当事者やその家族であれ、この部分は変わらないのである。

3、先行研究

次にセルフ・ヘルプ・グループを活動のレベルで見るとどうなるのか。セルフ・ヘルプ・グループの活動の分類軸として、野田は 活動のレベル 活動のベクトルの 2 本の分類軸を挙げている。

活動のレベルは、当事者個々人の抱える問題をどこで（どの範囲で）解決しようとしているかということであり、そこでは治療や訓練におけるセルフコントロールに代表されるような個人あるいは家族等のあくまで当事者内の責任の範囲内での「自己完結的な努力」と制度・施策の活用等のように社会的な取り組みとして解決を図ろうとする「一般社会のレベルでの解決・緩和」と両極とする軸が想定される。活動のベクトルは、問題の解決に向けての働きかけの対象をどこに求めるかということであり、節制等の自己犠牲をしたり、当事者個人を励ましたりという「自己内部の働きかけ」と制度化・施策化を要求して運動をするというように、社会に対して何らかの対策を講ずるよう働きかける「一般社会への働きかけ」が両極となる。（野田 1998：26）

そして、この 2 本の分類軸を掛け合わせることにより、セルフヘルプ・グループの活動のステージが出来上がってくるという。

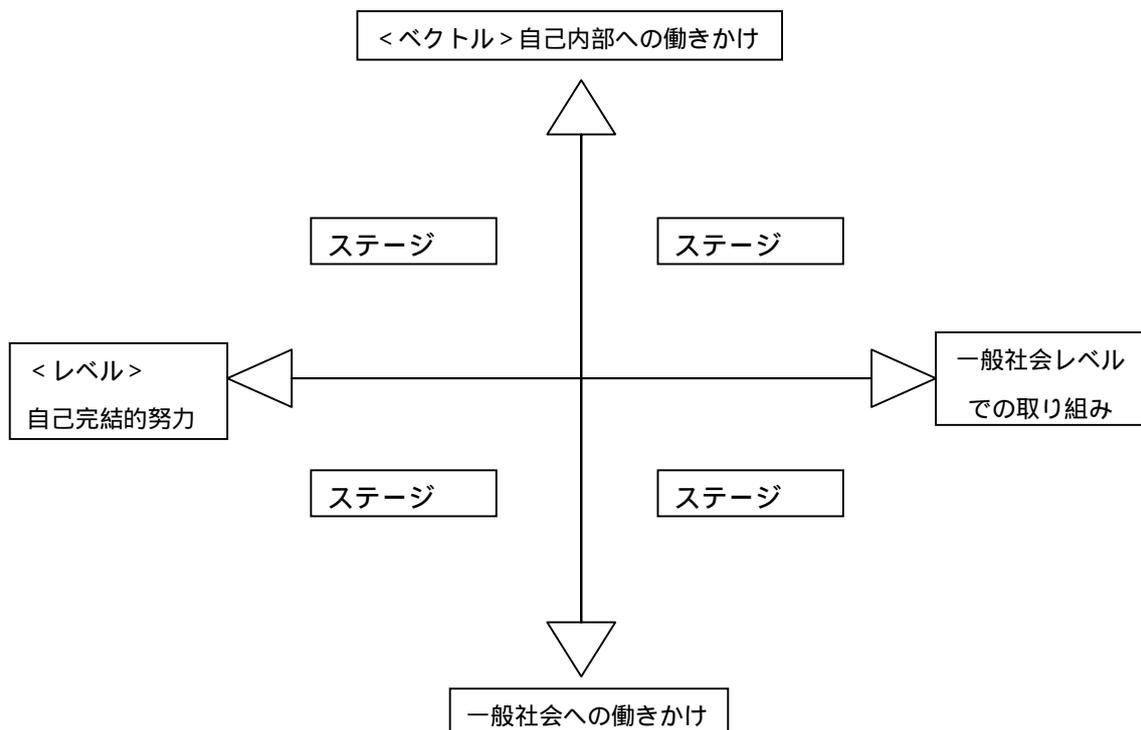


図3 - 1、セルフ・ヘルプ・グループの活動の4つのステージ（野田 1998：26）

ステージは、レベルにおいては自己の力で問題を解決していくような活動がなされているグループが含まれる。なおかつ、ベクトルは自己内部への働きかけが大きいので、活動もグループ内でのメンバーの回復のサポート的活動が行われている。グループ内で体験談を話すことにより、共通の悩みを抱えているもの同士の絆を深めていく活動などがこのステージに入る。「個別化のステージ」ともいえる。

ステージは、レベルはステージと同じく自己の力で問題を解決していく場合であるが、ベクトルは一般社会への働きかけへ向いている。つまり、当事者が自己に対して解決していかなければならないならぬ問題を、自らに解決策を投じていくのではなく、社会に向けて解決策を訴えていくということである。野田は、キャンペーンにより当事者たちの社会的不利・不都合を一般社会へ訴えていくことを例に挙げている。

ステージは、当事者の抱えている問題を克服し、自己を自立するために当事者の自己努力を支えていくような活動が中心のステージである。制度・政策等を活用し一般社会の取り組みにより自己解決を図ろうとする活動である。

ステージは、一般社会で問題視されているさまざまな問題を自らの問題として認識し、共通の仲間とともに、その問題解決のために社会へ訴えかける活動がこのステージに当てはまる。野田は、あらゆるセルフ・ヘルプ・グループはおおむねこの4つのステージのいずれかでいろいろな活動を展開しているという。（野田 1998：26）

このことによりセルフ・ヘルプ・グループが実際どのような活動を行っているのか、ベ

クトルとレベルを軸に説明することで実際のセルフ・ヘルプ・グループ活動の場がおおまかに示されたように思う。

しかしあらゆる組織は、社会の流れや、その時に参加しているグループのメンバー、組織を取り巻く環境などいろいろな要因でたえず変化していかなければならないし、していくものである。それはセルフ・ヘルプ・グループにも言えることであり重要なことである。それはつまりこの図でいうとセルフ・ヘルプ・グループはある一定のステージにとどまることなく、ベクトル、レベルが移行し新たなステージに移行していくことがありうるということである。このことに注目して、実際のセルフ・ヘルプ・グループでは運営がどうなされているのか具体的に見ていきたいと思う。

4、調査対象の概要

X 県肢体不自由児協会 X 支部・心身障害児者家族の会について

今回調査を行ったセルフ・ヘルプ・グループは、X 県肢体不自由児協会 X 支部・心身障害児者家族の会「A 会」(仮名)である(以下 A 会とする)。A 会は、1986 年に発足し、保健婦の呼びかけで悩みを持つ親たちが集まったのが始まりである。10 家族で発足した会も現在は 30 人に増え、障害の種別はさまざまな障害児とその家族が参加している。現在は会員、家族の相互の親睦をはかりながら療育や福祉に関する研修や情報交換を行い、心身障害児者の福祉の増進と啓発活動を行うことを目的として掲げている会である。具体的な活動は施設見学、クリスマス会などの季節ごとのイベント、ボランティア活動、年 4 回会報の発行を主に行っている。これら会の活動を運営していくために、年度初めに行われる総会で一年間の活動計画を話し合い、会員の中から会長、副会長、会計、会報編集などの役員を決め、月に 2 回程度の役員会、または運営委員会を行っている。A 会は事務局を X 保健所においているので入会手続きなど事務的なことは保健所で行われている。入会するには 3000 円の年会費が必要である。A 会の活動費は主に会員からの年会費に加え、賛助会員²からの会費、支援団体からの支援金、X 県肢体不自由児協会からの補助金でまかなわれている。

表 4 - 1、A 会の活動の経緯

1985 年、同じ悩みを持つ家族が保健婦の呼びかけで集まる。
1986 年、A 会発足。
1990 年、会報第 1 号が発行される。参加者も 10 家族から 30 家族へ増加。
1995 年、音楽サークル活動 ³ を開始。
1998 年、住みよい街角ウォーク活動 ⁴ を開始。

²賛助会員とは A 会の活動に賛同し賛助会費という形で会に協力をしている会員である。

³障害を持った人でも使いやすいように楽器に加工がされている。民族打楽器やキーボード等の本格的な楽器がそろえてあり、週に 1 回の練習を行っている。

音楽サークル、地域の文化祭で初演奏披露。
 2002年、住みよい街角マップ⁵完成。
 音楽サークルが県よりボランティア賞受賞。
 2004年、地域の福祉ネットワーク⁶にA会も入会。

5、調査方法（インタビュー、役員会の見学）

5-1、インタビュー

A会の2005年10月、会長に連絡をし、研究目的を伝え、会長と他に承諾をいただいたA会のメンバー4人へのインタビュー調査を行った。インタビューでは匿名での調査ということで承諾を得ている。質問事項は以下の内容である。A会に入る前について（サポート面、情報収集など）A会に入ったきっかけについて（知ったきっかけ、理由、周りの反応）

A会について（印象、会に入って楽しいこと、苦労していること、変化したことなど）
 代表者として（運営上起こる課題）セルフ・ヘルプ・グループとしてのA会について（保健所との付き合いなど）⁷

会長へのインタビューは、2005年10月3日10時から約2時間、会長さんのご自宅で行った。われわれがインタビューを行った部屋では会長さんと私しかおらず、二回ほど電話がなり会長が席を立った少しの間、インタビューを中断しただけである。今回での記録は録音を承諾していただいたため、MDウォークマンでの録音と、メモで記録をとった。

その他の会員の方には翌日の役員会の合間にそれぞれ行った。記録に関しては会長と同じくMDウォークマンでの録音と、メモで記録をとった。

表5-1、（2005年10月インタビュー時点での）インタビュー対象者について

	性別	役員名	お子さんの年齢	お子さんの障害の種類・程度	入会してから の年数
会長	女	会長	中学1年生	脳性まひ、精神発達の遅滞	約9年
Aさん	女	遠足部長	小学5年生	自閉症	約6年
Bさん	女	副会長	小学1年生	視覚障害	約5年
Cさん	女	会計監査	20歳	脳性まひ	約18年

⁴当事者とその家族が実際に町にでて、車椅子で通れる道や段差がない道などを確認し障害者が利用しやすい店や道路などの情報を集める活動。障害者の視点で町をチェックする。

⁵住みよい街角ウォーク活動で得られた情報を情報誌としてまとめたもの。

⁶現在の会長はこの福祉ネットワークを設立させた一人であり、今回福祉ネットワークが設立したことでA会も入会した形となった。今後福祉ネットワークに参加することで他の団体や地域の福祉関係者とより連携していけるようになる。

⁷、 の質問は会長だけに行った質問である。

5 - 2、役員会の見学

A、B、Cさんへのインタビューは2005年10月4日の役員会の合間にさせていただいたので、そのまま役員会の様子を見させていただくことができた。

A会を運営していくために重要な役割をする役員会はX保健所で行われている。2005年10月4日の役員会の内容は、今度行われる親の親睦会の日程・内容の話し合いと日本肢体不自由児協会/各道府県肢体不自由児協会主催のイベントで 地区の小学校・中学校・高校へビラ配布の分担決めであった。

役員会の様子

午前十時会長が部屋へ到着し、パソコンで次回に行われる勉強会の案内を作りながら他の会員が来るのを待っている。

午前十時十五分 Aさんが部屋に到着。このあとだんだんと会員が集まり始める。役員会は午前十時定刻に始まるわけではなく、仕事や家の用事で遅く来る会員もいれば逆に仕事や家の用事で早く帰る会員もいる。そういった参加者の増減はあったものの午前十時三十分過ぎから話し合いが始まった。

ビラがきちんと小学校・中学校・高校ごとに分けられているかチェックし、皆で誰がどこへ行くのかを話し合う。親睦会についても担当の会員が何をするか、どこに行くかと他の会員に聞きながら話を進めていた。

役員会の雰囲気は実に明るく笑い声がたえない。黙々と話し合うのではなく、コーヒーを飲みおしゃべりをしながら話している。そして驚いたのはそれぞれがそれぞれの事をしながら、しかし話し合いは進められていることだった。一つ一つを皆で丁寧に確認していくというよりもそれぞれが自分の役割をこなしていきながら役員会が進んでいるといったような感じである。少ない時間の中でてきぱきとしかも笑い声を交えながら役員会が進んでいく様子は見ていてとても興味深いものであった。

6、分析

組織を動かすとはいったいどういうことなのか。まさか組織自体が自由に形を変えるのではない。変えるのは組織の会員である。その中でももっとも組織を動かす役割を担っているのは会長である。A会の会長はリーダーとして組織をどう動かしていったのだろうか。

6 - 1、リーダーとしての組織運営

会長は実に多忙な毎日をおくっていらっしゃる方である。インタビュー時にスケジュールの確認で先数週間のA会、その他の会の予定をおっしゃただけでもかなりの数であった。本当にお忙しいですね、と話すところ「そうでもないですよ。」と笑っていらっしゃった。インタビュー時にも「A会は一応代表やし、W会も一応副...副(代表)ぐらいで。W会は頻繁にということではないし、地域の福祉コーディネーターさん主宰にいるんな事務でい

うか、運営のほうはしてくれてるんで、要所要所で話させてもらうくらいな程度で（参加している）」（インタビュー記録資料5ページ参照）とすべてが頻繁に出ないといけないわけではないことをおっしゃっていたが、すべてをこなしていくのは大変な労力が必要である。

現在の会長が【会長】⁸となったのは1998年である。8年会長を務め上げていらっしゃる⁹が、会長がA会の代表になられてから、A会内外で今までとは違った取り組みや変化が起こっている。これはつまり会長のリーダーとしての成果ともいえる。はたして会長はどのようにして会を動かしていったのか。以下では、「組織におけるリーダー」である会長のA会の運営からヘルフ・ヘルプ・グループ内で起こっている活動の変化を捉えていくことにする。

まず、リーダーが所属しているのは「組織」である。また似た言葉で「集団」という言葉があるが、それぞれどういった言葉なのか。船橋によると、

狭い意味での組織とは、二人以上の人々が共通の目標達成を志向しながら分化した役割を担い、統一的な意思のもとに協同行為の体系を継続しているものをいう。この意味での組織は集団の一種であるといえるが、一貫した指揮系統を持つことによって集団とは区別される。（船橋 1988：566）

つまり、二人以上の人々が共通の目標達成を志向し相互作用しているという集団の地位と役割が、より分化したものを組織というのである。A会もその意味では二人以上の人々が共通の目標達成を志向しお互い相互作用している集団といえるが、A会内で役員や担当を決めていることから組織に近いといえる。

そういった集団内でのリーダーの行動に関して、古川は職場集団を統率する第一線管理者を対象とした調査研究で次のようなメカニズムによって、リーダー行動が発生してくることを示している。

リーダー（管理者）はまず、自分があずかる職場集団の状況を把握する。また集団状況の自分にとっての有利性についても判断する。

その状況把握と有利性の判断に基づいて、職場集団をどのような状態にしたいか（あるいはすべきか）についての「目標」を設定する。

ひとたび目標設定がなされると、リーダー（管理者）は、その実現・達成に向けて動機づけられ、実際に行動を起こす。その際に、自分が掲げた目標の実現に最も貢献す

⁸「現在の会長」と、役職名の「会長」が混同しやすいので後者を【会長】と記す。以下【会長】は役職名である。

⁹A会の役員は2年任期である。2年ごとに役員改選が行われ、年度初めの総会をくぎりに新体制となるシステムになっている。

る（役立つ）と思われるリーダーシップ行動を選択し、行使する。（古川 1988：137）

このリーダー行動のメカニズムを参考にして、会長は会の代表になってからどういった目標を立て行動に移しているのかをみていくことにする。以下では状況把握、目標設定、行動選択、成果をキーワードに読み解いていくことができる。

【会長】につく

まず【会長】に就いたときについて、会長の場合「前任の方が都合で任期の途中で辞める」ことになり【会長】を二年任期という A 会の決まりに沿って順調に決めただけではなく、ある意味 A 会の不測の事態で次の【会長】が選ばれることとなった。前【会長】が辞めた後「それに変わってじゃあ一年だけということで引き継いだ方がいる」が年齢を理由にその中で年齢が若い会長がどうかという役員会での話の方向により、会長が次の【会長】に選ばれることとなった。【会長】に就いたときの様子を「ちょうど私もそのときに役員会に出てた人間だったんで、そんで役が回ってきたという感じで。そのときも私も他にそんな役をしているわけではなかったし、実際この会が意義深いと感じたんで、自分の気持ちにも合うなって感じてたんで、先輩の方がサポートしてくれるなら¹⁰ということでそれさせてもらったんです。」と会長にとって時期【会長】がまわってくるのは想定範囲だったようだ。【会長】を断る理由もそれほどなくむしろ積極的な受け入れである。

状況把握

A 会に限らず、セルフ・ヘルプ・グループ一般にも言えることだが、会を維持していくためにはある程度の会員の確保が必要である。A 会も例外ではなく会員の確保は A 会全体としてもひとつの課題であった。会長は、A 会のメンバーが減った時の状況についてこう語っている。

こう（資料に記載されている長く会に入っている二人の方の名前を指しながら）いったらこの二人が長老なんですよ。長く入ってる二人で、このときに保健婦の方が召集してすぐたくさんの方の会員、さっきも 40 人いるっていったけど、そういう年齢層の方々が（会に）いたわけね。そしたらやっぱりだんだん歳上になるにしたがって辞めていく、結局（資料をさしながら）肢体不自由児協会を書いてあるんだけど、県の考え方としたら児までなんですよ。だけど私らはそうじゃないと。別に年齢関係なしにずっと入っていた人は入っていたらいいんやていうんでこういう付属の形をとったんやけど、でも学校を卒業した後、作業所とかいろいろ施設に入った後、会に参加できへんやったりとか、そこの活動が忙しくなるということもあってそういう人たちはやめて、それによってたくさんの方がやめていったんです。（インタビュー記録資料 11 ページより引用）

¹⁰会長が A 会に入会したころは年上の方が多く、すぐ会長にとって頼りになる存在であったという。（インタビュー記録資料 6 ページ参照）

A 会の場合、A 会の設立当初からいる会員が一気に辞めていったことが会員の減少につながるひとつの原因であった。そこで、肢体不自由児協会の支部という枠組みを一旦取り除く、つまり肢体不自由者の親のセルフ・ヘルプ・グループとしての枠組みを新たに作り出すことにより、子どもの年齢が高くなった親たちも A 会に参加できるようにしたのである。しかし、この方法は直接的には会の会員の減少をとめることにはつながらなかった。なぜならば、会を辞めていった会員のほとんどは「学校を卒業した後、作業所とかいろいろな施設に入った後、会に参加できへんやったりとか、そこの活動が忙しくなるということもあって」というように会に参加できない要因が他の活動の忙しさにあったからである。そこで会を運営していく【会長】の立場から生じた「会員の確保」という課題に対して、会員を減らさないではなく会員を増やすことを解決策として課題達成を行うように考えていった。

目標設定

会員を増やすためには新たな会員を A 会に誘わなければならない。そのためにはどうすればいいのか。会長は「魅力ある活動内容にしていって新しい人にも入ってもらおう」と考えた。それでは「魅力ある活動内容」とは具体的にはどうしたらいいのか。そこで会長は「社会的な活動」を行うことは A 会の魅力となるのではないかと考えた。ここでいう「社会的な活動」とは、「親睦の活動みたいな、みんなで会費集めてちょっと補助金とかもらって楽しい行事しようとかね、遠足しようとかクリスマス会しようとかそういうお楽しみ系」の活動ではなく「社会（その他の障害者やその親、社会一般の）参加活動」と会長はとらえている。それは会長のやりたいこととも通じることであった。なぜ会長のやりたいことといえるのか、それは会長が他の重度障害者の会と A 会の違いについてこう述べていることからうかがえる。

重度で仕切ってしまうという活動よりかはもっといろんな障害の人たちがいる中で活動していきたい、柔軟な会で楽しみたいなのというのがあって、ほんなかでいろんな情報も交換するし、知らん情報もあるし、直接関係なくてもね。そんなかのでできること増やしていったらいいし、いろんな子が一緒に活動できるならば、今度はもっと広げれば健常な子とも一緒に活動できるし、という風な感覚、そういう会の活動、社会に溶け込んでいける活動をしたいなという気がしたので...やっぱり自分がしたいことにつながってくる会におりたいなという気がして。(インタビュー記録資料 4 ページより引用)

会長は、「社会に溶け込んでいける活動をしたい」そういった活動が A 会ではできるということを会長は多くの会がある中で A 会を選んだ理由としてあげている。これは会長自身が A 会に入る前から思っていたことでもある。

このことから、【会長】という立場から A 会の会員を増やすために行う課題と自分自身のやりたいことがその課題解決法としてうまくかみ合い、会長による今後の A 会の目標設定が「社会的な活動」になったと思われる。

行動選択

こうして会長は「社会的な活動」の実現・達成に向けて、実際に行動を起こすこととなる。ひとつは「社会的な活動」を行うための体制の見直しである。体制の見直しとは会長が【会長】になってから行われたものでそれまでは会員の中から役員として会員を選びその役員が中心となって A 会に関する活動を話し合うスタイルであったが、今回から会員すべてが各恒例行事（学習会、勉強会など）の部員として参加させるしくみになった。全員が会の役員になってもらうのである。この体制の見直しにはどういった目的があるのだろうか。

やっぱりねこういう会っていうのはボランティアで動いている会だから、学校の PTA でもそうなんだけど役員しか動かんようになってくるのよね。だからそれはやっぱりいかんし、負担も役員だけにかかってくるし、でもこの役員は結構楽しんでしている。やっぱり企画とかする自体が楽しいからみんなでやってるといふ部分があるから。ただやっぱりなんやかんや雑用とかふりまわされたら大変やというのもあるし、みんなの意見をくみ上げんやったら企画してこの(役員)メンバーだけでやっていくんはいかんし、だからみんなの意見もくみ上げるという意味でも行事の担当になってくださいということで、全員にどっかの行事の担当になってくださいよということで入ってもらってるんです。だから明日(の役員会)は勉強会と親睦会の相談になっているんですが、これも勉強会の運営委員さん、親睦会の運営委員さんにもできるだけ来てもらうようにしてるんですが、でもねみんなね仕事を持っているということでね、なかなか来れんこともおおいんやけどその場合はこの担当の行事部長が連絡網で頭になっているんで、下に流す時になんか意見ある？て聞いてきてもらうという形をとっていく。だからこれの人には来てもらうていうようにしています。(インタビュー記録資料 10 ページより引用)

それはおもに 3 つの目的が考えられる。一つ目は、「全会員に目標・課題を認識させる」目的である。ただ行事に当日参加するだけでは、会にどういった目標があつてどういった活動をしていかなければならないのかはみえにくい。しかし A 会全会員が A 会すべてのことに対して把握する必要はないし、そうした場合は会を動かすのに多くの時間がかかる。そのため何かひとつでも A 会の活動の決定に関する際に参加することで、そこから A 会全体を考えるきっかけになると考えられるからだ。二つ目は、「役員だけで A 会を回さない」目的のためである。入ったころの A 会の様子を「上層部の役員だけで都合で行事を回しているという雰囲気は強かった。」という。「だからそうでなくてなんかしていきたいなと。」い

うように会長は考えていた。「みんなの意見をくみ上げる」ことも「役員だけで回さない」ことの理由であったが、翻っては「役員だけに負担をかけない」ことにもつながる。会員全員から意見を聞くことと一人ひとりの役員の仕事の負担を減らすことの二つのメリットが生じる。三つ目は「会の楽しさを感じてもらう」目的である。「こういう会って仕事でないし、それを楽しいとか意味があるとかそういうことをするって大事よなって思えなかったら盛り上がりたのよね。」(インタビュー記録資料 14 ページより引用)と話すように会が活気づいて活動を行うため必要なものに、会の内容や会のやり方の側面と同時に意識の側面も挙げている。このことから三つ目は意識の側面を変えていく目的として考えられる。会の行事に参加するだけでなく会の企画の時点でかかわりを持つことで、以前に増して A 会と会員の距離が縮まるものにしていくことができる。

今まで述べてきた体制の見直しが「社会的な活動」を行うための対策である。では実際に「社会的な活動」として会長はどのような行動をしてきたのだろうか。新たな活動として「音楽サークル活動」の開始、「街角ウォーク活動」が挙げられる。音楽サークルができたのは平成 8 年だが音楽サークルは現在に続く A 会の活動のうりとなっている。しかし音楽サークルができた当初は「中だけのサークル活動」としての位置でしかなかったという。クリスマス会で発表するくらいだったのが、会長は「それをそうじゃなくてもうちちょっといろんな人にも聞いてもらおうよしてたんが初めてここの地域の文化祭で発表したんが平成 10 年だったと思うんですけど、そういうことを地域の人たちにも聴かせるというか、まあ社会参加活動という意味づけをつけてきたというのがそのあたりから。」というように A 会の会員だけで発表、聴くだけではなく社会一般の人にも聴いてもらおうと行動してきたのがわかる。また住み良い街角ウォークやそれでできた街角マップもひとつの活動として一定の期間行われていたものである。「私らは当事者の会で人に支援してもらおうような気がするけどそうじゃないよな、私らでもできることあるん違う?っていうことで」取り組んだというこの活動も会長の「社会に溶け込んでいける活動をしたい」という思いをみごとに実現させた活動のひとつであった。

また音楽サークルや街角マップ作りのような新たに活動を増やすのではなく今まで続いていた A 会の活動を、より「社会的な活動」にするための取り組みも行われている。会長が入って初めのころについて「当時は会員だけの親睦会がほとんどだったんです。」と語っていた。これからうかがえるように A 会ができた当初からの活動に「学習会」があるのだが、それも A 会会員内での学習会であった。それから会長が【会長】となり一般の人を含めての勉強会を行うなど既存の活動にも会長の目標を取り入れた活動内容に変化させている。

成果とそれに伴う新たな状況把握

音楽サークルも新たな A 会の活動として定着し、音楽サークルが県よりボランティア賞受賞するまでの社会での活躍となった。音楽サークルの発表の場も増え、「社会的な活動」

を実現していく場も増えていった。新会員も A 会に入会し、A 会が新たな方向に進んでいくこととなる。

しかし、課題の達成により新たに A 会の問題も生じている。インタビューで会長は「去年かな春の役員決めるときに私（【会長】）降りたいていったんよね実は。そのときになんか全部私の荷にかかってきているような気がして、しんどかったというのもあったりしてたのでね」と話している。会長の目標としていた「社会的な活動」は会を維持することに加え新たな会の活動を作り上げていくことであった。それは会長にとって意義深く自分のやりたいことであったが、その分会長が先頭に立って切り開いていかなければならず会長にとってそれが大きなプレッシャーになっていたのである。会長は「代表になってからはこうなったらいいなあとしてきたんやけど、来年（2006年）改選になるし、前のときが変わってもらおうと思ってたんやけど、変わってもらえるかというのもあるし、いずれ変わっていくんやけど…」と語っている。役員改選で、「代表を変わってもらえるのか」ということが会長にとって【会長】を降りることができない要因になっているようである。

「まあそこからここ2年でもう一度（A会の代表に）」と会長は2004、2005年もう一度【会長】をすることとなった。自分がしていきたい活動をしてきて、実現させた部分もある。しかし会長は今のA会には会長以外に主体的に動いてくれる会員が少ないように感じていた。

目標設定

次の目標はどういったものなのか。改選のとき【会長】を降りられないことの理由に次の代表がないことを語っていた。どうしたら次に【会長】をバトンタッチすることができるのだろうか。会長は「みんなが主体的にやっていけるようなA会」を作り出していくことが一番の目標の実現・達成になるのではないかと考えた。

行動選択

「さっきの行事ので、みんなが役員になるっていうのはね、何年かずっとしてきてるんだけど行事の担当者っていうのにより動いてもらうようにしたんです今年（2005年）はね。」と、ただ仕事の分担を増やすことではなくその会員にA会に関する決定権の機会を増やすことで活動を積極的に取り組んでもらうようにしたのである。

成果

インタビューを行ったころは2005年10月で、2005年も終わりに近づき来年新たな改選が行われるというところであった。会長はインタビューの中で

みんながそれぞれ動ける形になってきたかなって。だからそのことによって私の肩の荷もおりたし、みんなに任せていけるというかみんなが主体的にしていく。たとえば役員

会にもし私がいけなくても決めていってもらえるというかなんかそういう風なところにちょっとようになってきているんで、だからそういうことができるようになってきたらだれが上にたってもやっていけるかなと思うんで、まあそういうところにもって行って次の方にバトンタッチできたらいいなあ。(インタビュー記録資料 14 ページより引用)

と語っていた。会長は「みんなが主体的にやっていけるような A 会」という目標の達成にまずまずの手ごたえを感じているようである。

来年新たな【会長】が選ばれることは単に【会長】が変わっただけではなく A 会自体もまた新たな一歩を踏み出すことになる。

まあだから A 会もここまできてるから過渡期がいろいろあったとおもうんやけどね。そこからへんで、まあ私もどうなっていくかはわからないけど思うね。お互いがお互いを障害違っても仲間を思いやれる仲間作りになったらいいなとは思いますがね。(インタビュー記録資料 14 ページより引用)

「お互いがお互いを障害違っても仲間を思いやれる仲間作り」これこそが会長の思う A 会の目的である。それぞれそのときの【会長】や会員によって行われる具体的な活動は違ったとしても、この目的を大切に A 会が続いていくことを会長は願っているのではないだろうか。

6 - 2、運営上の課題

ここでは、A 会と保健所とのあるトラブルをみることによって A 会運営上のひとつの課題をみていくことにする。

セルフ・ヘルプ・グループにとって活動する場所を確保するというのは、活動を運営していく上で非常に大切である。スペースの確保だけではなくそこには会議室を使うのにお金がかかる場合もあるため一から場所を探すことは金銭面で難しいことでもある。セルフ・ヘルプ・グループによっては病院などの方から場所を提供してもらえるグループもあるが、専門職とセルフ・ヘルプ・グループがどの程度関わっているのかという程度にもよる。A 会の場合、月に 2 回行われる役員会は X 保健所の一室で行なわれていた。A 会にとって保健所は A 会の事務局が設置されている場所であり、活動の場所を提供してくれる以前に A 会と強い結びつきがある。会報の第一号で当時の会長は「途中消滅しそうな時期もあったが保健婦さんと会員の熱意で危機を乗り越えて今回の機関紙発刊がまるで夢のようだ」(1990 年 2 月第 1 号)と記していることから、A 会の当初は A 会の存続のために保健婦が A 会の支えになっていたようである。

しかし、保健所のつながりが長い中で、2001 年までクリスマス会を保健所で行っていたのが、年間行事計画に「クリスマス会 会場探しが、第一関門！保健所は日曜日使用でき

なくなりました。100名ほどが利用できるいいところありませんか？」(2002年5月第30号)と記載され、2002年からは実際にクリスマス会が別の会場で行われている。(2002年7月第31号)場所が使えなくなることは、A会にとって活動場所を新たに変えなければならないことであるが、そういったA会を支える外部との関係について会長はインタビューで以下のように答えている。¹¹

保健所からするとね、手を離そう離そうとしているのね。それが目に見えているというか、それにたいして私らはなぜだろうと思うわけよね。だけど一方で冷静に考えてみると、そういう団体が自分たちの力でやっていけたらそれはそれでいいことやなていうことは思うんだけど、なんかそこらへんに、なんていうのかな最初はなんか保健所に段取りしてもらったときながら、力をいただきながらしてきとったのになんかこうそこに矛盾した気持ちがみんなの中には存在するわけ。例えば活動場所にしても保健所今使ってるけど、だんだんと今使えない状況になってきてる。今役員会は使わせてもらってるけど、土日も今まで使ってたんですよ。そしたら土曜日、日曜日は保健所閉めるので、だから土日が使えないとなるとクリスマス会とかやる場所をどっかさがさなくちゃならなくなる。そういった問題点が毎年毎年ぼつぼつぼつ出てきてる。でまあ今も役員会使用してもらってるけど、車がたくさん(駐車場に)とまるとかいろいろ文句いわれてとか、いろんなことがあって、そういう意味ではとても活動しにくく、実際はしにくい。まあだけど、一方で私ら自立した活動としてみていくとね、それはそれで自分たちで確保し、資金的にも自分たちで確保して、していくべきなんかと。そういう思いは少なくとも私はね思ったりしています。でもそれがただ単に保健所の業務が増えたとかこういったグループと行政団体をまったく切り離して考えるのもどうなんかなと思ったりもしてる。だから今までだったうちの会だけでなくいろんな会が保健所の会議室を利用してたんですよ。だけどそれを全部排除していったわけ。部屋を使えないという形で。A会とあと一個あるかないかぐらいちゃうかな、結局A会さんはよく活動しているからということで使ってもらってる感じなんよね。だけど逆にそこには上下関係があると思うの、その言い方にはね。だけどその保健士さんとしたら私たちの会から得られる情報もすごくあると思うし、それを保健士さんはわかっているんですよ実際はね。ただ組織の中の一人だから上から言われたらそれをどないかせないかんということになってしまって、気持ちとは矛盾した動きを言わなざるを得なくなるというか、そういうことがあるわけなの。だからうちとしてはすごく微妙なの。もともと今も協会の事務局は県においでるでしょ。だからそういうことで行政との、本当はね願わくは二人三脚でいけたらいいんじゃないかって。どっかで思ってるんだけど、でもそうやっていわれたら自立した会にせんといかんのかなとすごく矛盾、もやもやした思いは今持ちながら。そういう意味ではまったく手を切ることによって私らにとって生じてくる不利益もあると思うの。不利

¹¹ 線を引いている箇所は注目するところとして筆者が付け加えた。

益というのは実際、役員会の場所を使わせてもらえないということもあるんやけど、今社会的な活動をどんどんしていこうとしているでしょ。でその中で例えば県の企画のイベントを知ることができるとかあるでしょ、そんなところに私たちにこんなことができるのがあるよとか、言うのがいいやすいというか、それをスムーズにやり取りできるのがある。だからただ単に駐車場が使ってもらったら困るとか、場所使ってもらったら困るとかそういう風なレベルでなくて、それはそれで開いたら使ってもいいじゃないというところはあるしね、なんていうのかな、完全に切り離すのが自立ではなくて、自立させるというならそこには関係に格差があると思うんね。だからそういう考え方じゃなくて、お互い社会の福祉の関係だったら努力している部分があって、それを合わせていくとかねそういう見方をできたらいいなっていうのはうまくいえないんだけど思う。行政のシステム上で離していくんじゃないってね。

会長は、保健所が使いなくなるという環境の変化によって、現在の A 会と保健所との関係を問い直し、A 会が今後進む(移行する)べき活動の仕方、A 会のあり方を模索している。そこには、「自立」が、「A 会との関係をたつもの」として用いられ、会長が今後のあり方を語る際に起こるジレンマを説明する言葉として使われている。

7、考察

このような会長による A 会の組織の変化によって、A 会の活動のベクトル、レベルはどのように変わったのであろうか。先行研究で挙げている野田の 4 つの活動のステージの図と照らし合わせてみる。

まず会長が【会長】になる前の A 会の活動はどのようなものだったか。会長はインタビューで「当時は会員だけの親睦会がほとんどだったんです。だから一般の人を含めての勉強会とかは企画してないとおもうけどね。」と答えていることから、会員同士での活動が主に行われていることがわかる。レベルの軸で言うと個人あるいは家族等のあくまで当事者内の責任の範囲内の「自己完結的な努力」に近い。また、親睦会¹²は「自己内部の働きかけ」が強いことからベクトルはより上であることがわかる。したがって、活動のステージで表すと「ステージ 1」であるといえる。

では会長の組織運営後の活動のステージはどこであるといえるだろうか。具体的に会長が新たに取り入れた活動に「街角ウォーク活動」「街角マップ作り」などがある。街角ウォーク活動は障害者の視点で町をチェックするという活動であるため問題を町の中に見つけ、それを街角マップとして A 会員以外にも情報を提供するといったことから、レベルの軸では一般社会レベルでの取り組み、ベクトルでは一般社会への働きかけが強いことが言える。

¹²親睦会とはインタビューで会長が「親睦の活動みたいな、みんなで会費集めてちょっと補助金とかもらって楽しい行事しようとかね、遠足しようとかクリスマス会しようとか」と答えていることから、ここで A 会においてはこれら行事を指していると考えられる。

活動のステージで表すと「レベル」であるといえる。

このことから、A会の活動のステージは会長が【会長】になる前となった後では「ステージ」から「ステージ」への活動の変化が起こっているのではないだろうか。

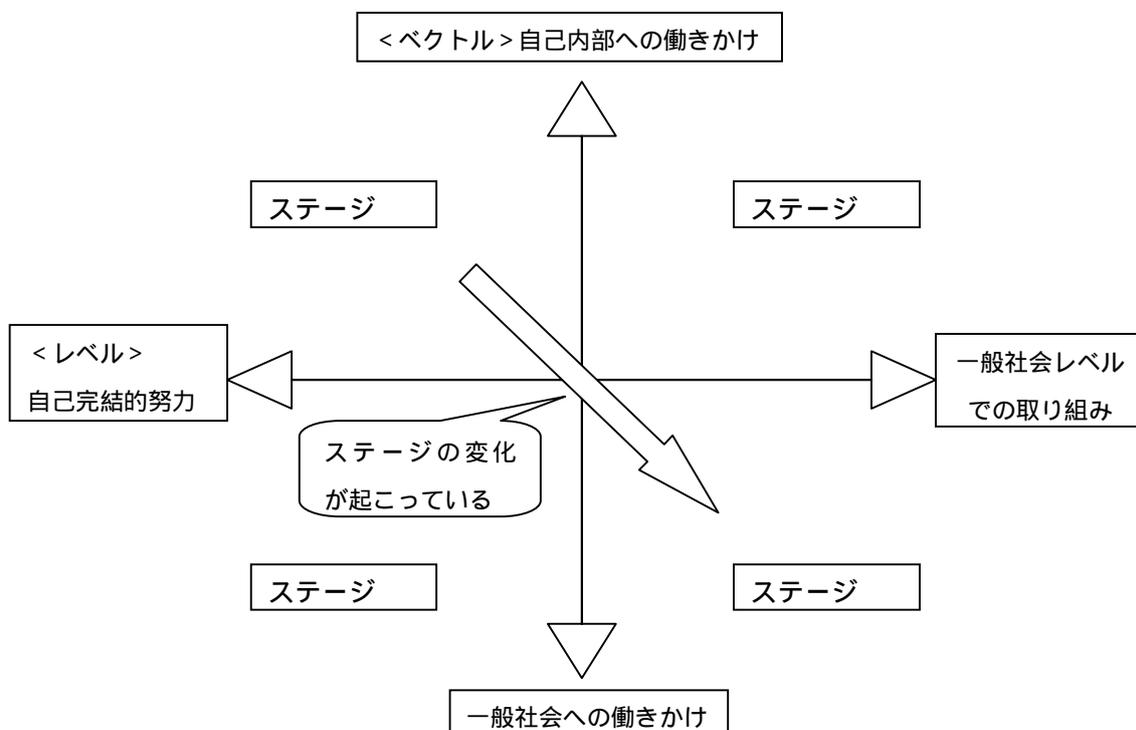


図7 - 1、活動ステージの変化（筆者が作成）

8、まとめ

組織の変化を会長のリーダー行動でみていくことで、会長としての課題と前から思っていたやりたいことが上手にマッチしたことがA会の組織の活動を実際に変えていく要因になっていたことが明らかになった。またセルフ・ヘルプ・グループの運営を活動のステージの変化を通して見ていくことで、具体的にどのような運営がセルフ・ヘルプ・グループ内で行われているのかが明らかとなったのではないだろうか。

【参考文献】

長谷正人編、1999、『セルフヘルプグループ 1998年度社会調査実習報告書』千葉大学文学部行動科学科。

、2002、「セルフヘルプグループの調査実習から「個別的苦しみ」をめぐる社会学の可能性」大村英昭編『臨床社会学を学ぶ人のために』世界思想社、24-46。

橋本文子・樫田美雄、1999、「ライフコースとセルフヘルプ・グループ あけぼの会（乳がん患者のセルフヘルプ・グループ）T支部幹部へのインタビュー調査から」『徳島

- 大学社会科学研究所』第12号
- 平野かよ子、1995、『セルフ・ヘルプグループによる回復 アルコール依存症を例として』川島書店。
- 福重清、「セルフヘルプ・グループの物語論的効果再考 『回復』することの曖昧さをめぐって」『現代社会理論研究』14：304-317。
- 船橋晴俊、1988、「組織」in 見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学辞典』弘文堂：566-567。
- 古川久敬、1988、『集団とリーダーシップ』大日本図書。
- 伊藤伸二・中田智恵海編著、2001、『知っていますか？ セルフヘルプグループ一問一答』解放出版社。
- 伊藤智樹、「『語り』の共同体 アルコール依存の相互作用論的分析」『現代社会理論研究』6：13-28。
- ジョージ・サーサス著 前田泰樹訳、2000、「行為における組織を研究すること」文化と社会編集委員会『文化と社会 第2号』株式会社マルジュ社、37-73。
- 患者のネットワーク編集委員会編、2000、『病気になった時すぐ役に立つ相談窓口・患者会1000』三省堂。
- Katz.A.H 著 久保紘章監訳、1997、『セルフヘルプ・グループ』岩崎芸術出版社。
- 小林幸一郎・梅澤正編、1988、『組織社会学』サイエンス社。
- 久保紘章、1988、『自立のための援助論 セルフ・ヘルプ・グループに学ぶ』川島書店。
- 久保紘章・石川到覚編、1998a、『セルフヘルプ・グループの理論と展開』中央法規。
編、1998b、『セルフヘルプ・グループ活動の実際』中央法規。
- 野田哲郎、1998、「セルフヘルプ・グループ活動の6つの志向群 セルフヘルプ・グループ活動のタイプの分類」久保紘章・石川到覚編『セルフヘルプ・グループの理論と展開』中央法規、21-38。
- 岡知史、1999、「セルフヘルプグループ」in 庄司洋子・木下康仁・武川正吾・藤村正之編『福祉社会辞典』弘文堂：640-641。
、1999、『セルフヘルプグループ』星和書店。
- 大久保考治・嶋崎尚子、1995、『ライフコース論』日本放送出版協会。
- 佐藤慶幸・吉田裕・吉川栄一、1968、『組織社会学』学分社。
- 心光世津子、2005、「アルコール医療とセルフヘルプ・グループ」山中浩司編『臨床文化の社会学』昭和堂、269-295。

貧困問題の現代的位相

中恵 真理子

0 , はじめに

現在、生活保護は高齢化や不況の影響を受け、受給者の増大により費用をどのように負担するかが大きな問題となっている¹。そのようななか、本稿では生活保護を受給する上で、自立への助長という名目で保護担当の職員や民生委員を通してなされる就労指導が抱える問題について考察したい。

この受給者に対してなされる就労指導は、1960年代の経済の高度成長期時代に労働能力を持つ人に強くなされるようになったものであり、その方針は現在も継続している（東京ソーシャルワーク編[2000:153]）。それだけでなく、先に述べたとおり財政的な圧迫を受けて、指導は、強まりこそすれ弱まりはしないだろうというのが現状である。しかしながら就労指導は財政的な問題によってのみそれをなす根拠となるものではない。

生活保護法は1950年5月4日、公布され、即日施行された。自立への助長は生活保護法第一章総則の第一条にかかげられている。

「(この法律の目的) 第一条 この法律は、日本国憲法第二十五条に規定する理念に基づき、国が生活に困窮するすべての国民に対し、その困窮の程度に応じ、必要な保護を行い、その最低限度の生活を保障するとともに、その自立を助長することを目的とする。」

この自立への助長を含む第一条についての解釈は副田に詳しい（副田[1995:42-43]）。それによると、生活保護法制定時の社会局保護課の課長小山進次郎は、自立助長は生活保護の積極性を表すものであり、「その人の人間として持っている可能性を十分発展させてゆく、いわば人権をそのまま実現させてゆくようにするところまで持ってゆく」という意味であったと述べており、また自立助長を必要としているのは被保護者の一部であり、更正更正とせき立てるやり方をとるべきではないとも述べている。しかしこれとは別の解釈もあったという。それは、現生活保護法には旧生活保護法にあった欠格条項²が入っていないため、それに代わるものとして自立助長を捉えるということである。本稿では、この二つの解釈を巡って、自立助長が現実にどのように機能しているかを、見ていく。

結論を述べると、自立助長は、自立を生まないというのが私見である。そしてそれは、1 ,

¹ 2005年11月24日の朝日新聞には生活保護費を国の負担を減らして地方自治体に転嫁させるという案を厚生労働省が出したことが触れられている。

² 勤労意欲を持たないもの、素行不良の者、あるいは、健常で健康な身体の持ち主である男子は生活保護の対象としないということである。

自立助長を捉える先に述べた後者の解釈が機能しているだけでなく（スティグマ）²、小山の解釈に立った制度運営においても自立を指導するという行為そのものがはらむ問題からもそのように言えるというのが理由である。このことを詳しく述べていくとともに、自立助長という制度から見えてくる、現代社会というものも考えてみたい。

2．自立助長はどのように制度運営されてきたか

現生活保護法における自立助長は、前節で見たとおり、成立当初高い理想の元にかかけられたものであったが、現実の制度運営では、どのように機能してきたのであろうか。ここでは、古賀昭典の『現代公的扶助法論』における「生活保護行政と自立助長」（古賀[1997:310-316]）から概説する。

1953年4月1日、国は「生活保護行政の適正かつ効率的な運営を確保するため」に、生活保護法施行事務監査要綱を定め、都道府県及び指定都市に示すとともに、この要綱に基づき毎年度、監査方針及び監査主眼事項を定め生活保護法施行事務監査を実施している。この適正実施の推移のなかで、特に、自立助長と深い関係を持つのは、1962年の主眼事項である。それには「勤労意欲の増進及び自立助長の指導の徹底と相互責任の達成」とされ、就労（あるいは可能）世帯への指導が「自立助長」として挙げられる。これは、さらに1964年度には稼働能力ある者の受給要件の再確認を方針とし、また「不正受給者に対する措置『の徹底』など命令や指示によって、生活指導」が強化される。その後も、適正実施の強化がされるとともに、現業活動の充実の名の下に受給者への指導が強化されていった。

このように見てくると「自立助長」は、「適正化」の目的や根拠となって機能していることが分かる。そしてここで意味する「自立」とは、古賀のいう（古賀[1997:314]）ように、「保護の依存からの脱却」であり「保護を受けないで済むようになる」ということを指す³。

ここでは明らかに、先で提示した、「自立助長」の後者の解釈、旧生活保護法にあった「欠格条項に代わるもの」が、生きていけると言えよう。欠格にあたるのは、健常で健全な身体の持ち主である男子であるのだから、生活保護を受給するのは、それに当てはまらない人、身体が健常でなかったり、精神病患者であったり、高齢者、母子家庭であることを指す。これは、受給者に対するスティグマにつながる。保護を受けるのは、稼働能力がないことそのものを指すからである。稼働能力があっても、何らかの事情で働けない人は自立助長の対象となり、その状態から、離脱することを余儀なくされるからである。

³ 「自立」概念は、障害者福祉・運動のなかで、「自らの判断と決定により主体的に生き、その行動について自ら責任を負うこと」を指し、そのためには、生活保護に依らざるを得ないのであり、保護からの脱却ではなく、保護を受給することによって、自立を果たすという解釈も、あった（古賀[1997:322-323]）。

このように、自立助長は、濫救防止と、救済することが同時に惰民養成につながるという救貧観へのまとい配慮がなされたものである。自立助長がうみだすこうしたスティグマが、逆に、自立に結びつかなくなるという機能を次節で考察する。

2．自立助長のパラドックス

2-1．予言の自己成就

自立助長のパラドックスを説明するために、有名なマーソンの「予言の自己成就」から、そのメカニズムについてのヒントを得ようと思う。

それは、一言で言うと内集団による外集団への偏見を覆そうとして逆機能が起こるというものである。マーソンが挙げた具体例を用いるならば、アメリカ白人中産階級による、黒人やユダヤ人に対する偏見で、例えば、外集団に当たる黒人やユダヤ人が内集団の掲げる徳目を身につけていようといまいと非難を受けるというものである。マーソンはこれを「すればするで非難され」「しなければしないで非難される」(Merton1961=[1981:392])と述べている。

そして外集団はその非難を避けるために、何の取り柄もないと口癖のようにいわれれば自分の取り柄を示す証拠があれば、どんなものにもしがみつき、逆に過度の業績について非難を受けると自己防衛の建前から、自分の徳目は本当に悪徳だと思わされるようになるというのである。

こうしたことが自立助長においても起こりえているのではないか。

2-2．自立助長が生み出す逆機能

被保護者は経済的な自立が困難だからこそ保護を受給するのだが、自立助長の意味する経済的に自立できない者＝惰民というスティグマによって、矛盾する立場に立たされ、スティグマを破ろうとあがく。

これが一方で、かなり苦しくても保護を受けないという選択へとつながり、スティグマの強化へと結びつき、他方で、保護の早期打ち切りという指導に、抵抗できず、不安定な就労を進んですることとなり結果的に、保護から離れがたくなる

2-3．貧者論

こうした受給者の矛盾はどうして生まれるだろうか。受給者の矛盾は、貧者は権利の主体であると同時にスティグマの対象であるというジンメル主張が現代も当てはまるのである。

3 , 自立の助長という「指導」のパラドックス

ここで、小山の自立助長についての解釈をもう一度、見てみよう。

「その人の人間として持っている可能性を十分発展させてゆく、いわば人権をそのまま実現させてゆくようにするところまで持ってゆく、いわば（自立助長は）生活保護の積極性を表すもの」というものであった。ところでこの小山のいう解釈は「教育」の理念にそっくりであることが分かる。もともと「指導」とは、一般的には教育の中での行為を指すものである。

では、教育の機能とは何であるか。この高度消費社会においては、イリッチのいうように、この消費社会を生きていく上での消費能力を持った人間とそうでない人間とを振り分ける合理的な選別の役割を果たす（Illich1970=[1982:139]）。消費社会の再生産にこそ寄与しているのである。自立の助長という指導は、さらに徹底した選別をしているのではないか。私が行ったA市の民生委員の方とのインタビューでは、自立の助長は現状では、行き過ぎているのではなく、質、量ともに、「ますますきめ細かい指導」が求められるのであり、現状では、「人手不足」で、「十分ではない」ことにこそ問題があると述べている。またB市福祉事務所の保護担当係長の方とのインタビューでは、「本人の意に沿わない仕事を勧めることもあるのですか」という問いに、「保護生活が長引いている人には」と限定しながらも、「簡単なこと、出来ることから始めてみてくださいということはありません」と述べていた。

このような指導は、長期的な展望を欠き、結果的に低所得、不安定雇用への就労へと導いてしまうのではないか。

4 . 自立の助長を通してみる現代社会

4-1 保護ずれ

ここでは、先ほど述べた、B市の福祉事務所保護担当係長の方とのインタビューで出てきた発言「保護ずれ」について分析したいと、思う。これは、「生活保護を受給しているということは、それ以外に生活する方法がないということで、そのような中、担当のケースワーカーの人に自立せよと言われていたら、かえって受動性を増すというか、言うことは聞くけれども、自立につながらないということってありませんか」という趣旨の問いに、「それはあります。保護ずれですよ。話をしていたら分かる。やる気を失ってきたんだなと言うことが分かる。でも、解決法は、先にお話したこと（ケースワーカーが足りないという現状についての話題）で乗り越えられるんですよ。ケースワーカーを増やし、話をする。そうすれば相手の気持ちが分かるし、必要なことも分かる。アドバイスしていく。」

この発言には、とまどいを感じた。指導があることが、また指導に従わなくてはならないという義務感によって、また自分自身の生活設計や、自立計画というものに介入され、

見通しが立たなくなるのではないかということに対して、また就労指導に従うことが長期的な展望での自立につながるということに対して、一種の被保護者の丸抱え、どこまでも、面倒を見ると言うことが、解決策になっている。

ここには、いったん保護を受けると、離れるための基盤がなく（基盤は作り出そうとすれば不正受給の可能性が生まれる）支援策も不十分であり、低所得で不安定労働をせざるを得ないため、失業に陥りやすく、恒常的に保護から離脱することが困難であることを、認めているとも言えよう。そうした場合、本人のあきらめは、保護担当職員からみると、やる気のなさとうつり、保護ずれと評価されてしまっている。解決策は、ゆとりある保護の受給によって、恒常的に保護を離脱するための支援ではなく、恒常的にやる気を見せる（就労意欲を見せ続ける）ことにむけられる。自立助長はこのような悪循環をうみだしているのである。

4-2 . 自立助長を通してみる現代社会

イリッチは現代の学校化された社会について次のように述べている。

貧困者はいつの時代にも社会的に無力だったのであるが、制度的な世話に依存する度合いが次第に高まってくると、彼らの無力さに新しい要素が加わった。それは心理的な不能とか、独力で何とかやり抜く能力を欠くとかいうことである。（中略）近代化された貧困とは状況に影響を与える力の欠如と個人としての潜在能力の喪失を結合したものである（Illich1970=[1982:17]）

こうした貧困者の無力さは制度に依存することから生まれただけでなく、制度の在り方が作り出しているとも言えよう。長期的な保護離脱のための支援がくめないのは、それだけの社会費用がかかりすぎることもあるが、保護を受給していない我々からの不公平感といったものが許さないのであろう。現代社会は受給者にとって貧困を意味しているだけでなく、扶助を受けてない我々の生き方も貧困であることを意味している。

<文献表>

- Illich,Ivan,1970,Deschooling Society(=東洋・小沢周三 訳 1982、『脱学校の社会』東京創元社
加野芳正編 1994、『教育のパラドックス、パラドックスの教育』東信堂
古賀昭典編 1997、『現代公的扶助法論』法律文化社
Merton,Robert,King,1949,Social theory and Social structure,The Free Press,(森東吾ら訳

1961、『社会理論と社会構造』みすず書房
森下伸也編 1998、『パラドックスの社会学』新曜社
渋谷望 2003、『魂の労働』青土社
Simmel Georg,1908,Soziologie (= 居安正 訳 1994、『社会学』白水社
副田義也 1995、『生活保護制度の社会史』東京大学出版会
副田義也編 2001、『21 世紀への橋と扉』世界思想社
樽川典子 1989、『生活保護における指導の実施過程』『社会問題の社会学』サイエンス社
東京ソーシャルワーク編 2000、『How to 生活保護』現代書館
山田昌弘 2004、『希望格差社会』筑摩書房

付録

50 音社会学

50音(行)	執筆者	氏名
あ行 あいうえお	は行 はひふへほ	正島 祐子
か行 かきくけこ	ま行 まみむめも	佐々木 実花
さ行 さしすせそ	や行 やゆよ	田中 文恵
た行 たちつと	わ行 わをん	林 佑香
な行 なにぬねの		中恵 真理子
ら行 らりるれる		樫田 美雄

あ「間(あいだ)」の社会学

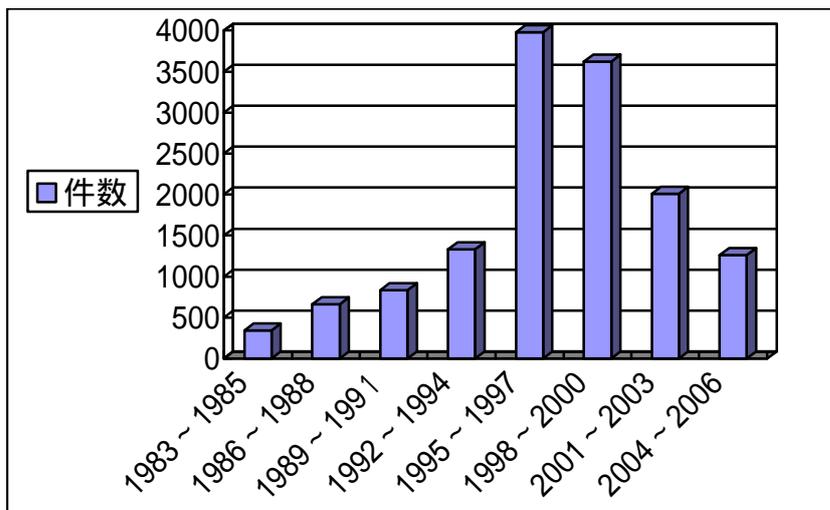
人と人との間には物理的な距離のほかに、人の心理的なものや社会的なものが隠れている。例えば大学の付属図書館を利用するといつも思うのだが、必ず人はひとつ置きに席を空けて座り、同じテーブル同士になると対角線上に座ろうとする。隣同士に座っている人はたいてい知り合いであることが多い。しかし、ひとつひとつが区切ってある部屋を見るとすべての席がうまっている。これは、図書館というあるスペース内でのことだが日常のあらゆる場面で人と人との間から実におもしろいことがわかるのではないだろうか。

渋谷はこういった人間と人間の間空間を「パーソナル・スペース」と呼び、パーソナル・スペースを日常の多面的な部分からとらえている。パーソナル・スペースは心理的だけでなく社会的にも大きく影響されていることから、詳細に観察していくことでおもしろい発見ができるかもしれない。

【参考文献】渋谷昌三、1990、『人と人との距離 パーソナル・スペースとは何か』日本放送出版。

い「いじめ」の社会学

子どもの安全が頻繁に叫ばれるようになった今日、「いじめ」も社会問題のひとつとして取り上げられ続けている。いじめの原因は？どうしたらなくなるのか？こういったいじめの解決策を議論していくのも必要だが、ここでは「いじめ」が社会的にどのように問題視されているのかを「新聞」を通じてみていく。



上の図は、1983年1月1日から2006年2月6日までに発行された朝日新聞で記事に「いじめ」と「学校」の言葉を含んでいる記事総数を3年ごとにまとめ正島が作成したグラフである。検索にヒットした数を比較してみるだけでも、1994年までは少しずつ増加していたのが1995年～1997年間に3982件に急に増えていることがわかる。またそれを境に年々減少していることもいえる。

ここでは件数の比較だけを挙げてみたが記事の内容など詳細に調べると「いじめ」が人々の間にどう捉えられ、変化してきたのかが浮かび上がってくるだろう。

【参考資料】聞蔵DNA for Libraries 朝日新聞全文記事検索

う「運試し」の社会学

人はどんなときに「運試し」をしたくなるのであろうか。大抵運を試したくなる瞬間は、立ち足はだかる課題を超えようとするときにやってくるであろう。しかし課題が超えられそうもない「解決不可能な課題」だとしたら、それは運を試すには最適とはいえない。逆にすぐに解決できてしまう「解決簡単な課題」でも運を試すには最適とはいえない。「運試し」に最適な課題とはその課題が解決できるかできないか微妙なところで、なおかつその課題が失敗に終わった（よい結果がでなかった）としても自分にかかるリスクが小さいときに「よし、運試しにやってみるか。」と思うのではないだろうか。よい結果が出たら自らの成果になり、よい結果にならなくても「運がなかった。」と言えは済んでしまう。「運試し」は、どちらにも説明可能な面を秘めているいわば自分を正当化するための資源として用いられているのではないだろうか。

え「エプロン」の社会学

エプロンにはどのような役割があるか。もちろん料理をしていて着ている服が汚れないようにする役割もある。またたとえばある店に入りエプロンをしている人を見かけたら、

そこの店員であると思うだろう。このように制服としての役割も果たしている。しかし、エプロンを着てお店の中で立っている人がいたとすると、その人が店員として取るであろう行動も含めてその人は店員であると思うだろう。エスノメソドロジーではそれを「カテゴリーに結びついた行動」というが、客がそのエプロンを着て立っている人に対して注文を言うことも、クレームを言うことも実に「当たり前」なこととして成り立つのもこの「カテゴリーに結びついた行動」に説明されるといえる。

このようにエプロンをしている人(店員)、注文をする人(客)の相互行為の一部として、エプロンを捉えることも可能である。

【参考文献】山崎敬一編、2004、『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣。

お「おたく」の社会学

おたくという言葉の意味が変わってきている。今までのおたくというイメージは「部屋に閉じこもって一人でパソコンをいじっていてそういった趣味に没頭している人」といった暗い、変な人のイメージがあった。福祉社会辞典でもおたくは「1980年代後半、情報化、消費社会化が結果したパーソナリティの典型的一形態。アニメーション、パソコン、ビデオなどの一部の趣味の世界に没頭することで社会との関わりを遮断し、自分の世界に閉じこもりがちな人間のこと。」としている。しかし、そういう人たちが存在することに肯定的に捉える社会が進んでいることで「おたく」の捉え方も変わってきているのではないだろうか。

【参考文献】新井克弥、1999、「おたく」in 庄司洋子・木下康仁・武川正吾・藤村正之編『福祉社会辞典』弘文堂：91-92。

か「カラオケ」の社会学

カラオケという場を構成するのは歌う人と、聴く人である。歌う人、聴く人、という場面上的ポジションは、固定したものではなく交代でそれを任されるという仕組みがある。

更に、歌う人というポジションで果たすべき役目は、歌を歌うことだけではない、という暗黙のルールがあるように思う。つまり、歌う人は歌を歌うだけでなく、聴く人にも気を配りながら、場にふさわしい歌い方、選曲をすることが望ましいという共通の認識があるのではないだろうか。同様に、聴く人というポジションにも暗黙のルールがあると考えられる。例えば、聴く人は、聴いている間に次に自分が歌う曲を検索し、入力しておかなければならない。ただ聞いているだけではいけないのだ。ただし、次に歌う曲を検索するのに夢中になり、今歌っている人の歌を聴くことを忘れてしまうような態度も望ましくないと考えられる。バランスが大事なのである。

ポジションの割り振られ方や、割り振られたポジションでの振舞い方は、集まるメンバーによって様々な形態をとると考えられる。

き「喫茶店」の社会学

喫茶店に求めるものは時代の変化と伴にどう変わってきたのだろうか。喫茶店で流れる音楽、客層、喫茶店に来る目的、立地などからその時代を反映しているものが見えてくるのではない。喫茶店と言えばナポリタンスパゲティなどを想起する人もいるだろうが、それは人々の西洋文化への憧れを反映し、メニューに取り入れる店が多かったからではないだろうか。昔は、外食店を兼ねる喫茶店が多かったようだ。最近では、インターネットカフェやまんが喫茶などが出来、昔の喫茶店とは異なる利用のされ方がなされるようになってきた。また、ペットを中に入れることが出来るカフェもあり、利用の仕方は多様化してきている。

く「薬」の社会学

人々が薬に対して持っている期待は時代とともに変化している。病院に行かなければ薬が手に入らなかった時代、人々が薬に期待していたのは病気を治療するという目的を達成することだったと考えられる。つまり、薬は治療目的で用いられていた。しかし現在では、様々な薬が病院に行かなくても、例えばドラッグストアなどで簡単に手に入るようになった。それに伴い多くの人々が薬を手軽に飲めるようになったと考えられる。更に、薬を飲む目的が病気を治療することから病気を予防することにシフトしてきているように思われる。例えば骨粗しょう症を予防する目的でカルシウムを多く含むサプリメントを飲むなど、健康の促進、維持を図ることにより病気を予防するという目的でサプリメントや市販の薬を利用する人が増えてきているのではないだろうか。

更に、サプリメントや市販の胃薬などは飲んでいれば安心するという効果もあると考えられる。それは、人々が薬の効果を期待し、信用している部分が多いからではないだろうか。

け「喧嘩」の社会学

喧嘩は相手がいなければ成り立たない。喧嘩をする相手によって態度や、手段などは変化する。殴りあい、口げんかの他にも、お互いに無口になるというタイプの喧嘩もある。喧嘩には、相手の出方によって自分の出方を決めるという側面がある。そこには、相手の出方を見てリスクも考慮に入れ、最も適切な出方を選択するという策略が潜んでいるのである。喧嘩にもルールがあり、お互いにとって全く利益の上がないことは避けるよう働きかける合図のようなものがあると考えられる。

こ「言葉遣い」の社会学

言葉遣いは常に変化している。例えば、昔から使われてきた言い回しが別の言葉で置き換わる、また、全く別の意味に捉えられるようになるなど、様々な変化を遂げる。言葉遣いの変化は社会の動きを表している。

さ「サーカス小屋」の社会学

私たちが映画を観たりする時、特に外国の映画を観るとき、外国の古いサーカス団や、田舎町などをまわる小規模なサーカス団を目にすることがある。その団員の中には、病気のために成長が止まりまるで子どものような容姿をした方や、身体に障害を持つ方などがしばしば見られる。また、日本においては、昔のいわゆる見せ物小屋も同様であると考えられる。

それらの人びとが、自分の障害を「見せ物」として観客に披露し、生活するために稼ぐという人権を無視したような（当事者たちがそう考えていなければどうかはわからないが）ある種特異な社会であると思われる。当事者達がどのように感じその仕事に従事しているのか、また、そこではどのような生活がなされどのようなコミュニティが形成されているのかということが考えられる。

し「食事」の社会学

今日、日本において経済は発展し、人間が人間として生きていける最低限の生活は保障され、全世界においてもそれを超えて豊かな社会となっている（ホームレス等の問題はあがあるが）。そういった状況の中で、生きるための食事から、「生きるため」の意を超えて、健康のため、楽しむためといった、食事に対する姿勢が見られるように思う。そういった中で、家族が同じ時間に食卓を囲むことができずに、家族団らんの場が持てないとか、手軽に食べられるが栄養に偏りが見られるファーストフードを多様するといった様々な問題が挙げられる。

社会が豊かになり飽食の時代にあるけれども、その反面そのことによって生み出された新たな問題について考え、クリアしていかなければならない。

す「スポーツ」の社会学

現在、多種多様なスポーツが存在し、メディアでも毎日、野球やサッカー等の試合結果や情報等を目にする。が、プロ野球やプロサッカーといったことを想像するとき、男性がするスポーツであるといったイメージが浮かびやすい。もちろんプロの女子サッカー選手などをテレビで拝見することはあるが、男性選手に比べると格段に少ないように感じる。スポーツをするといったときに、性別によってそのスポーツが決まってしまうのか、そのスポーツにとって性別が規範となるということがあり得るのだろうか。

せ「選択すること」の社会学

日々の生活の中で、選択をするという場面は至極当たり前の場面で、選択を繰り返すことで日々の暮らしが積み重ねられている。

私たち多くの日本人は、生まれたときから何の迷いもなく、日本人として日本語を話し、

日本人ということこそ意識することもなく生活している。しかし、他国を考えると、多言語国家（日本もそうであり、単一言語国家を探す方が困難であると思われる）が多く見られ、同国内においても予想をはるかに上回る数の言語が話されている。フィリピンではその話される言語によって社会的な階層が分けられ、母国語ではなく英語を話せるものが高い階層となる。英語を話せなければ、高い給料がもらえるような管理職といった仕事につくことは難しい。言語アイデンティティは自己を自己と見なすことのできる資源の一端であると考えられるが、そういった状況の中で彼らは、どのように考えどのように言語を選択しているのだろうか。

そ「葬儀」の社会学

自身の経験から、「お葬式」は地域コミュニティ全体の行事であるといえると思う。しかし、現在では農村部においても自宅ではなく葬儀会社の式場で行うような、近隣住民の手を借りないような葬儀が多くなってきているのではないだろうか。都市部では更に加速し、親戚にも教えずに家族内だけで葬儀を行うといったことがあるようだ。昔葬儀における近隣者や親戚の役割や関係はどのように移り変わっていったのだろうか。

た「体操」の社会学

私たちが小学校で行っていた体操は、皆で動きを揃えることが重視されていた。戦時中は軍事訓練・軍事教育を目的として行われていたが、その名残であるとも考えられる。戦後は、体を発達させる為、体力をつける為という意味づけになった。現在は、皆でいっせに行うラジオ体操を始め、個人のペースで行うストレッチやヨガなど、様々な体操が注目されている。女性誌などでも、ストレッチやヨガの特集が組まれているのをよく目にするようになった。その目的としては、健康増進やダイエットが挙げられる。体操に対する意味づけは時代と共に変化している。その意味づけをみていくことで、その時代の人々の価値基準などが分かるのではないだろうか。

ち「チャイルドシート」の社会学

子供は社会的に守られる存在であるという考えが反映されている。また、車が普及し、車による事故が多い中で、車を無くすのではなく、事故時の被害を少なくするという対策のひとつでもある。

つ「つまみ食い」の社会学

つまみ食いは、人々が考える食事の形から逸脱している行為としてマイナスのイメージが強い。しかし好きな時に少しだけ食べるつまみ食いは、とてもおいしく感じられる。その特徴を利用したのが居酒屋ではないだろうか。好きなものを少しずつ、たくさんの種類を食べたいという人々の願望とマッチし、普及していったのではないだろうか。

て「テトリス」の社会学

上から落ちてくるブロックを積み上げて消していくゲームである。10年ほど前に、携帯できる小さなテトリスが流行した。現在は、携帯電話でダウンロードでき、いつでもどこでも手軽にできるようになった。それに加え、やり始めてもすぐに終わることができるため、待ち時間など、ちょっとした時間を潰す手段として、利用されていることが多い。携帯電話の普及とともに、テトリスに対する人々の意味づけも変わってきたのではないか。ゲームを楽しむという目的に加え、手軽に時間を潰す手段としての意味づけである。また、通常、携帯電話を触っている人に声をかけたりすることは避けられる。よって、個人主義の社会を表しているともいえる。

と「時計」の社会学

我々の社会では、時計は時間を知る為の道具として必需である。例えば学校の授業も時計の指す時刻を基に始まり、終わる。時計があるおかげで、我々は共通の時間を持つようになり、一日を効率よく使えるようになったはずだ。その一方で、「時間に縛られる」という言葉があるように、時計がある為に「時間」という実態のないものに人々が拘束されているのが、我々の社会である。

な「夏休み」の社会学

現代では企業、官庁などにも普及したが、元々は、近代学校教育制度によって登場した「休日」である。特徴としては欧米諸国と比べたとき、正月休み、ゴールデンウィークなどとともに、一斉休暇的な感覚である。これは日本人の画一主義、横並び主義の表れとよく言われる。実際、企業では8月15日の盆を中心として一斉休暇に入り、帰省ラッシュがおこる。ただ過ごし方としては、盆の祭礼や祭りを中心としたものから、リゾート型、マリンスポーツの流行のように個人化していくながれにあるようだ。

に「日記」の社会学

日記が広く一般化してきたのは、学校が誕生し文字が普及したことと関係する。学校は、書く習慣をつけさせるために日記をつけることを指導したが、これは農事記録をつけるといった実務的な効用を考慮したものだった。しかしこれが結果的に、私的な内面の記録となり、自己を省察し内省する近代的個人を生み出すきっかけとなった。しかし、90年代に入り、コンピュータ通信の発達で、人に読まれるものとしての日記、他者に向けられた自己創造としての機能を持つようになった。日記はコミュニケーションの手段へと変化している。

ぬ 「ぬるま湯」の社会学

ぬるま湯とは温度の低い湯、風呂のことであり、ぬるま湯につかるとは現在の安楽な境遇に甘んじてぬくぬく過ごすことを指す。一昔前までは、日本のサラリーマン生活を指し、「こんなぬるま湯生活嫌だ」という若者が自分探しの旅に出るといったストーリーに使われていた。ぬるま湯という言葉は、ウサギ小屋の企業戦士といわれた日本社会のもう一つの側面を言い表したものである。

ね「眠り方」の社会学

フィリップ・アリエスの「子供の誕生」によれば中世では子供は家族とともに同じベッドで眠っていたという。近代に入って子供部屋と大人部屋が生まれ、保護し依存させる対象としての「子供」が誕生した。また日本では個室としての子供部屋が普及するのは、昭和40年代に入ることであるが、子供の自立性を養う上でのこの判断は、家族の団らんを壊し、非行の温床になるというような批判もあった。

の「野の精神（の現代的課題）」の社会学

かつて在野の精神という知の在り方があった。権力を志向せず、民のなかにあるというスタイルである。現在民衆や庶民といった言葉で、対立軸を設定できなくなる状況の中で、野の精神がどんな層の言葉を代弁していくかも見えなくなった。また在野の精神を掲げる大学もいくつかあるが、こうした言葉の伝統に熱くなる学生は存在するのだろうか。

は「ハンバーガー」の社会学

ハンバーガーのイメージを聞かれたら何を思い浮かべるだろうか。「早い」「手軽に食べられる」といった良い面も出てくれば「食べ過ぎるとよくない」など現代食生活の乱れの代表として思い浮かべる人もいよう。

日本マクドナルドのCMに「ファーストフード。そのおいしさや安心は、スローにつくられています。」というフレーズがある。これもイメージの変容をねらったひとつの戦略である。イメージとはそのものに良い面を与えもするし悪い面を与えもする。企業や社会が生み出す「イメージ」で「ハンバーガー」を捉えてみるのもおもしろいだろう。

【参考資料】日本マクドナルドホームページ www.mcdonalds.co.jp

ひ「病気」の社会学

病気にかかるといつもより周りから心配されるといった経験は誰にでもあるのではないだろうか。ここでは治療すべき対象としての「病気」ではなく、病気と人から判断されたり認められたりするラベルとしての「病気」を考えることをしてみたい。ラベルは社会から貼られるものでありそれによってラベルが貼られた対象者は、社会に対する見られ方が大きく変化することもある。病気にかかることと特別扱いにされるのも、病気というラベルが引き起こしたものであるといえるのではないだろうか。

ふ「不潔」の社会学

人がどのような時に不潔と感じるかは、清潔が必ず相対的になければ感じることはできない。つまり、他人が不潔と感じたときはそのひとの清潔がどのくらいの感覚なのかを見ることができるともいえる。不潔とを感じるか清潔とを感じるかの程度は個人によっても違う。また同じ国にいとそれは少しの差を感じるかもしれないが、国が違つとますますその程度も変わってくる。不潔か清潔か決めているのは自分のようで実は自分の置かれている環境に大きく左右されている。社会学でいうとそれは、「集団」や「文化」とリンクさせて考えることができるであろう。

【参考文献】白樫三四郎編、1997、『社会心理学への招待』ミネルヴァ書房。

へ「へこむ」の社会学

NHKの番組「お元気ですか日本列島」の気になる言葉で「へこむ」という言葉が取り上げられていた。それによると、

- ・へこむ＝一時的で軽傷の場合（例えば成績が悪かった、等）
- ・落ち込む＝継続的で重傷の場合（例えば異性にふられた時、等）

と若者は使い分けているということであった。落ちこむことにも程度をつけその程度の差ごとに違う言葉を使うのは、落ち込む機会も増えまた落ち込むといったひとつの言葉では表すことができないくらい落ち込む種類も増えてきたのであろうか。アンケートでの意識調査からこのような問いにアプローチしてみることができるのではないだろうか。

【参考資料】日本放送協会ホームページ <http://www.nhk.or.jp/>

ほ「保育園」の社会学

少子化対策により、幼稚園にも保育園と同じような機能（時間延長保育など）をつけたサービスをつけられるようにしている。保育は今までどのような流れで日本に存在しているのだろうか。そしてそのようなサービスは保育園側、利用者側にどのような影響を与えるのか。インタビュー調査などを通じて今後の「保育園」「幼稚園」のあり方を考えていく。

ま「マンション」の社会学

マンションの隣同士の住人はどのようなコミュニケーションのとり方をしているのだろうか。例えば、新しく入居する時、隣近所に挨拶をするという習慣は現在もあるのだろうか。また、隣の住人の騒音が激しい場合、どの程度の抗議なら許されるのだろうか。例えば隣に向かって「うるさい！」と大声で叫ぶ、ドンドンと壁を叩く、などの方法が考えられる。更に、隣の住人にばったり会った時、どのような態度を取ることが望ましいとされているのだろうか。知らないふりをする、会釈をする、会話をする、など様々なパターンが考えられる。これらは、住人により異なると考えられるが、どのようなコミュニケーション

ヨンのあり方が最も心地よいかは、生活の中で試行錯誤しながら見出されていくのではないだろうか。毎日の、壁を隔てたコミュニケーションの中でお互いにとって最も居心地の良い接し方が生まれていくのである。

み「見つめること、見つめないこと」の社会学

人をジロジロ見るという行為はあまり好ましくないという印象があるが、実は普段よく行っているのである。例えば美容院で、鏡越しに美容師を観察する、電車の中で、視線を合わせないように調節しながら他人を観察するなどの行為を例に挙げることが出来る。また、赤ちゃんもじーっと人を見つめることがある。見つめるという行為は社会的な経験が未熟な赤ちゃんでも為すことができるのである。それに対し、見つめないという行為を、私たちはいつ身につけるのだろうか。見つめないというテクニックは発達の中の段階で学習されるのだろうか。見つめないテクニックを身につけないまま、見つめることだけを実践するのが許されるのはいつまでなのだろうか。私たちは見つめないテクニックを身につけることにより、見つめる機会を再び獲得したのではないだろうか。

む「無駄」の社会学

無駄と捉えられるものは時代とともに変化していく。例えば、食事に時間をかけるのは無駄なことだという考え方から、ファーストフードが発達してきたが、現在アメリカでは口ハスという考え方が注目されているようだ。(LOHAS = Lifestyles of Health and Sustainability) これは、ファーストフードの考え方とは対称的である。社会生活全体を健康的で持続可能なものに変えていこうとする取り組みである。これまで無駄なこととして排除してきたことを見直していく動きの1つとして捉えることができるだろう。

め「目」の社会学

「目を見る」ということに対して人々が持っているイメージは国によって違うのではないだろうか。日本以外のある国では、電車などで他人と目が合ってもあわてて目をそらすことはない、ということを知ったことがある。一方日本では電車で目が合った時困るから、読む気はなくても本を開けていたり、目を瞑っていたりする。日本人にとって「目を合わせる」ということは何か特別な意味があるのではないだろうか。

も「餅つき」の社会学

餅つきの行事は、時代とともにどのように変わってきたのだろう。昔は杵と臼を使って搗いていた家も多くあっただろう。現在は機械を使って搗く家の方が圧倒的に多いのではないだろうか。また、餅つきの行事は近所づきあいとどのように関わっていたのだろうか。餅つきの形態が変化することにより、近所づきあいも変わってきたのではないだろうか。

や「優しさ」の社会学

私たちが日常使用する言葉は時代によって変化し意味も変わっていく。今日使用されていたり、感じ取ったりする「優しさ」とは、いつ頃から定義されるようになったのだろうか。おそらく1000年前のそれとは、意味も使い方も異なっているだろう。その移り変わりや変化、またはその起源が、その時代時代を代表する文学・小説等を見ていくことで、考察できるであろう。

ゆ「結納」の社会学

結納というと、少し古くさく聞こえ、昔と比較すると多少減少しているかもしれないが、現在も続いている結婚前の伝統的な儀式であると思われる。その起源がいつ頃からなのだろうか。また、現代の結婚観としては個人と個人の結婚というのが多くなってきていると思うが、結納と聞くと家と家との結婚というように思われる。婿と嫁の両家の金品のやりとりで、「家に嫁をもらう」というような、家と家との結婚という（古い）考え方、慣習がまだ存在しているのはどうしてだろうか。また、現在の結婚観はこれからどのように変化していくのだろうか。

よ「装い」の社会学

私たちは、常に衣服をまとい化粧をし身体を着飾り装うことで、生活をしている。衣服をまとうことは、社会生活をおくるなかで規範とされることである（そうしなければ犯罪者になってしまう）が、それを超えて私たちは、自分の好みに合う服装や、流行の服といったオシャレをする。化粧においては、しなくても犯罪者にはならないけれども（社会人としての身だしなみであるともいえるが）より美しくみせるために、化粧をしたり、アクセサリーを着けたりする。こういった衣服に対する考え方はどのように起こりどのような移り変わりをしていたのだろうか。

ら「ラジオ」の社会学

ラジオは、テレビとは違うメディアとして発展してきている。同じマスメディアとひとくくりにはいけない。ワイドショー化、アナウンサーのパーソナリティ化、これらの番組づくりの変化の背景にあるのは、「少数者のためのメディア」になったというその「視聴者像の変化」だ。昼はドライバー、休日は農業労働従事者、深夜・早朝は、高齢者、テレビをみる「大衆」とはちがったターゲットがねらわれている。しかし、このような細分化されたターゲットの取り方こそは、「成熟した消費社会」「消費のフレキシビリティが増大した現代的消費社会」にふさわしいマーケティングのあり方なのではないか。

ラジオ番組を送る側がどのような戦略をとっているかを、長期間のラジオ局における参与観察で解明する。

り「リスト」の社会学

ものをその名前や属性によって並べること。リストを定義すれば、このようになるだろう。ただ並べれば良いわけではない。ある基準に基づいて並べることがそこでは実践されている。ある並べ方を「当たり前」とみなせるかどうか？、ある並べ方から、どのような新しい発想が触発されるのか？、リストをめぐる社会学の領域は思いがけず広い。

本研究では「リスト」に関連しての「カテゴリー」研究を試みる。並べる、という原初的な秩序形成作業の中に私達の社会観が透けて見えてくることだろう。

る「ルックス」の社会学

コンビニの蛍光灯の明るさは、商品を買わせるための明るさだという。光はおもいのほか低消費電力によって提供可能なので、このような使われ方もされるようになったのだろう。その一方で、個室系の居酒屋では「間接照明」ばやりである。この「明るさ」と「暗さ」をめぐる配置の現代的有り様を、フィールドワークによって探っていきたい。

れ「冷蔵庫」の社会学

冷蔵庫は、1950年代までは存在しなかった。ひとびとは、その日食べるものをその日つくるかし、保存した食物を食べたい場合には、塩蔵品、乾物で対応するしかなかった。しかし、冷蔵庫ができたおかげで、様々な食品をかなり生のまま保存できるようになった（と宣伝されていたはずだ）。

ところが、現在（2005年）、このような、当初期待された使われ方を冷蔵庫はされているだろうか？コンビニにいけば、24時間営業のスーパーに行けば、つねに新鮮な食材が存在する。家庭内で食物を保存する必要性低下している。にもかかわらず、私達の冷蔵庫は満杯だ。「そろそろいいだろう」と、たべなくなったものの、すぐに捨てるのは惜しい食物の、時間稼ぎ安置所化している。これはどうしたことなのか？

冷蔵庫の機能は、変化している。その変化を複数の家庭の冷蔵庫の実際の使われ方を追うことで明らかにしよう。組み合わせデータとして、各世代別に過去の冷蔵庫の使われ方をインタビューしよう。

る「ロボコップ」の社会学

古くて新しいテーマ。「自分探し」。ロボコップは、自分を探す。私達人間は、自分の似姿が、どのように「自分探し」をしているか、に惹かれて「ロボコップ」の物語を紡ぐ。「似姿」の問題こそ、「神学」の根源的問題であったことなど忘れて、新しい「似姿」の物語を紡ぐのだ。しかし、そのような作業の歴史的伝統性が、ついにはいま失われつつあるのではないか。「個人」を「謎」としつつ、「個人」を育んできた、「近代の物語」が失われようとしている。この本当の「展開期」を、とりあえずは「ロボコップ・シリーズ」に対する緻密な映像分析によって実現していきたい。

わ「笑い」の社会学

笑うことは体に良いということは、医学的にも言われている。人々は漫才やコント、喜劇を観る為にお金を払う。テレビでも、バラエティと呼ばれる領域で、笑いを提供している番組は数多い。現在の日本では「笑い」はひとつの市場となっているといえるだろう。

を「(くっつき)を」の社会学

私たちは「を」を、くっつきの「を」と呼ぶ。「を」と「お」は発音するときは同じであるが、書くときは区別される。人々はその区別をどのようにして習得するのであろうか。その過程を観察してみるのもおもしろいかもしれない。

ん「ん？」の社会学

人々が相手に疑問を示すときに使われる。この場合、顔の表情がセットであり、重要である(大抵の場合は「ん？」というときには目を見開く)。言われたほうは、その一言と表情から相手が理解していないと判断する。また、この「ん？」は相手に会話を移すサインでもあり、言われたほうは何かしゃべることが求められ、言われた本人も求められていると判断し、話始める。会話場面においては、自己訂正は他者訂正よりも優先されることから、「ん？」は相手を否定せずに疑問を表す方法であり、相手に配慮を示しているといえるのではないだろうか。

徳島大学総合科学部社会学研究室報告 既刊（国立国会図書館等所蔵）

- | | | |
|----|--|------------|
| 1 | エスノメソドロジーとその周辺
- 平成9年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 1998年3月発行 |
| 2 | ラジオスタジオの相互行為分析
- 平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版) - | 1998年10月発行 |
| 3 | エスノメソドロジーと福祉・医療・性
- 平成10年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 1999年2月発行 |
| 4 | 障害者スポーツにおける相互行為分析
- 平成11年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第一版) - | 2000年2月発行 |
| 5 | 日常生活の諸相
- 平成11年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 2000年2月発行 |
| 6 | 現代社会の探究
- 平成12年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 2001年2月発行 |
| 7 | インタビューと対話の相互行為分析 気配りと配慮の社会学
平成14年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第一版) | 2003年2月発行 |
| 8 | インタビューと対話の相互行為分析 気配りと配慮の社会学
平成14年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版) | 2003年9月発行 |
| 9 | 社会学の窓 - ドラマティックな日常生活 -
- 平成15年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 2004年2月発行 |
| 10 | 義肢・装具のエスノメソドロジー
- 平成16年度徳島大学総合科学部地域調査実習報告書 - | 2005年2月発行 |

生活の中の相互行為

(平成17年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 -)

発行日 2006年2月14日

編集 榎田美雄

〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町1丁目1番地

(088)656-9308 E-mail:Kashida@ias.tokushima-u.ac.jp

<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/index.html>

発行 徳島大学総合科学部社会学研究室

印刷・製本 平成17年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール
